魔法先生ネギま! ～オスティアの閃光～

爆破はロマン堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！　～オスティアの閃光～

【Ｎコード】
Ｎ０８３３Ｘ

【作者名】
爆破はロマン堂

【あらすじ】
『その男、ありとあらゆるモノを爆破する』
神様から能力を貰ったオリ主が、出会った少女達を護る為に健気に頑張るお話です。チート主人公なので、その辺はご注意を！　タグも注意！　皆様のお陰で６５万ＰＶ、１０万ユニーク、お気に入り１１００件突破！

prologue（前書き）

初めましての方は、初めまして。既にご存知の方は…初めまして？
仕事中にふと沸いたネタを元に描いてます。生暖かい目で見ていただければ幸いです。
感想・誤字などありましたら宜しくお願いします。

prologue

確かに数多くのテンプレ的な二次創作をこれまで読んできた。
そして、これは面白いだの、陳腐過ぎるだの色々と批評もしてきた。
だけど…

「まさか自分がその立場になるとは…」

何も無い白いだけの空間。まさに定番中の定番な場所に1人で佇んでいる。何という、テンプレ乙。
さて、良くある二次創作通りだとこの後は神様とやらが大抵はやってきて…

「まあ、その通りだね？」

「どこまでもテンプレ通りですか…」

「そうだよ？　不変であることって実はとても貴重なんだ」

「まあ、確かに変えないって事は、逆に難しい事ですからね」

突然現れた人物、状況的に恐らく神様はそう俺に語りかける。変える事はそれほど難しい事ではない。
でも、伝統などを変えずに守り続けていく事は非常に困難な事だ。
変化を強要するモノは多々ある。他国からの文化流入や、時代の趨勢、嗜好の変化やらｅｔｃ

「さて、展開は読めているだろうけど、君はめでたく転生する事になったよ。行き先は君が毎週欠かさず立ち読みしている『魔法先生

ネギま！』の世界だよ」

「あの超展開の世界ですか…」

確かに好きな作品に自分が転生出来ることは喜ばしい事なのだが、最近の超展開には正直ついて行けてない気もする。まあ、それを除けば転生先として悪くはないだろう。ぶっちゃけ、原作に関わらないって言う選択肢もある訳だし…

「どう過ごすかは君の自由だからね」

「積極的に関わるか…平凡な生活をするか…」

まあ、関わった方が多分だけど面白いだろうな。結果として自分が見た事の無いストーリーへと変化する可能性だってある訳だ。その当事者としてその場に立ち会えるのは、至高の時と言えるのかもしれない。

「とりあえず、これから君を転生させる訳だけど…能力とか幾つくらい欲しい？」

「へっ？…あー、テンプレだと大抵は神様が個数を制限するような？」

大抵は2~3個とかだっただろうか？　或いは、生前とか前世が積んだ善行だかをポイント化して云々ってのもあったような…でも、基本的に神様側から言われて転生者達が選んでいたのは間違いないと思う。

「制限なしって言ったら、人間はどこまで強欲になれるのかなって

思ったんだよ」

「あはは…」

まあ、貰えるなら遠慮なく貰うって人間もいるだろう。貰って損は少なくともしないだろうから…

手札は多い方が基本的には良い。勿論、手札の数に慢心する人間もいるだろうけどな。

「突然言われると悩みますね」

「ゆっくり決めていいよ？　どうせ、ここでの時間の流れなんて無意味なモノだから」

「……」

さて、どうするか？　神様の言う事を正直に受け取れば貰える能力に数などの制限はない。

でも、何かある様な気もする…しかも、後々大きく影響して来そうな何かが。

あくまでも勘だけど、今までこの手の勘は良く当たったんだよな。

だとすると…

「あの…」

「ん？　決まったかな？」

「はい」

「じゃあ、聞こうか」

こちらを向き直った神様。ちなみに見た目は２０代前半の好青年って感じだ。今更だけどな…

「欲しいのは『ありとあらゆるモノを爆破する能力』。対象は存在するありとあらゆるモノ。それらに関連する要素を自由に操作出来る事と、能力の行使によって直接的・間接的に生じる影響に対する絶対的な耐性を下さい」

「面白い能力を選ぶね。大抵の転生者は、他の作品の能力だったり技術だったりするけどさ」

最初は、Ｆａｔｅの宝具とか固有結界なんてモノを考えたけど、テンプレ過ぎるのもつまらない。オリジナリティのある能力が欲しかったんだ。それに…

「「爆破はロマンだ！」」

「えっ…？」

「ふふふ、君とは気が合いそうだ」

どうやら、目の前の神様も爆破を芸術と考えている思考の持ち主だ。もしかして、俺が選ばれたのってそれもあったんだろうか…って唯の自惚れだな。でも、死んでからだけど同士に会えたのは素直に嬉しい。

「他にはいらないのかい？」

「転生出来るだけでも十分なのに、その上で能力までも貰えるんで

すから。十分ですよ」

良く二次創作だと幾つも能力を貰ったり出来るし、それを当然だと受け止めている節がある。まあ、大抵は神様のミスとかで死んだ訳だから償いって言う意味もあるんだろうけどさ。そもそも、別の世界に転生とは言え、もう一度生きられるってだけでも十分な償いだと思う。本来なら、終わってしまった命の物語はそこまでだったんだから。それを再度送れるだけでも俺は十分にありがたい事だと思うんだ。まあ、あくまで個人的な意見だけど…。

「へえ、見上げた考え方だね。そんあ君にサービスを上げよう」

「えっ？　いや、いらないですよ？」

「これは僕が勝手に上げるだけ（ケチだと思われたくないから）だから、気にしないで受け取って欲しいな？」

「はぁ…（思ってないんだけどな…）」

十分過ぎるんだけど。でも、好意を無碍にも出来ないし。出来るだけぶっとんだモノじゃないことを祈ろう。まあ、神様と基準が違うって大前提に気がつくべきだったけど…

「取り合えず、こんなモノかな？」

「えっと…っ！？」

脳裏に鮮明に描かれたのは、神様がサービスでくれた内容だった

・黄金率ＥＸ

・幸運ＥＸ
・直感ＥＸ

「無茶苦茶だ！！」

チートどころじゃない！　チートの域超えてるがな！？

「ん？　あの世界ならコレくらいなら平気だよ？」

「いや、否定は出来ないですけどね…せめてランクを落として下さい」

「君は、思った以上に欲が無いんだね。じゃあ、それぞれランクダウンさせて…」

・黄金率Ａ
・幸運Ａ
・直感Ａ

これ位なら大丈夫かな。後は、自分の努力次第であの世界で生きていけばいいしな。そういえば、行く年代とかどうなるんだろうか？

「ちなみに、原作で言うとどの辺りに転生ですか？」

「大戦時だよ？　その能力を存分に活かせるじゃないか！」

「そうすると、原作介入時は結構な歳いくんですね…」

「おや？　原作の彼女達と仲良くなりたかったかな？」

「折角の世界ですからね、好きなキャラと仲良くなれたらって思ったり？」

何十人と愛せる程の度胸は無いけれど、好きなキャラ達と愛し愛されてみたいって願望ならある。折角、あの世界に行ける訳だし、その辺は楽しんでみてもいいんじゃないだろうか？

「じゃあ、大戦から原作開始までは一時的な不老にしてあげるよ。容姿とかどうする？」

「えっと、どうしましょう？」

「自由に決めていいんだよ？　もしくは僕が決めようか？」

「お願いしてもいいですか？」

「じゃあ、適当に君の中のイメージから決定するよ」

そうして出来上がった俺の新たな姿は、『あっちこっち』の音無伊御が少し大人になったバージョン。年齢は１８歳位に設定されたようだ、何ていう神様印。とりあえず、女性受けが悪い顔つきにならなくて良かったと思う。さて、いよいよ物語が始まる。何が出るか…

じゃあ、元気でね。

はい、貴方も。

そんな別れの言葉を交わして俺は意識を失った。

prologue（後書き）

テンプレ通りです。数ある二次創作です。のんびりやっていきますので、宜しくお願いします。

第０話：人物紹介（ネタバレ注意）（前書き）

原作に入ったので、人物紹介でも…ネタバレしています。

第０話：人物紹介（ネタバレ注意）

・東西南北（とさなき）　四季（しき）　原作開始時１８歳（不老状態解除）

説明：本編主人公。別の世界からの転生者。当初は『空の境界』黒桐幹也の目つきを少し鋭くしたイメージだったのだが、作者の趣味で急遽『あっちこっち』の音無伊御にイメージが変更になった。なお、メガネはかけていない。ニコポやナデポといった女性を魅了する力は備わっていないが、女性受けはいい。原作開始まで一時的に歳を取らなくなっている。※身長は真名より少し高い。

能力：『ありとあらゆるモノを爆破する能力』
まだまだ明らかになっていない部分が多い能力。関連する要素を自由に操作出来るが詳細は作中ではまだ明記されていない。また、能力行使に伴う直接・間接的に生じる影響への絶対的な耐性を持っている。なお、この能力には致命的な矛盾が存在し、それを利用して四季のチートっぷりが今後増す予定ｗ

補足：能力以外は一般人と変わらず、魔力は辛うじて初歩的な魔法が使えるであろうレベル程度。魔法世界でラカンが見せた強さ表で言うなら、能力未使用状態は長谷川千雨と同じ1になる。能力を行使した場合は数値化不可能。なお、さり気無く黄金率Ａ、幸運Ａ、直感Ａという優秀過ぎるスキルを保有している。

・東西南北（とさなき）　明日菜（あすな）　原作開始時１４歳（本当の年齢は不明）

説明：本名アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。魔法世界のウェスペルタティア王国のお姫様。『完全魔法無効化能力』を持つ『黄昏の姫御子』。四季に助けられた事で原作とは異なり記憶を失っていない。過去をしっかりと受け入れ、前向きに今を生きている。戸籍上は四季の義理の妹として暮らしている。呼び方は『四季　兄（にい）』。なお、原作とは違い髪はストレートにしている。どうでもいい情報だが、原作よりもスタイルがいい。義妹の真名と張り合った結果らしい。

能力：『完全魔法無効化能力』、『咸卦法』

アーティファクト：現時点では不明

補足：重度のブラコン。血が繋がっていないからオッケーだとは本人談。

・東西南北（とさなき）　真名（まな）　原作開始時１４歳（本当の年齢は不明）

説明：原作では、龍宮真名だったが四季と出会い苗字は東西南北になった。褐色肌のお姉さま。魔族とのハーフだが、義兄姉はその事を全く気にせず受け入れてくれている。原作の真名よりも早い段階で麻帆良に来ているが、その戦闘能力は決して引けを取らない。むしろ、対人戦（特に対魔法使い）では上回ってすらいる。戸籍上は四季の義理の妹として暮らしている。呼び方は『四季兄さん』。原作と同様、髪型はストレート。原作より更にスタイルがいい。義姉の明日菜と張り合った結果らしい。

能力：『魔眼』、『射撃技術』

アーティファクト：現時点では不明

補足：重度のブラコン。血が繋がってないし、種族も半分は違うからオッケーだとは本人談。

・龍宮光輝（たつみやこうき）

説明：原作では、真名のペンダントの中の故人だった人物。本作では四季と出合った結果として、死ぬ事なく原作開始を迎えた。関西呪術協会へ挨拶しに行った際に出合った葛葉刀子と結婚し、一女をもうけている。イメージは原作通り。

補足：夫婦仲は良好。四季曰く、子供が出来ても未だに新婚気分。元『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』所属。西洋魔術師としても、東洋魔術師としても中々に優秀。次期、『麻帆良駐在文官』となるべく修行中。

・龍宮刀子（たつみやとうこ）　旧姓：葛葉（くずは）

説明：原作では、西洋魔術師と結婚して関東に来たが、本作では近衛木乃香の教育係兼お目付け役兼護衛として来た後、光輝と結婚した。優しい夫と、愛しい娘に囲まれた幸せな家庭を築いているお陰か、女性としての魅力が上がっている。

補足：京都神鳴流の剣士としての腕は鈍っていない。むしろ、家族がいる分だけパワーアップしている模様。男女問わず学生達からの

人気が非常に高い。

第1話：友達とオスティア回復作戦？（前書き）

連続投稿

第1話：友達とオスティア回復作戦？

トンネル越えると雪景色ではなく、どこかの薄暗い室内の様な場所に出た。いきなりの不法侵入の様である。さて、どうやって言い訳しようかと考えていたが…気がつくと目の前に鎖に繋がれ能面の様な表情を浮かべた少女がいた。

「あれ…？」

「…ダレ？」

えっと、この子ってアレだよな！？　確か昔の明日菜だろ！？　えっと、アスナ・ウェス…何とか！

「あー、名前か…」

そう言えば、名前をどうしようか？　生前の名前を名乗るってのもな…少なくとも容姿は全くの別人な訳だし。なら、せっかくだから痛いネームにしようじゃないか！！

「四季（しき）…東西南北（とさなき）　四季。君は？」

「アスナ…アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「そうか、いい名だ。あっ、1つ聞いてもいいかな？」

「…ナニ？」

「ここは、オスティアかな？」

コクリと頷く彼女。それにしてもいきなりウェスペルタティア王国の王都オスティアとはね。これは立ち回り方によっては大きく歴史を改変してしまう可能性があるか…でも、ナギ達『紅き翼』に任せると彼女は記憶を封印される結果になる。確かに、忘れて一般人として暮らした方が幸せかもしれないが、それは彼女にとって最善とは限らない。あくまで選択肢を選ぶのは彼女だ。俺が出来るのは選択肢を増やす事ぐらいだ。だから…

「よし、決めた！　アスナ、友達になろう！」

「…トモダチ？」

「そう、友達。一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に怒って、そうやって同じ記憶を共有しよう」

「……」

反応がない。やはり感情の起伏が抑えられているこの頃の彼女には、無茶な提案だっただろうか？　正直に言ってしまうと上手い手が他に思いつかないってのもある。でも、少しでも早く彼女の笑顔が見てみたいと思ったのだ。

「…シキ」

「ん、どうしたアスナ？」

「…トモダチ」

「ああ、友達だ」

そう呟いた彼女の頭を優しく撫でる。彼女は特に反応を示す事なくされるがままだが、微かに目を細めたように感じた。今は、まだ友達の意味さえも理解は出来ていないだろうし、俺の言葉を返しているに過ぎないかもしれない。でも、それでも構わない。キッカケさえ作れれば、後は俺次第だ。まずは、これか起こるオスティア回復作戦を乗り切ることが必須か。

「習熟しないとな～」

「…？」

俺の呟きが気になったのか、俺の方をジッと見つめるアスナ。

「俺はさ、魔法使いでもなければ神鳴流の剣士でもない。ただ吹き飛ばす事しか出来ない男なんだよ」

「……」

「これは俺とアスナとの2人だけの秘密だぞ？」

「…ウン」

それから暫くの間、俺は友達となったアスナとお喋りを続けた。お喋りとは言っても、実際には俺が延々と話を振って、それにアスナが多少の反応を見せるといった程度のものだが、焦る必要はない。いきなり彼女に喜怒哀楽がはっきりと現れる訳ではないから。

どれだけの時間が経っただろうか？　すっかりお喋りに夢中になっ

た俺は、誰かが部屋の扉の鍵を開ける音で我に返った。現在の俺の状況は思いっきり不法侵入だ。見つかれば確実に騒ぎになるのは間違いない。でも、ここで騒動を起こすのはアスナの為にも避けたい。ここは回復作戦時まで大人しく捕まっておくか…

「オイ、食事だ…っ誰だ!?」

「そうだな、微妙に…怪しい者だ!!」

「し、侵入者だ!!」

「騒がなくても、抵抗しないんだがな」

そんなこんなで、俺は無事に捕らえられて地下にあった牢へと放り込まれた。

あれから数日が経った。最初にアスナの部屋に侵入した目的などを問われたが、適当に嘘を並べた。転生してきましたと言った所で誰も信じまい。それからは、この牢で鎖に繋がれて過ごしている。どうやら俺は魔法使いだと思われているようで、牢の壁や鎖に魔力を封印する術式が刻まれている。

「俺は魔法使いじゃないんだけどな」

そう自嘲気味に呟きながら、能力を制御する鍛錬を繰り返す。1日2度の食事以外は、この地下牢に近づく物好きはおらず、時間はた

っぷりあった。狭い室内なので、大規模な能力の行使は出来ないが繊細な制御の鍛錬には丁度いい。

床に落ちている小石を拾い上げ軽く上へ放り投げる。普通なら重力に引かれて自由落下するが、俺は空気を爆破し発生した爆風で上へと再び送り返す。天井にぶつかる前に今度は下向きに爆風で落とし、床にぶつかる前に上向きの爆風で打ち上げる。それを何度も繰り返す、勿論だが音が外に響くようなバカはやらない。その為の発生音の制御だ。

「もう1つ追加と…」

天井と床の間は行ったり来たりしている小石に仲間を追加する。今度は握りこぶし位のサイズの瓦礫。当然ながら、先ほどの小石と同じ威力の爆風では上へと舞い上がる事はない。爆破の威力を上げれば解決する問題だが、同時に別の問題が発生する。小石にも当然ながらその影響が出るのだ。先ほどよりも速い速度で小石は天井を目指す。

「……」

解決方法はそれぞれに適した威力の爆風をピンポイントで収束させぶつける事だ。つまり指向性のコントロールだな。別々の目標に対して最適な威力の爆風を計算し、それが周囲に影響しない様に指向性をコントロールする。ああ、分割思考とか欲しい…

そんな鍛錬を眠くなるまで繰り返した。帝国が攻めてくるまで後どれだけの余裕があるか、俺自身どこまで能力の把握が出来るか。俺の不安を他所にオスティア回復作戦開始までのタイムリミットは刻々と迫っていた。

最初に牢に入れられてから２０日が経過したある日の事、何やら騒がしくなってきた。いつも食事を持ってきてくれている兵士に聞いてみると、ヘラス帝国の大部隊がウェスペルタティアとの国境沿いに展開を始めているようだ。つまり、いよいよ聖地オスティア奪還を目的としたオスティア回復作戦が開始される。俺がすべき事は、彼女の力が使われる前に帝国部隊を葬り去る事。追い返すなんて器用な事は残念ながら出来ないし、向こうもそんな不名誉な事はしまい。

「動くか…」

まずは、手足を牢と繋いでいる手枷と足枷を爆破する。２０日ぶりの自由、軽く身体を動かして見るが取り合えず鈍った様な感覚は僅かだ。これがもっと長かったら無視出来ない影響が出ていただろうな…

目の前にある分厚い鉄の扉の鍵部分だけを吹き飛ばし、外へと出る。ここに入れられる時に歩いた道を逆に辿っていく。非常事態故か、こんな地下には人っ子一人おらず静寂が支配していた。薄暗い螺旋階段を慎重に上へと上がっていく。出来るだけ外に出るまでは無用な騒ぎは起こしたくない。

「アスナに一声と思ったけど、やっぱいるだろうな～」

原作でも彼女の周囲にはオスティアの魔法使い達がいた。なら今か

ら会いに行くと確実に対面するよな。でも、目の前で力を見せ付ければ取り入る事も出来るか？　どうせ今の俺は行く宛も、身銭もない状態だ。なら迷う事は無い…

「えっと、どこかの塔の最上階だったよな？」

どうにか、地下牢から外に出たのはいいが塔と言っても複数あってどれだか分からない。まずいな、余り時間があるとは思えないし…一か八かで行くか！

足元を爆破して、身体を上空へと加速させ飛翔する。魔力も気も使えない俺にとって浮遊術の代わりとして編み出したもの。まあ、簡単に言えば爆風を推進力に進むってだけだけどさ。連続して爆破させることで自由自在に空を駆け巡る事が出来る。見た目は学園祭で楓が見せた縮地无疆に近い。

「こんな時こそご都合主義が役立て！…っていた！？」

早速、役立ちました。…いや、自分で言っておいて何だけどご都合主義過ぎるだろう！？　最初の塔の最上階にアスナ発見って何さ！？　ちなみに既に、アスナは塔の最上階で鎖に繋がれていた。つまりもう直ぐ帝国の大部隊が攻撃を開始してくるって事か…

着地の衝撃を殺し、少し床を滑る様に塔の最上階へと降り立つ。当然ながら、その場にいた魔法使い達は驚き桃の木…違った、驚きを隠せない。

「なっ！？　お、お前は…」

「非常事態みたいだからな、勝手に抜け出してきた」

「ど、どうやってだ!?」

「今は、帝国をどうにかするのが先決だろ？　力を貸すぜ？」

「貴様１人に何が出来る…」

「百聞は一見にしかずってな。話は後だ…」

モブとの会話は適当に切り上げて俺は、中央にいるアスナへと視線を向ける。向こうも俺に気がついた様だが、特に変化は見られない。まあ、あれっきり会ってなかった訳だしな。捕まった後、心配くらいして貰えてたら嬉しいんだが…

「アスナ。ちょっと行って、帝国の連中をぶっ飛ばしてくるわ」

「…シキ」

「帰ってきたら、またお喋りしようぜ？」

「…ヤク…ソク…」

「ああ、約束する」

軽くアスナの頭を撫でて俺は再び上空の人となった。目指すは側にいた魔法使いから聞き出した帝国とウェスペルタティアとの国境線。作戦開始まで残り時間は僅か…

第1話：友達とオスティア回復作戦？（後書き）

当時のアスナの口調ってのが良く分からんｏｒｚ

第2話：友達とオスティア回復作戦？（前書き）

オスティア回復作戦終了。悩みつつも戦う主人公。

第2話：友達とオスティア回復作戦？

俺が最初に目指していたのは帝国とウェスペルタティアの国境線だったが、既に帝国の部隊は国境を越えており、展開していたウェスペルタティア側の兵士達と交戦状態に入っている様だった。多数の魔法が行き交い、帝国の戦艦からは高出力の精霊砲が絶え間なく放たれている。鬼神兵も既に多数が地上に展開しているようだ。一先ず、全体が見渡せる岩山の頂きへと降り立った。

「これが初陣とか、マジありえないわ…」

色々と愚痴りたいところではあるが、ナギ達『紅き翼』が来る前に終わらせないとな。まだ現段階では彼らと繋がりを持つ心算はない。かと言って敵対する訳でも…場合によっては敵対するのか？　まあ、その辺はこれから追々考えるとしよう。

「まずは叩きと落とすとしますかね！」

俺の能力は魔法と違い、行使の際に詠唱などは必要がないが気分の問題で手振り身振りをしてみることに。とりあえず、某大佐を真似てフィンガースナップ（指パッチン）でもしてみよう。視界に映る帝国の戦艦数隻を最初の標的に選ぶ。魔法障壁を張っていようと何の意味もない。全ては俺の思うままに…

「落ちろ…！！」

言ってから後悔したのは言うまでも無い。だが、船体の中央から前後左右に引き裂かれる様に、次々と爆散していく艦艇を見ると、そんな些細な事を気にしている余裕も無くなった。今の攻撃で一体ど

れだけの人間の命を奪っただろうか？　勿論、戦うと決めた時点で覚悟してはいたが、平和な日本で暮らしていた俺からすれば世界が違った。

「現実から目を逸らすなよ、俺」

震える身体を必死に押さえ込みながら、俺は目の前の敵を撃つべく狙いを付けていく。戦艦、鬼神兵、魔法使い…視界に入る敵を端から吹き飛ばしていく。抵抗も対処も命乞いすら出来ずに次々と散っていくモノ達。ひたすら奪い続ける、命を、声を、灯火を、希望を…全てを。

「…終わったのか？」

実時間にして5分と掛からなかっただろう。体感時間は何時間も殺し続けていた様にすら感じたが…。

「……虚しいな」

空に浮かぶのは歓声を上げているオスティアの魔法使い達。大地に広がるのは戦艦だったモノ、人だったモノの残骸だ。俺が殺したモノ達の残滓…

「戻るか…」

本当なら奪った命の為に祈りの1つでも捧げるべきなのだろうが、

今はとてもじゃないがそんな気分になれなかった。僅か5分足らずで俺は変わってしまっていた。命を奪う事に強い抵抗を感じなくなってしまったのだ。身体の震えも何時の間にか止まり、今は心臓の鼓動すら平常。これが戦争の空気を吸った結果なのだろうか？　だとしたら、もう俺は…ただの人殺しか。

「アスナにも嫌われそうだな～」

火に包まれ肉の焼ける臭いが漂う岩山の頂きで俺は場違いな事を思っていた。今更何を言っているんだが、守ると決めた時点で既定路線だっただろうに…

「……」

でも、嫌われたくなかった。それはエゴと言うものだろうか？　どれだけ手を血に汚そうと、彼女には嫌われたくないと思ってしまった。ああ、別に彼女に惚れているとかそう言った話じゃない。1人の友達を失いたくないと、切に思った。

「…ようやく到着っと、あぁ？」

「これは…！？」

「既に戦いは終結したようですね」

何時の間にか、俺の直ぐ近くの空に3人の男達がいた。赤毛の鳥頭、

刀を持った剣士、胡散臭いローブの優男。はい、どう見ても『紅き翼』ですね。ナギ・スプリングフィールド、青山　詠春、アルビレオ・イマ。少し長居をし過ぎたようだ、さっさと立ち去るとしよう。

「おい、そこのお前！」

「……」

「無視すんじゃね！！」

「…っ！？」

いきなり魔法の矢をこちらに放ってくるナギ。１度無視したからってそれは無いだろう！？　とりあえず、喰らう前に魔法の矢を吹き飛ばす。

「何の心算だ…」

「お前が無視するからだろうが！！」

「馬鹿だろ、お前？」

「否定できん」

「そうですね」

「おいっ！？」

何やら勝手に目の前でコントを始める３人。これは今の内にさっさといなくなれって言う神のお告げだよな？　なら、遠慮せずに帰ら

せて貰おうか。さらば、３バカトリオ。

「あっ！　待ちやがれ！！」

ナギに掴みかかられたがかわして俺は跳躍に入る。一瞬にして後ろの背景の一部へと化していく彼ら。ナギが最後まで何か叫んでいた様な気がするが構わん。今は、アスナの所へ約束を果たしに帰るのが最優先だ。

先ほどの塔へと帰った俺を待っていたのは、鎖を外され自由になったアスナと、高官と思しき魔法使い達数人だった。面倒な事情聴取とかは勘弁だな、本当の事を話すのもあれだしな。少なくともウェスペルタティアにも『完全なる世界』の末端連中がいる訳だし、そもそも国王が傀儡なんだっけ？　迂闊に喋ったら情報が筒抜けになる。

「貴様、何者だ？」

「聞いてどうする？　それに正直に話すと思うか？」

「では、何が目的だ？」

「その子を、戦いから遠ざける事だ」

「……代わりに戦うと？」

「彼女を道具として扱わないと、あんた等が約束するならな？」

「……いいだろう、部屋を用意させる」

「反故にしたら、覚悟しておけよ」

その問い掛けに答える事なく高官達は螺旋階段を下へと降りていってしまった。何やら、一気に事が進んだ気がするが、一先ずアスナが再び道具として使われる事態は避けられそうだ。その代わりに俺が道具になる訳だがな…

「シキ」

「ん？」

「…ケガ…した？」

「いや、この通りピンピンしているさ」

「……」

どこかホッとした様な様子を見せるアスナ。そんな僅かな仕草を見れた事が無性に嬉しかった。俺は、ここで彼女を守ろう。彼女を利用しようとする全てのモノ達の手から。彼女自身の未来の為に…

こうして、俺こと『東西南北　四季』はウェスペルタティアに雇われた傭兵と言う形でこの大分烈戦争のゴタゴタに参加する事となった。既に原作とは若干の変化を見せ始める世界で、何が出来るのだろうか…そのコタエはまだどこにもない。

第2話：友達とオスティア回復作戦？（後書き）

オスティア回復作戦終了。ちなみに、オリ主はグレート＝ブリッジ奪還作戦には参加しません。

第3話：束の間の平穏と影（前書き）

アスナは普通に喋らせてます。オリ主、色々と影響を与える編？

第3話：束の間の平穏と影

あれから暫くの月日が流れた。帝国はあれだけの大損害を出しながら2度目のオスティア回復作戦を実行したが、主に俺が中心になって撤退させた。それにしても流石は帝国、あれだけの兵員や装備を失ってもまだ侵攻をかけてこられるのだから。ウェスペルタティア側は少しずつ疲弊していると言うのに…

ちなみに、『オスティアの閃光』って言う痛いＤＱＮネームがついた。帝国側では、安直に『死の光』だの、『死神』だの『黒いヤツ』だの呼ばれているらしい…ってもっとマシな呼称付けろよな!?最後のとか、完璧に地球最強のＧじゃないか!!

まあいいか…そういえば、帝国の大規模転移魔法の実戦投入で1度グレート＝ブリッジが原作通りに陥落した。そして連合によるグレート＝ブリッジ奪還作戦は、ナギ達『紅き翼』の活躍によりつい数日前に史実通りに推移した。この辺は、俺と言うイレギュラーがいても変わらないか…

さて、そんな近況報告をしつつ現状を振り返ると…俺、アスナ、アリカ王女の3人でお茶会をしている。全く持って意味が分からん。いや、聞きたいのはこっちだって？　そう言われてもな、俺にもサッパリだ。

「……」

「……」

「……」

会話がない。アスナは、マイペースにチビチビと紅茶を飲んでいる。アリカ王女は、アスナを気にしつつ紅茶を飲んでいる。俺は、2人を気にしつつ紅茶を飲んでいる。そもそもこうなったのは、アスナと部屋で他愛無いお喋りをしていた時に、アリカ王女が入って来た事に起因する。帝国の侵攻をほぼ1人で防いだ俺に興味が湧いたらしい。ただ、タイミングが悪かったと言うべきかアスナが部屋にいたのだ。

「む、先客がいたか…出直そう」

「いや、別に構いません。アスナもいいだろ？」

「…シキに、任せる」

「そ、そうか…邪魔するぞ」

「どうぞどうぞ」

そんなこんなで3人でお茶をする事になったんだが…アリカ王女ってアスナにどこか引いた部分があるんだよな？　『黄昏の姫御子』か『完全魔法無効化能力』絡みかね…まあ、正直部外者でしかない俺がどうこう言える訳もないが、こういった機会を用意する位なら出来るか。

「…それで、アリカ王女。今日、訪ねてきた用件は？」

「むっ。それは…」

チラッとアスナの方を見る彼女。どうやら彼女に関わる事柄の様だ。

「そなたは…アスナの代わりに戦っていると聞いた。理由を聞いてもよいか？」

「友達を護るのに理由なんているか？」

「友を護る為…それだけの為に命を掛けておるのか！？」

「アリカ王女は戦場に出てないだろうから、気が付かないかもしれないが…」

「何をじゃ？」

「戦っている兵士は、最初は国の為・名誉の為だのって言っているけどな、最終的に行き着くのは直ぐ傍で背中を預ける仲間の為なんだ。たった、それだけの為に命を掛けているのさ…」

「……」

誰もが最初は理想に燃えているのだ。国の為、名誉の為と理由は色々あるだろう。でも、戦っていく中でその理由は何時しか変化していくのだ。横にいる仲間と一分一秒でも長く生きる為に、仲間を一分一秒でも長く生かす為に…戦いはより身近なモノを守る為のものへと変化する。

「アリカ王女。貴方は何の為に戦うんだ？　国の為？　自分の為？　民の為？　歴史の為？」

「私は…」

「そうやって命を掛けて必死に戦っている者達を、裏から操っている連中がいる」

「っ！？」

どうしてそれをって顔をしているな。まあ、仕方が無いか…彼女自身もその存在に気が付きつつも誰が味方で敵か判別に悩んでいる段階だろうからな。だからこそ、そう遠くない未来でナギ達に接触を図るんだろう。この戦争の裏に気がつく可能性が一番高いのは考えられる中で彼らだけだろうからな。

「討つべき敵…『完全なる世界』は、帝国・連合の中枢まで入り込んでいる。勿論、ここにもな…」

「……」

「そして、奴らの目的達成にはアスナが必要になる。正確には彼女の持つ力と言うべきか？」

「お主…何者じゃ！　何を知っておる！？」

「知っている事だけ知っているだけだ。それと、この世で今の所は唯一のアスナの味方だ」

今にも掴みかかってきそうな形相でこちらを睨むアリカ王女。アスナの前という事で自重はしているだろうが、それも時間の問題だろうな。目の前にいる俺は自分で言うのも何だけどあまりに怪しすぎる。異質な力を持つだけでなく、彼女すら知らない情報すら有している。俺が逆の立場だったら確実に敵側だと思うだろう。

「この戦争を終わらせたいなら、連合の『紅き翼』に協力を求めると良い。それと、帝国の第三皇女だな」

「それを私に信じろと？」

「信じるも信じないも勝手だ。俺は俺のやりたい様にやるだけだしな…」

「……」

それからしばらく思考の海に潜っていたアリカ王女は、何やら覚悟を決めた様な表情で静かに部屋を出て行った。恐らく、ナギ達に会いに行くんだろうな…って俺が後押しした形になるんだろうか？これも原作改変になっちゃうんだよな、多分。自重しないと…

「シキ…」

「ん、どうした？」

「お代わり」

「あはは…了解、お姫様？」

先ほどまでの重い空気を一気に吹き飛ばしていく、アスナの空気を読まない発言。流石は我らが素敵なお姫様だ。彼女も、初めて会った時に比べてかなり表情に変化が現れてきている。勿論、それなり

に付き合うようになってようやく気が付くレベルだから、大抵の人間には分からないだろうけどな…

「シキ」

「どうした？」

「アリカさまを…護って」

アスナの思いがけない一言。だけど、それに込められた想いは痛い程に分かる。アスナは別にアリカ王女を嫌ったりはしていない。多分、お互いにどう接していいのか分からないだけなのだ。ただ、不器用なだけ…

「アスナ、それは俺の仕事じゃない。アリカ王女を…彼女を護る騎士は他（ナギ）にいる…そして俺の役割は、君を護る事だ」

膝を曲げ、彼女と同じ高さまで視線を下げる。そして誓う…

「アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。君は俺が護る」

「…シキ」

「君を…大切な友を護らせてくれ」

「…我が、騎士シキ。我が盾となり、剣となり、何より友であれ」

「ああ、誓う。君の友として、共にあろう」

ナギがアリカ王女に杖と翼を預けるよりも前に、俺は『黄昏の姫御子』と共にあることを改めて誓った。この瞬間が、『完全なる世界』にとって最大の脅威が生まれた瞬間だった。

第3話：束の間の平穏と影（後書き）

さて、次回は…何だろう？

第４話：夜の迷宮（前書き）

またまた原作をブレイクすることに…にほ～んブレイク工業～違！！

第４話：夜の迷宮

『完全なる世界』にとって完全に誤算だったのは、シキ・トサナキと呼ばれる男の存在だった。彼らの目的にとって重要なキーとなる、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの側に付き添う謎の男。帝国の大部隊を2度に渡り壊滅させておきながら、その力の秘密の一端すら掴めていない。魔法使いではないらしいと言う確信の持てない情報程度ではどうにもならない。それ故に、彼らは今の状況に焦っていた。

『紅き翼』が最近活発に自分達を探り始めていたので、罠に掛けて反逆者へと陥れた。更に、何かと目障りな動きをし始めたアリカ王女とテオドラ第三皇女も捕らえる事が出来た。これでしばらくの時間は稼げるはずだった。だが、事態は思わぬ方向へと急変する。彼らの元へと送られてきた情報…

『帝国から国を護ったオスティアの英雄、国王を殺害し人質を取って逃走』

国王とは、本来なら後にアリカの起こしたクーデターによって殺されるはずだった彼らの傀儡である。そして人質とは当然の事ながらアスナの事だ。捨て駒とは言え、想定外の場所で削られるのは痛かった。そして何より、『黄昏の姫御子』をまんまと奪い去られてしまったのだ。

さて、そんな都合が彼らにはあったらしく俺とアスナは絶賛逃走中だ。後ろから迫ってくるのは『影』だ。原作通りの説明を求めるって言うなら、闇の魔素を編んで造った人形。影使いと人形使いの中間の様な…つまり中途半端なヤツ（デュナミス）が使う魔術だな。まあ、俺の視界に入る連中を端から吹き飛ばしているから脅威ではないんだが…

「シキ…大丈夫？」

「問題ないと言いたいが…操ってるヤツが見つからん！」

「…ドンマイ」

「あはは…」

そう、さっきからかなりの数の『影』を吹き飛ばしてあげているのだが、一向にデュナミス坊やが見つからない。まあ、ジャングルの上を縫うように進んでいるから、下の木々に隠れられていたら見つけるのは至難の業ではあるけどな…因みに、自然破壊はしたくないのでジャングルを吹き飛ばすのは無しの方向で。

「それにしても、面倒だ…」

今の俺はアスナをお姫様抱っこして空を掛けている。仕掛けてくる影を端から還す訳だが、爆風の指向性をその都度ごとに調整しないと、アスナに浴びせる破目になるのでどうしても神経を使う。俺だけだったら、影響を受けないから周囲を全て吹き飛ばして突き進むんだがな。

「私、足手「アスナ」っ、ごめんなさい」

それ以上は言わせない。僅かに怒気を込めた言葉で先の言葉を封じる。アスナはアスナなりに状況を理解しているのだろう。元々頭がいい子だ、自分が俺の戦い方に支障をきたしていることぐらい分かっているのだろう。だからこその言葉だが、俺はそんな言葉をこの子から聞きたくない。

「アスナ。人にはそれぞれ適材適所ってのがある。この場合、戦うのが俺の役目だ、気にするな」

「うん…」

まあ、気にするなって言うのも無茶だとは思うが仕方がない。何も出来ずもどかしいであろうの心情を察しながらも、俺は逃走速度を加速させる。心と身体、その両方を護る難しさを味わいながら…

そんなこんなで半日以上に及ぶ悪質なストーカー並みの追撃を交わしながら、俺達は進路を東へと取っていた。別にこちらに用がある訳でも、誘導された訳でもないが自然とそちらに向かっていたのだ。まあ、出たとこ勝負ってやつだな。それにしても、連合の領内をこれだけ派手に暴れながら通過しているのに、静かだな。それだけ上の方まで入り込んでいるのか『完全なる世界』の連中。

「シキ」

「どうした？」

「あそこは何？」

「ん…？」

そこは、小高い丘の様な場所で古い宮殿の様な建物が建てられていた。はて？　どこかで見たような…

「誰かいるよ？」

「確かに…あいにく味方じゃないっぽいけどな」

『連弾・光の１９矢！！』

『連弾・氷の１７矢！！』

宮殿の入り口には、数人のローブ姿の魔法使い。そして、俺の姿を見るなりいきなりの魔法詠唱ときたもんだ…敵っきゃないだろう！？

「ぶっちゃけ火力不足だろ…」

日々の鍛錬、帝国の大部隊との戦闘、ここまでの敵からの追撃戦と、経験不足を補いつつある俺にとってその程度の処理など朝飯前だった。向かってくる矢を端から空中で弾けさせ、お返しとばかりに彼らの周囲の空気を連続して爆破していく。

「殺しはしないけどなっと…」

あくまで半殺しレベルに抑える。まあ、手足の骨が折れ、内臓とかにもダメージが多少いってるだろうから処置しないと危険性はある

だろうけど。それにしてもようやく能力にも慣れてきた感じがする。少なくとも以前とは違って、相手を殺さずに無力化出切るようになってきたしな。ただ、ウェスペルタティア国王だけは俺の意思で殺害した。中途半端な状態にすると、結果としてウェスペルタティアを更に操りやすくしてしまうだけになってしまうから…でも、あの感覚だけは慣れたくない。それでも、少なくともアリカ王女が父親殺しと呼ばれる事は避けられた。

回想はこれ位にして、ここどこだ？　連合の魔法使いらしき連中が護ってたっぽいから重要な拠点だか何かか？　それにしても、寂れているな。どちらかと言うと誰かを監禁…あれ？　もしかして…また原作乱入ですか！？

「もしかして、『夜の迷宮』か？」

「『夜の迷宮』？」

「ああ、噂だとここにアリカ姫と帝国の第三皇女が囚われてる」

「……」

「どうせ、元から追われている身だ。少し位なら暴れても問題ないか…追っ手もひとまずいなくなったしな？」

「…うんっ！」

普通なら馬鹿な行為なのかもしれない。逃亡中の人間が人助けなど…でもな、俺は馬鹿なんだ。

「じゃあ、少しばかり派手にいこう。　そこっ！！」

騒ぎを聞きつけてやってきた魔法使い達が口を開く前に、柱に叩きつけて意識を奪っていく。魔法障壁を張っていようが、それ自体を爆破してしまえばいい。考えたら、俺って魔法使いにとって天敵だな。魔法も障壁もアーティファクトすら爆破出切る。そもそも、『造物主（ライフメイカー）』にも勝てるんじゃないか？　まあ、能力以外の部分は一般人だからな一撃でも貰えばお陀仏だけだ。戦争が終わったら、肉体強化位は魔法を覚えたいな…

「詠唱ないって楽だけど寂しいな…」

詠唱も技名を叫ぶ事もなく、ただ指を弾く動作しかしていない。正確には認識すればいいだけなので、指を弾く行為すら不要な中断不可能な攻撃手段。卑怯に思うだろうが、こっちも生き残るのに必死なんだ。

攻撃を仕掛けてくる魔法使いや重装備の兵士達を、流れ作業の様にノックアウトしながら奥へと進んでいく。こっちの方が警備が厳重になっているから、方向として間違っていないようだ。それにしても、少しは学習ってのをしないのか、ここの連中！

「馬鹿の一つ覚え！」

狭い通路に、集団で押し寄せてくる連中。確かに、相手が普通（ナギやラカン達は当然除く）なら一気に押し出せるから有効な手段かもしれない。でも、俺みたいな人間にとっては、まとめて倒せる様になっただけだ。的が大きくなれば大きくなるほど、倒すのも楽になる。結局、そんなやりとりを何度か繰り返して行く内に、厳重に閉じられた部屋の前に辿り着いた。

「さて、ご対面かな？」

「ここにいるの？　アリカさま」

「多分な、騎士（ナギ）が救出を終えてなければだけど…この様子ならまだだな」

中にいるであろう彼女達に被害が出ないように扉だけを綺麗に吹き飛ばす。傍目には扉が砂の様になって崩れ去っていく様に見えただろう。実はこれ、つい最近編み出したお気に入りの技だったりする。目視不可能レベルの微細な爆破を多様する事で対象を、目の前の様な状況にするだけだけど。

「ども、微妙に怪しい通りすがりの者です」

「え、えっと…その連れ？」

「お、お主達！？　何故、ここにおる！」

「む、誰じゃ？」

「あ、ああ…そちらでは『死の光』『死神』と呼ばれておる男だ」

「なっ！？　あ、あの『死神』だと！！」

「いや、本人目の前にして『死神』『死神』連呼するのはどうかと？」

「「すまん…」」

『死神』って呼ばれているのは知っているけどさ、目の前で連呼さ

れるのは流石にこたえるよ。やってきた事は事実だからしょうがないとは言えね…

「まあ、敵組織の幹部に終われてたら偶然ここに辿り着いたんだ。で、連合の魔法使いらしいのに攻撃されてな」

「シキは正当防衛」

「全くだ。善良な一般人ではないけど、警告もなしに攻撃してきたからな」

「そ、そうだったのか…」

「アリカ王女。と、取り合えず助かったと思って良いのかの？」

「ふむ。トサナキ、外の監視の者は？」

「突っかかってきたのは意識を刈り取っておいた」

治療をしないと近い未来で危険かもしれないが、そこまでは面倒を見れない。さて、彼女達を連れて脱出と行くか、ナギ達はまだ来ないみたいだ…騒がしいな。

「アリカ王女。一先ず脱出しよ『ズズゥン！！』っと！？」

脱出しようと思った矢先に目の前の壁が吹き飛ばされた。一つだけ確実なのは犯人は俺じゃない。だって…

「美しくない」

「シキ？」

「何を言っておるのだ、お主？」

「言ってみただけさ」

何言ってるのコイツって目で見られたから、無理矢理誤魔化してみた。最初は能力に慣れるのに必死だったけど、最近は独自の方向性を追及し始めた。人相手に使う心算はないが、やはり爆破解体などには心躍る。周囲に影響を与えず、効率良く解体していく技術。計算され尽くした爆破は、一瞬の芸術と言ってもいいと思う。そうだ、戦争が終わったら解体業でも始めるか…

「よお、来たぜ。姫さん…って、お前は！？」

「遅いぞ、我が騎士」

「いや、騎士じゃねえし…って、何でソイツがいんだよ！？」

「俺の事か？」

「当たり前だろうが！！」

漫画的に言うと、いや漫画だろってツッコミは無しな？　背景をガオーって表現すればいい表情のナギを目の前に俺は冷静に状況を分析していた。まあ、分析も何も俺が突入した直後にナギ達『紅き翼』がアリカ王女を救出に来たってだけなんだが。結局、何だかんだ言っても原作の流れに巻き込まれる様だ。

「微妙に怪しい通りすがりの俺は、絶賛逃亡中でな？　で、いきな

りここの連中に攻撃されたからノックアウトした」

「つまり、俺達の敵じゃないってことか？」

「そっちが敵対しない限りにはな？」

「はっ、上等だ」

こうして、俺はナギ達『紅き翼』の面々と再び巡り合った。

第４話：夜の迷宮（後書き）

原作の流れに自然に割り込ませるのって難しい…

第5話：別れる・・・訳が無い（前書き）

まあ、当然の流れに…

第5話：別れる・・・訳が無い

「何だこれが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか？」

「廃屋か？」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだ、このジャリと爆弾魔はよ」

「何だ貴様、無礼であろう！」「へっへーん…」

テオドラ皇女とラカンが馬鹿をやっているのを尻目に、物語は重要な局面を迎える。それにしても、爆弾魔はないと思うんだけどな？　少なくとも、爆破を玩具にしている心算はないんだが…

「さーて、姫さん。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ。連合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねぇ」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で…最新の調査ではオスティアの上層部が…」

「上層部が何じゃ？」

あれ…流れが違う？　ここは上層部が最も「黒い」って言う所だよな。それにガトウは何故か言いづらそうに俺を見る…って、そうか。

「その、さ、殺害された国王を含め上層部が最も黒いという可能性が…」

「父上が殺害されただと！？」

「はい…」

アリカ王女の驚きも当然だろうな。自身も怪しいと疑ってはいただろうが、それでも原作では悩み抜いた末のクーデター決行だった様だし。殺す事に対しても悲しみが無かった訳ではないだろう。今回の場合、犯人は既に判明しているし、そもそもここにいる。

「は、犯人はわかっておるのか！？」

「そ、それはっ…」

「誰じゃ！「俺だ」っ！？」

別に隠しておく必要はない。ガトウは俺がここにいることで言うのを躊躇ったのだろう。だが、結局はいつかはバレることだ。

「俺がオスティア国王を殺した張本人だ」

「な、何故じゃ？　トサナキ、何故お主が父上を！」

「国王は、『完全なる世界』の傀儡に落ちていた。だから、俺が殺した」

「傀儡じゃと…？」

「そうだ」

「……」

ありのままを話し、後はしっかりと視線を彼女に向けて言葉を待つ。
それに正面から返してくるアリカ王女。その鋭い視線に込められる意味は何だろうか？　俺に対する怒りだろうか？　それとも、父親に対する悲しみだろうか？　それ以外だろうか？

ナギ達も場の空気を読んでか一言も言葉を発しない。そうこうしている内に、アリカ王女が動いた。その手に握られているのはナギとあの儀式をした際に使っていた剣。それを俺の首目掛けて振り抜いた…

『っ！！』

だが、彼らが予想した様な事態にはならなかった。俺の首は、表面の皮が薄く切れて軽く血が出た程度だ。つまり寸止めって事。

「…何故、殺さない？」

「貴様を殺した所で父上は生き返らん」

「確かにそうだが、復讐は遂げられるはずだ」

「『復讐後に残るのは虚しさだけ』…私が小さかった頃に父上が良く口にされていた言葉だ」

「だから殺さないと？」

殺されたから殺して、殺したから殺されて…昔見たアニメで似たようなセリフあったなと思い出しながら彼女の言葉を待つ。

「お主を許すつもりなどはない！」

「アリカさま、シキは…！」

「アスナ。これは俺自身の行動の結果だ」

「でもっ！」

アスナが必死に俺を庇おうとするが、それは無駄な事だ。少なくとも俺は俺自身の意思で国王を殺した。操られていたとは言え、国王はアリカ王女の肉親、それは変わらない事実。そんな事で許されるような事ではない。

「私の前から消えよ…死神っ！！」

「ああ、現れないと約束する…」

「シキ…」

俺の為に必死になってくれるアスナ。その頭を優しく撫でてやる。今の俺にはこれくらいしか出来ないからな…スマン。

「それと、アスナを連れて行く事は許さん」

「アリカさま！？」

「それは「ならん！」っ…」

アリカ王女の目は本気だ。俺がアスナを連れて行こうとするならば、力ずくで止めに来るだろう。そうなれば当然、周りにいる『紅き翼』

の連中も彼女側に付くだろうしな。だが、アスナを彼らに預けるのに不安でしかない。『完全なる世界』の狙いが彼女である以上、奪いに来る可能性は大。原作では恐らくオスティアで連れ去られたんだろう。ナギ達『紅き翼』がいればその可能性は減るだろうが、ゼロではない。それに約束したしな…

「裏切り者の手など借りぬでも、アスナは護れる。そうであろう、我が騎士？」

「ああ、任せな！」

それまで口を挟まなかったナギだが、その問い掛けには自信満々とばかりに応じた。状況だけを見るとかなりこちらに不利。少なくともナギは勝てるかどうかの結果はどうであれ、やる気は満々だ。さて…

「シキ…」

俺を不安そうに見上げるアスナ。そんな目をするなって、少なくとも俺は…

「俺はアスナと離れる心算は無い。友として約束したからな」

「私もシキと一緒がいい！」

「ならん！　この様な薄汚い裏切り者に！！」

俺に必死にしがみ付いてくるアスナ。周囲との距離間を測る俺。アスナを奪い返さんと俺を睨みつけるアリカ王女。今にも飛び掛ってきそうなナギ。そして、最初に動いたの俺だった…この状況で先手

を取られるなど愚者のやる事だからな。

「交渉決裂ってな！」

「くっ！？」

まずは、アリカ王女やナギ達の周囲で小規模な爆発を起こし気を散らせる。そして本命の足元を掬う訳だ。

「な、なんだ！？」

「くそっ、足元が！」

「これは…」

突然、ナギ達の足元が流砂の如く沈み始める。勿論、これも爆破の応用でしかない。浮遊術等を使えば簡単に抜けられるので、精々が一瞬の隙を作る程度の小細工だが、それだけでこちら側の目的は十分に果たせる。

「アスナ！！」

「うん！」

アスナをしっかりと抱き上げて俺は上空へと離脱する。飛び上がった直後に身体に異常な重力が掛かったが、原因さえ分かっていれば対処することは容易い。原因であるアルビレオ・イマの重力魔法を爆破し、俺はアスナを連れて再びの逃走を始めた。結局、俺と『紅き翼』の道が重なり合う事はなかった。

第5話：別れる・・・訳が無い（後書き）

別れのシーンも考えたけど、きっぱりと決別させる事に。シキ側に『紅き翼』と行動を共にするメリットがないしね～

第6話：修正力（前書き）

オカシイ、当初はアンチにする心算はなかったのに、流れが…修正できるだろうか…？

第6話：修正力

アスナをアリカ王女達から奪い去る形で逃走を再開した後、帝国や連合の国境の小さな村々を転々としながら１０日程で辿り着いたのは、自由交易都市グラニクスだった。適当に移動していた心算なんだが、何だかんだで原作に縁がある場所へと行き着いた。それにしても流石は自由交易都市と謳われるだけあって、様々な人種が入り混じり、民生品から軍用品、果ては禁制品と思しきモノまで流通している。更に、明らかに脛に傷がある連中もどうどうと道を闊歩している。ここなら俺達もどうにか紛れ込んで暮らしていけるかもしれない。それに、今からここで繋がりを作っておけばネギ達が来た時と言うよりも、村上達が奴隷になってしまう時に何か役に立つかも。ちなみにここまでの道中、能力に磨きを上げる事を怠ったりなどしていない。

原作では、あの隠れ家での出来事から映画では3部作、単行本なら１４巻分くらい…つまり6ヶ月の死闘が繰り広げられる。彼らには原作通り、『完全なる世界』と決着を付けて貰いたい。アスナが俺と共にいる以上は儀式は行えないだろうが、あの組織がそれだけで諦めるとも限らない。別の手段を用いるかもしれないし。奴らの本拠地が『墓守り人の迷宮』であることを知っている俺が潰しに動けばそれで終わるのでは、と考えもしたが、それだと結果として全く先が見えない未来に突入する事になるので止めておいた。そもそも、俺は英雄などに興味がない。英雄という客寄せパンダのレッテルを一生貼られた生活なんて御免だ。俺は自由を縛られて喜ぶようなそっちの気はない。

「……」

さて、あの出来事からずっと不機嫌なままのお姫様のご機嫌をどうやって取ろうか。中心部に程近いそこそこのレベルのホテルの一室で俺は頭を悩ませていた。最低限のやり取りはしてくれるものの、それ以外は今の様に頬を軽く膨らませて不機嫌オーラ全開です私って様相を見せている。はてさて…

「アスナは、何に対して怒っているんだ？」

「……」

「正直に言ってくれないと分からないぞ？」

「…どうして」

「ん？」

「どうして、シキは『裏切り者』だって言われたのに怒らないの！？」

「あー、なるほど」

アスナが怒っていたのは、俺が裏切り者呼ばわりされた事を怒らないからか。代わりに怒ってくれているってことかな？　それはそれで嬉しいが…ぶっちゃけ、

「怒る程の事でもないからな」

「どうして！？　シキがあの人を殺したのだって…！」

「アリカ王女の気持ちも分からなく無いからかな？」

「えっ？」

「今のアリカ王女の味方って誰がいる？」

「えっと…」

ナギ達『紅き翼』、帝国のテオドラ皇女…それ以外に僅かな支持者って所だろう。では、俺は？

「王国を帝国の侵攻から2度に渡り護り、重要人物であるアスナの護衛を担当し、戦争の裏にいる連中の事を教え、紅き翼やテオドラ皇女に会うようにアドバイスして、幽閉されていた場所から救出した。さて、単純に考えて俺はアリカ王女にとってどちら側だ？」

「…味方？」

「そう。彼女からすれば、俺も自分の味方側の1人だったんだよ。あの話を聞かされる瞬間までは…」

「それって…」

「俺ははっきりと、『この世で今の所は唯一のアスナの味方だ』って茶会で言っておいたんだがな。勝手に自分にとっても味方だと勘違いしたんだよ、あの人は。そして、例え敵の操り人形だったとしても、肉親だった父親を断りも無く殺した俺に、手酷く裏切られたと思ったんだろうな？」

「じゃあ、アリカさ…あの…女（ひと）は、勝手にシキに期待して、勝手にシキに失望したって事！？」

そう、それが答え。勝手に期待されて、勝手に失望された。だらだらと喋ったけど、実はシンプルな結果なんだよな。ぶっちゃけ、それに直ぐに気が付いたから怒る気すら起こらないってのが結論。まあ、アリカ王女も、完全無欠な人物ではなく一般人と大差無かったって事だな。

「手札の中に、Aに扮したジョーカーが紛れてたから激怒したってお話さ」

「…笑えないよ、そんなの…」

「……」

「シキが、全然報われないよ…」

「アスナ…」

目尻に涙を溜めながら俺に抱きついてくるアスナを、優しく受け止める。静かに嗚咽を漏らす彼女の髪を手櫛ですきながら、窓の外へと目をやった。そこには青く澄んだ空と白い雲が、戦争中だと言うのに平和そうに存在した。正直、ちょっぴりお前らが羨ましい…

アスナとそんなやり取りを交わしたのも既に数ヶ月も前の事。いよいよ、あの日がやってきた。西暦で言えば、１９８３年９月末日。この日、アリカ王女を始めナギ達『紅き翼』と帝国・連合・アリア

ドネー混成部隊により、『完全なる世界』の本拠地たる『墓守り人の迷宮』への攻撃が開始された。この辺は、アスナが敵に手に落ちる落ちないに関わらず歴史は変わらない様だ。ここに来てからしばらくはしつこく『完全なる世界』の連中がアスナを狙って仕掛けてきたが、それらは悉く俺が退けた。それに『紅き翼』の活躍もあってか、こちらへの攻撃が見る見るうちに減っていった。そして、結果としてアスナが彼らの手に落ちていない以上、儀式自体は発動出来ずに終わるはず…だったのだ。

だが、歴史はｉｆを許さないとばかりに俺の予想を覆す結果を突きつけた。

『王都オスティア崩壊』という、結果を。

第6話：修正力（後書き）

シキは英雄を目指しません。彼にとって大事なのはアスナとの時間ですので。さて、オスティアは何故か崩壊しました。因みに、犯人はシキではありません悪しからず。

第7話：人の業（前書き）

今回のテーマは『人の欲深さ』

第7話：人の業

王都オスティアの崩壊は瞬く間に世界中に知れ渡り、深い衝撃を与えた。
歴史ある国の首都が崩壊したのだ、当然の結果だろう。
だが…

「『世界の始まりと終わりの魔法』にはアスナが必要だったんじゃないのか？」

原作では、儀式が発動されアスナごと反魔法場を封印した結果として崩壊が起きた。だが、今回はアスナは俺と一緒にいる。本来ならば彼女がいないのだから儀式など起こせるはずがない。アリカ王女かとも思ったが、彼女自身は記念式典に参加しているのが確認出来た。なら、儀式のキーとなったのは一体…？

「行ってみるか、『墓守り人の宮殿』に…」

結局の所、ここ数ヶ月で造り上げた人脈から俺の手元に集まってくる情報程度では推測すら立てられない。なら、直接現地に赴いて真実を調べ上げるしかないだろう。もし想定外の事態が進行しているのならば、早急に対処しないと後でとんでもない問題にぶつかりかねない。今は、少しでも早く事態の解明を急ぐとしよう。

「シキ」

「アスナか。俺はこれから「私も行く」…分かった。俺から離れるなよ？」

「うん」

何が待ち受けているか分からない以上、出来れば彼女は連れて行きたくなかったが仕方ない。本人の意思は出来るだけ尊重してやりたい。今まで散々、他人の都合に振り回され続けた彼女だからこそ…

数日後、連合の警戒網を潜り俺達は崩壊した王都オスティアへと辿り着いた。全てが廃墟と化していた。そこにはかつての人の営みも、温かさも、息遣いも、何もかも存在していない。ただただ、瓦礫の山が散乱しているだけ。

「英雄が世界を救った代償か…」

「……」

ギュッと抱きついてくるアスナをしっかりと抱き締めながら、俺はその光景を目に焼き付けていく。俺がこの場に居れば能力で防げたであろう犠牲。アスナがいない以上、『紅き翼』だけで平気だと慢心してしまっていた。例え、犠牲者数が人口の３％を下回っていたとしても、それは僅かな慰めにしかならない。そんな風に考えていたのが、顔に出ていたのだろう。アスナが俺を見上げて問い掛けてきた。

「…シキは言ってたよね？　人にはそれぞれ役割があるって」

「ああ…」

「なら、これはシキの責任じゃない！　シキはシキにしか出来ない事をしてた。それは誰よりも私が知っているから！」

「アスナ…」

「あの日から、ずっとシキは私と一緒にいてくれた！」

「傍にいるっていう約束を守ってくれた！」

「誰よりも、私の…家族でいてくれた！」

目尻に涙を溜めながら、俺に真っ直ぐと訴えるアスナ。あぁ、アスナ…また泣かせてしまった。君だけを護ると誓ったのに、泣かしてしまっては意味がない。

「そうだったな、アスナ。…もう2度と君を悲しませないと約束する」

「約束だよ？」

「ああ、約束だ」

護ると言いながら、護られているのは俺なんじゃないだろうか。そう思わずにはいられないほど、彼女の言葉は俺に力を与えてくれた。これからも、俺はきっと迷うだろう。迷いながらコタエを探していくだろう。彼女と…アスナと共に。

「ここか…」

瓦礫の中をしばらく探し歩き、ようやく辿り着いた『墓守り人の宮殿』。その最奥部に原作ではアスナが封印されていた。なら、今ここに封印されているのは一体…？

「シキ、あれ…」

「…っ！！」

それが何だか分からなかった方が幸せだったかもしれない。だが、俺はアスナが指差したアレ等を本能的に理解してしまった。アレ等こそ、人の醜さの結晶…

「弄びやがった…！！」

「シキ…」

そこに封印されていたのは、全部で３６体の劣悪な誰かに瓜二つな模造品（コピー）。恐らくは、血や毛髪から無理矢理に造り上げた人形モドキ（ホムンクルス）だろう。何故、そんなものが存在するかって？　そんなの簡単だ…人間の業だよ。

強力な兵器が手に入ったとしたら、人は何を考えるだろうか？　それだけで満足するだろうか？
コタエは否。それで満足しないのが人間の業の深さ。更に数を、力を求めるに決まっている。
造ろうとしたのだろう、オリジナル（アスナ）と同程度の力を持つ兵器（コピー）を…！

だが、目の前の光景を見ればその試みは志半ばで失敗したと言った

所だろう。当然だ、模造品がオリジナルを超える事など不可能。どうやったって、オリジナルより数ランク下がった劣悪品しか生まれない。だが、それでも量産品としては十分だったのかもしれない。少なくとも使い捨ての兵器としては使える。恐らく造り上げたのはオスティアの上層部だろう。それをアスナを手に入れられなかった『完全なる世界』が利用した。だが、『世界の始まりと終わりの魔法』に使うには足りない質を数でどうしても補う必要があった。

だからこそ、儀式には３６体もの模造品が使われた。それだけ使わなければオリジナル程の効果を得られなかった。胸糞悪い話だ…これだけの数を揃えるまでに一体どれだけの失敗を繰り返したのか…

どれ位の期間で造り上げたかは分からないが、彼女達を救う事は難しいだろう。兵器として使う為に投薬などの過剰な成長を促したとするならば、恐らく儀式に耐えられたとは思えない。それなら、せめて最後は安らかに逝かせてやりたい…

「シキ…」

「目を瞑っていてくれないか？　彼女達を安らかな眠りにつかせてやりたい」

「ううん、見てる。シキが見た光景を私も記憶する」

「アスナ…。強いな」

アスナの震える手をしっかりと握りながら、俺は彼女達を見つめる。そして目を閉じて、思う。

彼女達に、安らかな安寧が訪れる事を…

君達の事は、決して忘れない。

「安息を…」

目を見開き、しっかりと彼女達の最後を記憶する。炎の中に消えていく数多の模造品（ギセイ）。

全員が灰になり散っていくその瞬間まで見つめ続ける。一秒たりとも見逃さない。彼女達がこの世界に生きた証を瞼に焼き付ける。もう二度と…

第7話：人の業（後書き）

前半のやりとりが予想より長めに。主人公は人間くさく悩みます。これまでも、これからも…

後半は完全にオリ展開。オリジナルの代わりに模造品で代用して儀式は行われました。人の業は深いです…

第8話：旧世界へ（前書き）

前回から時間が流れます…

第8話：旧世界へ

『墓守り人の宮殿』での一件から、2年の月日が経過した。あの後、彼女達の魂(コピー)を送った俺とアスナは再びグラニクスへと戻った。魔法世界は大分裂戦争も終わり、束の間の平和を謳歌していた。勿論、その裏ではアリカ王女が原作と同様に『完全なる世界』への関与などの罪を被せられ、2年後の処刑が決定しケルベラス無限監獄へと収監された。ちなみに、父王殺しに関してもアリカ王女が俺に命じて無理矢理実行させた事になったらしい。俺に対して懸賞金などが付かなかった事も踏まえると、どこまでも彼女を陥れたい様だ元老院は…。ただ、わざわざ此方から出向いて、事実ではないと訴える気も起こらなかった。そんな事をすれば、今度は俺が連合と正面から事を構える事態に成りかねない。そうなれば、当然ながらアスナにも危険が及ぶ。アスナとアリカ王女、どちらを選ぶかなど明白だった。

さて、この2年何をしていたかと聞かれたとして、大雑把に言えば情報収集と鍛錬と旅だろうか？
グラニクスに居を構えつつ、俺とアスナは魔法世界の彼方此方を巡った。

最大の目的は世界中に散らばったオスティア難民からの情報収集だった。彼女達の計画に僅かでも関わった者や、知っていた者がいないか探して回ったのだ。まあ、苦労した割りに結局得られたのは上層部の極一部が何やら内々に極秘の研究をやっていた事と、使われなくなった研究所の場所が記載された地図だけだった。実際にそこへ行ってみたが、既に完全に廃棄されており、残っていたのは埃塗れの壊れた設備類と研究員が書き残したと思しきノートが数冊見つかっただけ。そして残念ながら、ノートに書かれていたのはほとん

ど研究員の日記の様な記述だけだった。完全に無駄足だったとまでは行かないが、期待していた様な結果は得られなかった。まあ、上層部の極一部だけで進められていた計画だとしたら、そう簡単には核心へと迫るのは不可能だと言う事だろう。それにここで焦っても事を仕損じるだけだ…

次の目的が鍛錬。今更だが、俺は能力以外は一般人（この世界基準だが）と何ら変わらない。魔力もグラニクスで専門家に調べて貰ったが、辛うじて初歩的な魔法が使えるであろうレベルだった。実質、戦っていく上ではほとんど役に立たないと見た方がいい。そうなると、これからアスナを護っていく上で能力を極限まで磨き上げる事が必須になる。幸い、グラニクスには様々な荒仕事を斡旋する紹介屋があったので、鍛錬相手には不足しなかった。戦争後に再び増え始めた武装組織や、悪徳商人、竜種、非合法な事に手を染めた魔法使い等バラエティに富んだ内容。そのレベルも様々で、貴重な経験を積めた。そして、俺が自分自身に課したのは『非殺』。殺すだけならハッキリ言って相手を認識した時点で終わりだ。だが、相手を殺さずに無力化するとなるとその難易度は桁違いに上がった。何度も、危険な状態にまで追い込まれ死線を潜り抜けながら辛うじて今日まで生きてこれたのは、応援してくれたアスナのお陰だろう。彼女の為だと思うからこそ、ここまで生きてこれたんだと思う。かつての俺だったらとっくの昔に諦めていただろうからな。

どうでも良い事だが、また2つ名が付いた。何でも『不殺の閃光』だそうだ。まあ、そのまんまって気しかしないが…

そんなこんなで、あっという間に2年の月日が過ぎてしまった。後2ヶ月もすればアリカ王女の処刑、そしてナギ達による救出作戦が行われる。多くのオリ主なら介入するであろうこの作戦だが、俺は介入する心算は更々ないので、前々から考えていた通り魔法世界か

らゲートを経由して旧世界へと向かうとする。こちらで稼いで資金（懸賞金やらギャンブルやら…）は、知り合いを通じて既に旧世界の通貨へと換金し向こうの銀行へと送金してある。どちらの世界でもそうだが、手持ちの資金がなくては行動すら出来ないからな。

「準備はいいか？」

「大丈夫。シキは？」

「ああ、問題ない。行こうか？」

「うん！」

旅支度を手際よく済ませたアスナと仲良く手を繋いでゲートポートへと向かう。この2年で更にアスナは表情豊かになった。1年半位前からは料理などの家事にも挑戦していて、ここ最近かなりレベルを上げてきている。最初に出会った頃の彼女と比べたら誰もが完全に別人だと言うレベルだろうな。まだ身体的な成長は進まない様だが、恐らく精神状態に引っ張られる形で成長も始まると思う。彼女のそんな日々の成長が楽しみな毎日だ。

事務的なゲートポートの係員に渡航の手続きをして貰い、旧世界へのゲートが開くまでの小一時間程をレストルームでアスナと他愛ない茶飲み話をして過ごす。大切な友人と2人、そんな小さな幸せに頬が思わず緩むのも仕方がないだろう。

「ここが旧世界？」

「ああ、俺にとっては故郷と言うべきかな？」

「シキの故郷…」

俺達がゲートポートを経由して到着したのは、トルコのイスタンブール。恐らく原作でフェイトが経由したルートだろう。他の渡航者達は次々と次の目的地へと向かう中、俺は係員からのんびりと荷物の受け取りを行っていた。別に急ぐ旅路でもないし、そもそも目的地を決めていない。原作開始までの時間をのんびりとアスナと旅しながら過ごす心算だ。因みに、アスナには原作通り麻帆良に通って貰おうと思っている。これは俺のエゴだが、やはりあのクラスメート達に囲まれたアスナを見たいっていうのが強い。それに、彼女達との出会いもまたアスナの成長にとっては欠かせない。俺では与えられない成長の機会を与えてくれる場所が、あの麻帆良なのだ。勿論、あの麻帆良を仕切っている関東魔法協会への対策も講じる。アスナを利用などはさせないさ。まあ、記憶の封印がされていない彼女なら、原作と違って学園長の思惑通りにはいかないだろうが…念には念を入れないとな。原作では確か小学校の時に転校する形になっていたから、今回もそれに倣う予定。それまで放浪しつつ、人脈・資産・拠点を得るとしよう。

「アスナ、どこに行きたい？」

「ん～、シキと一緒ならどこでもいい！」

嬉しい事を言ってくれるアスナ。そんな彼女の髪を撫でながら、どこへ行こうかとまだ見ぬ土地へと思いを馳せた。

第8話：旧世界へ（後書き）

アリカ王女の処刑はサラっとスルーしてますｗ
残念ながら助ける義理もないので…そして主人公はアスナ至上主義になりつつあり。もう少しで原作に入ります。立場は教師とかは無理がある気がするので、お店でも開かせようかと思案中。

第9話：世界の片隅で（前書き）

オリキャラ登場です。でも、原作に一応（極めて僅かだけど）登場しているので半オリと言うべきかな？　四季と言葉遣いが被る…作者の書き分け能力の無さ故、お許しをｏｒｚ

第9話：世界の片隅で

こちらの世界に来てからかなりの年数が経過した。月日がどれだけ経ったのかを正確に覚えていないのは、充実していた日々だったからだろうか？

最初の数年は、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南北アメリカを気の向くままに巡った。それぞれの国の歴史を、風俗を、音楽を、食事を、言葉を、学べる事を2人で貪欲に学んだ。勿論、全てが良い面だけを見た訳ではない。宗教や民族の違いに端を発した紛争や内戦、悲惨かつ凄惨な場面にも何度も出くわした。それから目を背ける事も当然出来たが、アスナはそれをせず黙々と記憶に刻み付けている様だった。

そして、世界各国を巡る旅が終わった俺達（正確には俺だけだが）は、ロンドンに滞在していた時に知り合った男に誘われてＮＧＯ団体に加わった。それこそが、あの『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』だ。そして俺を誘った男の名前は『龍宮光輝』。一目見て分かったさ、彼女が身に付けていたペンダントの人物なのだと。

「で、光輝。今度の行き先は？」

「ああ、ユーゴだ」

「あそこか…」

ユーゴスラビア…多民族国家である故の軋轢が、悲劇を生む土地と言えばいいか。争いが起こる理由は国によって様々ではあるが、この国で言えば民族・言語・宗教・文字と言った所だな。『七つの国

境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一人のチトー』だったか？

「内容は何時も通りか？」

「ああ、食料や物資の援助と平行して、負傷者の治療…」

「それと、狂気に囚われた者の処置か…」

「それが、正しいとは思わない。でも…！」

そう言って、顔を歪める光輝。付き合いはまだ1年足らずだが、どういった男かは直ぐに分かった。どこまでも真っ直ぐで、優しい男だ。傷ついた人、困った人を放っては置けず何としても助けようと必死になる。向こうの世界に大勢いた勘違い魔法使い（セイギノミカタ）とは違って、しっかりとした覚悟を持った魔法使い。それが、俺の光輝に対する評価だ。

「正しいと思っていないだけ、お前はマトモだよ。他の連中に比べてな…」

「四季…」

「殺し合いの狂気から解放するのは、並大抵の事じゃ無理だ。そんなのは分かっているさ…」

「ああ、そうするのが一番確実なのも確かだ…」

「「でも、間違ってる」」

俺と光輝の言葉が合致する。お互いに思いは同じなのだ。少しでも狂気の犠牲を減らす上でそれが一番早く確実だとは理解してはいる。だが、それでは狂気に囚われた者達と同じ事をしているだけなのだ。他の連中は、それが正しいと主張して譲らないがな。自分達は人助けをしている正義で、それを邪魔して倒されるのが悪なんだと。

戦場は、人の内面が一番色濃く出る場所でもある。かつての俺もオスティアを護る為にと、この手を血で汚した。どれだけの人の命を奪ったかなど今でも分からない。だが、少なくとも今はそれが絶対に正しい手段だったとは思っていない。あの当時は確かにあれしか出来なかったのは事実。だが今の俺ならあれだけの軍勢でも『不殺』で完全に無力化出来る。まあ、無いもの強請りと言われればそれだけだが。だが、それだけ能力に磨きを掛けたのだ、殺さない為に。アスナを悲しませない為に…

「光輝。お前は何時までも自分の良心に素直でいろよ？」

「分かってるさ。これだけは変えられない…」

龍宮光輝と言う名の魔法使いは、どこか魔法使いらしくない魔法使い。だが、俺はそんなこの男を好ましく思っていた。

時は経ち、俺達はユーゴスラビアのとある小さな村を拠点に活動を開始した。何時も通りに村の有力者に、支援を申し出て場所を借りる。そこで、食料や医療品などの物資の提供、病気や怪我をした者達の治療、そして周辺の治安維持を主に行う。

「酷い有様だな…」

「村長の話だと、まだマシな方らしい」

持ってきた物資を並んでいる村人達に順番に手渡しながら、光輝と感じた事を率直に語り合う。それにしても、どの村人も憔悴しきっているな。連日連夜、砲火に怯え、まともな食事や睡眠すら取れなければ仕方が無い事ではあるが…

「村を無差別に攻撃している軍隊崩れの連中がいるみたいだ」

「おいおい…」

洒落にならない話だが、戦場では良くある話だ。村を襲われた人間が、他の村を襲う側になる事だってある。それが、戦場と言う異質な空間の空気を吸った事によって生じる悲劇。弱者が更に別の弱者を襲う、悲劇の連鎖。世界中で今この瞬間も起こっている、悲しい出来事。

「それは、そうとアスナを見なかったか?」

「ん?　ああ、向こうで治療の手伝いをしてたな」

「そうか」

「様子を見に行かなくていいのか?」

「…俺は、そこまで過保護にする気はないさ。出来るだけアスナのやりたい様にやらせてやる」

「いい父親になりそうだな」

「父親って…せめて兄貴にしてくれ」

まあ、そんなやりとりは横に置いといてと。どうやらアスナは自分から手伝いを申し出た様だ。特に何かをしろとも、するなとも言ってないから、自分で考えて出来る事をやっているのだろう。俺はアスナを護ると誓ったが、別に檻の中に閉じ込めて雁字搦めにしておくつもりはない。自由に考えて行動して、色々と学んで欲しい。あくまで俺は最終的な盾であればいいのだ。

「四季、その山で今日の分は最後だ」

「もう一分張りだな」

「ああ、終わったらコーヒーでも入れよう」

「そいつは頑張らないとな？」

仕事の後の一杯を目指して、気合を入れ直す。俺達のしている事は、世界全体の流れの中ではちっぽけな事でしかない。だが、嬉しそうに食事を口に運ぶ子供達の姿を前に、そんな事はどうでもいい事だった。

第９話：世界の片隅で（後書き）

半オリキャラの龍宮光輝について。『Ｋｏｕｋｉ．Ｔ』なのか『Ｋｏｕｊｉ．Ｔ』なのかで悩みましたが、この作品では『Ｋｏｕｋｉ』でいきます。Ｔが龍宮なのは作者の勝手な妄想の結果ですので悪しからず。次話でいよいよ彼女が登場予定。

第１０話：悪魔の子？（前書き）

お待たせしました。更新再開です～

第１０話：悪魔の子？

その村での支援活動を開始してから1週間程たったある日の事だった。

「光輝。だいぶ、人が増えてきたな」

「ああ、噂を聞いて近隣の村々からも来ているんだろ。それにこの辺の治安が安定してきたからな」

以前に増して、援助物資を取りに来る人々の数が日々少しずつだが増えてきていた。ＮＧＯ本部から十分な量の物資が継続的に送られてきているとはいえ、少々先行きに不安も覚える。それだけ、日々の暮らしにすら苦労している人がいると言う事か…

「とは言え、ただ支援を続けても解決にはならないが…」

「あくまでも一時しのぎだしな」

光輝の言う事ももっともだろう。根本的な争いの原因が解決されない限り、ここの村の人達の様に苦しむ人々は残念ながら減らない。支援物資の提供だって、限度がある。それに、何時までも支援に頼っているだけではこの国の人々は自立出来なくなってしまう。俺達はあくまでも一時的な支えでしかないのだ。最終的に立ち上がるのは彼ら自身の役目。

「儘ならないな…」

そんな呟きを背に、俺は次の物資を取りに倉庫代わりの民家へと足

を運ぶ。壁には生々しい銃弾が撃ち込まれた跡が残り、ガラスなど一枚も残っていない。戦火の傷跡が残る建物の前に立つ、見張り番に声を掛けてから中へと入った。

「…ん？」

必要な物資の入ったダンボールの箱を山から降ろしていると、外から何やら叫び声がする。はて、何だ？　どこぞの軍隊崩れが来ても、周辺で警戒している連中が対処する筈だし…何か嫌な予感がする。

民家の外に出ると、何やら人だかりが出来ていて騒ぎになっていた。人垣を掻き分けながら進んでいくと、次第に鮮明に言葉が聞こえる様になってきた。

「化け物が！！」

「悪魔の子よ！」

「コイツが来たからウチの村は！！」

どうやら、穏やかな内容じゃない。人々の言葉に含まれるのは紛れも無い敵意であり、憎悪、殺意、嫌悪感と言ったもの。それらで人を殺せるとしたら、浴びせられている人間はとっくの昔にオーバーキルだろう。さて…っと、光輝発見。

「光輝！　どうしたんだ！？」

「ん、四季か。村人達が突然騒ぎ出してな。『悪魔の子が来た』って…」

「『悪魔の子』？」

「あの子だ」

そう言って、光輝が指差した先にいたのは、ボロボロの服を身に付け褐色の肌と肩に掛かる位の黒髪が特徴の少女だった。身なりは貧相だが、その瞳にはハッキリとした意志が宿っているのが見て取れた。これだけの大人達から囲まれて罵声を浴びているのにも関わらず、健気に耐えている。強い子だ…

「見た感じだと3、4歳って所か？」

「ああ、恐らくはな…」

誰も止めに入る人間がいないって事は、親と逸れたか、死別したか…下手すりゃ捨てられたか。どちらにしろこのまま放っておく訳にはいくまい。『悪魔の子』だか、何だか知らないが大の大人が寄ってたかって罵声を浴びせているのは見るに耐えない。少なくともアスナには絶対に見せたくない光景だな。

「それにしても胸糞悪い。取り合えず、彼女は俺が助け出す」

「…頼めるか、四季？」

「ああ、丁度いい遊び相手（アスナ）もいるしな？」

「頼む。俺は村人から彼女について話を聞いてみる」

光輝も俺と同じく彼女を放っておけなかったらしく、二手に別れて行動を起こす。俺は目の前で少女を囲んでいる村人達の人垣に突っ込んでいき切り崩していく。何やら、その度に非難めいた視線や舌打ちが聞こえたようだが無視だ無視。子供囲んで罵声しか浴びせられないヤツが、粋がるなよ…

「どいてくれ」

最初は行く先を塞ぐ村人達に穏やかに声を掛けつつ前に進んでいたが、思うように進まない。どうして、こういった時にだけ無駄に集団行動を取るんだ人間ってヤツは…

「どけって言ってんだろうが！！」

仕方が無く目の前にいた、邪魔な男5人をまとめて横に爆風で吹き飛ばす。こういう時に能力って便利だな…勿論、手加減はしている。いちいち、怪我させていたら医療品が足りないからな。そもそも、そんな下手くそな能制御などもうしない。

「ったく、こんな小さい子1人囲んで恥ずかしいとは思わないのか？　お前らは？」

「余所者が口を出すな！　何も知らないクセに！！」

「余所者だから口出すんだろ！　それに知る必要なんてあるのか？」

「うるさい！　消えろ！」

「お前がな！」

俺を排除する為か、無謀に掴みかかってくる馬鹿を、先ほどの連中の方に吹き飛ばす。直ぐに能力を使うなって？　悪いが何でもかんでも話し合いで解決なんてのは儚い夢物語だ。現実は、残念ながらそう甘くないんだよ。力を見せるしかない時が実際には数多く存在する。

考えてもみてくれ。目の前で大勢の大人達から罵声を浴びている幼い少女がいる。それを助けるのに何を知っている必要がある？　もし、本当にこの子が『悪魔の子』とやらで、今までに多くの命を奪ってきた様な極悪非道で残酷な存在なのだとしても、その時に俺が責任を持って処理すればいいだけの話だ。少なくとも、今俺の目の前にいる少女が危険な存在だとはとても思えない。なら、俺がすべき事はこの憎悪の輪から助け出す事しかあるまい。

「ハッキリと言っておくぞ。俺の邪魔をするな」

「貴様！！」

「うせろ…！」

「この「待つのじゃ」村長…！？」

「はっ、今度は弱い者イジメの代表者が登場ってか？」

「口の利き方には気をつける事じゃな。何も知らん若造が…後で後悔しても知らんぞ！」

「はっ、上等！」

何時の間にやら着ていた村の代表者の最終通告とも取れる言葉。だが、そんな脅し程度でこの俺が揺らぐとでも？　その位で揺らいでいたら、これまでアスナを１人で護ってなど来れなかったさ。根本的な部分での腹の括り方が違うんだよ…

第１０話：悪魔の子？（後書き）

さて、いよいよ彼女が登場。誰かって？　そりゃ、彼女しかいないっしょ？

第１１話：悪魔の子？（前書き）

こんな感じでＧＯＧＯ！！

第11話：悪魔の子？

「さて、ようやく静かになったな」

「……」

半ば強引にNGOの拠点である民家まで少女を連れてきた。最後の最後まで、村人から浴びせられる罵声が止む事は無かった。これは相当の理由がありそうだ、この子に。

「シキ、この子は誰？」

「ああ、えっと…君は？」

「……？」

俺の問い掛けにキョトンとしている少女。急に声を掛けられて驚いているのかと思ったが、どうやら違うようだ。ああ、もしかして…

「俺はシキ。シキ・トサナキ。君は？」

自分を指差してから名前を名乗り、改めて少女の方へと指先を向ける。それでようやく何を聞かれたのか理解したらしい少女の口から、言葉が紡ぎだされた。思いがけぬ名が…

「…マナ。マナ・アルカナ…」

「えっ…？」

「……？」

「シキ、どうしたの？」

アスナと少女改めマナが俺の顔を不思議そうに見上げてくる。きっと、間抜けな顔をしているに違いない。だが、正直そんな事はどうでもいい位に俺は衝撃を受けていた。

（マナ・アルカナって、確か龍宮真名の事だよな？　そりゃ、確かに光輝がいるから彼女と遭遇する可能性が０（ゼロ）である訳はなかったにしても…）

偶然ってのは怖い。いや、この世の理に偶然など無く必然のみであると考えるなら、これは既定事項だったのか？　どちらにしろ、俺とマナは出会った訳だ。

「ああ、すまない。ちょっと、ビックリしただけだ」

「ビックリって何に？」

「昔、そんな名前の登場人物が出てきた本を読んだ事があってな」

「へ～」

取り合えず、嘘ではない答えをアスナには返しておく。本当の事は流石に言えないがな…漫画の登場人物ですなんて、とてもじゃないが言えない。それにしても、『悪魔の子』ね。ある意味で彼女の本質を的確に捉えた言葉ではあるが、ただの一般人がそれを見抜けるのか？　或いは別の何かが…？

「四季」

「ん、光輝か。どうだった？」

「ああ、取り合えず理由は分かった」

「そうか…奥でいいか？」

「ああ。アスナちゃん。しばらく彼女の事を頼めるかな？」

「任せて」

「頼む、アスナ」

マナの相手をアスナに頼む、俺と光輝は民家の奥にあるキッチンスペースへと場所を移した。光輝が簡易式の防音結界を張っている事からみて、余り聞かせたくない話か…

「それで、何なんだ『悪魔の子』ってのは…？」

「ああ。どうやら彼女が現れた村が次々と武装勢力に襲われて壊滅しているらしい」

「なるほど。それで悪魔呼ばわりか…」

むしろ、それなら死神なんじゃないかと思ったりもしないではないが、ここは空気を読むとしよう。

「それに、彼女の両親ってのも原因にある様だ」

「人じゃないとか？」

「母親については、間違いなく人間だそうだ。この近くの村のの出身だったらしい」

「そうすると、父親が人じゃないと？」

「そうらしい。しかも、悪い事に人以上に人らしく振舞っていたとさ」

「おいおい、それは逆効果だろう…」

人の生活に紛れ込むには人として振舞う必要は当然ある。だが、それも限度って言うものがあるのだ。必要以上な振る舞いは、逆に人ではないと証明してしまう原因ともなる。どうやら光輝が聞き出してきた話を聞く限り、マナが半魔族（ハーフ）であることもバレている可能性があるのか？　そうなると、これはかなり厄介な問題だな。俺達がただのＮＧＯ団体なら問題はないんだが、如何せん魔法使いが所属するＮＧＯ団体だからな。当然ながら、性質の悪い（せいぎのみかた）魔法使いさんもいる訳で…

「状況はかなり不味いか…」

妙な正義心から余計な行動に走らないとは言えない。厄介なのは、向こうから応援が来た場合だな。ここで、戦闘にでもなったら民間人を巻き込むのは必至。まあ、マナに罵声を浴びせているような連中の事まで心配してやる必要はないが…

「四季はどうする心算だ？」

「ん～、ちょっと相談してくる」

「相談って…アスナちゃんにか？」

「ああ、隠し事はなしだ」

キッチンから再び、アスナ達がいるリビングへと戻る。さて、どう切り出すか…

「アスナ、実は「マナって半魔族（ハーフ）なんだって」…そうか」

「……」

相当重要なハズの事をあっけらかんと言ってのけるアスナに此処は痺れるべきだろうか？　それとも不安そうに俺を見上げるマナを安心させるのが先か？　そんな二択が俺の脳裏を過ぎった。

「えっと、マナは半魔族なのか？」

「……うん」

「そうか。ちなみに俺は爆弾魔（ロマンチスト）だ」

「ろ、ロマ…？」

「気にしないで、ただのシキの口癖だから」

「あ、あのなアスナ…」

俺の最近の話の切り出し方を容赦なく切り捨てるアスナ。何だか、

最近妙に俺に対して手厳しくなってきた気がする。変な方向に育ってないか？

「それは置いておいて、お父さんとお母さんは？」

「…いない」

「シキ。地雷」

「いや、不可抗力だろ！？」

「でも、大丈夫…」

「そっか…強いな、マナは」

髪をそっと撫でてやると、目を細め、されるがままになるマナ。ちなみにアスナがとても怖い表情で俺を睨んでいるとだけ追加しておこう。それにしても、半魔族だろうと人間だろうと、この位の歳の子が両親を恋しいと思う事は不変の共通事項だろうに。そして、それが不可能でも気丈に振舞おうとする彼女の姿が痛ましかった。そうやって生きるしか、他になかったんだろう。

「取り込み中すまんが、四季。俺は他のメンバーと話をしてくる。暴走する前にな」

「頼む。俺よりお前の言葉の方が聞き入れられるだろうからな」

「ああ、彼女の事。頼むぞ」

「任された」

後ろで話を黙って聞いていた光輝は、他のメンバーに話をする為に民家を後にした。少なくとも加わってまだまだ年数の経っていない俺よりも、光輝が説明した方が受け入れられ易いだろう。勿論、楽観は出来ないがな…何がきっかけで火が出るかなどわからん。願わくば何事も無い事を…

マナを保護したその日は、何事も無かった。そう、その日は何事も起きなかった。事件が起きたのは、マナと出会ってから１０日程たったある夜だった。明日の活動の打ち合わせに行った光輝を見送った俺達は、宿泊場所となっている古びた納屋の中で３人で雑魚寝しながら話をしていた。主に、俺とアスナがこれまでの旅の話をマナに聞かせていた。だが、目を輝かせて聞いている彼女を見ると、自然と説明にも熱が入っていった。どれ位の時間が経っただろうか？

少しばかり光輝の帰りが遅い事が気にはなっていた。だが、話が広がっているのだろうと、勝手に思い込んでいた。光輝が血塗れで納屋に飛び込んでくるまでは…

「こ、光輝！？」

「し、き…逃げ、ろ。彼女を…連れて！」

深手を負いながらも、マナを指差し逃げる様に言う光輝。それだけで何が起こったかを理解するには十分だった。話し合いは明日の活動について何て内容じゃなかった様だ。そして、光輝はそれを止めようとして敵として攻撃されたと見るべきだろう。傷を負いながら、

それを伝える為に光輝はここまで辿り着いた。

「シキ…」

「アスナ。光輝の手当てを頼む。薬の使い方とかは分かるな？」

「うん！　任せて！」

「頼む。それとマナ。君もアスナを手伝ってやってくれ」

「……わ、私の…」

「どうした？」

「私のせいで、たつみやさん怪我したの？　また、私のせいで！？」

光輝をジッと見つめながら、そう問い掛けてくるマナ。その小さな身体は震えていた。『悪魔の子』と言われ、自分が行く先行く先で誰かが傷つく様子を目の前で見てきたのだろう。彼女の心を支配するのは逃れようの無い恐怖。

「それは違う。マナの責任じゃない」

「でも！　また…」

そう言って自分を責めるマナ。『悪魔の子』と出会う人々から罵られ続ければ、そう思ってしまっても仕方が無い。調べてみると彼女の現れる村が連続して襲われた原因は別にあった。理由は分からないが、運悪く彼女が逃げて行った村々が、武装勢力が侵攻していった主要なルートだったのだ。物資が乏しい彼らは、頻繁に補給が必

要となる。当然、ルート上にある村々は獲物でしかない。これも必然と言うならば、起こるべくして起こった悲劇。別にマナが悪い訳ではない。ただ村人からしてみれば他に怒りのぶつけ様が無かったのだろう。結果として弱い立場にあったマナが全ての憎悪を向けられる対象になってしまった。村人の苦しみも、マナの苦しみも両方理解出来てしまう。

「マナ。人は、弱い生き物だ。時に誰かを虐げる事でしか、辛い事から逃げる方法を見出せない時もある。でもな、それでもきっと何時かは気が付く…間違っていたと」

「シキさん…」

「ただ、これから此処に来る連中は全く別だ。奴らは、自分の力に酔い、溺れ、驕り高ぶってやがる。物凄く胸糞が悪い連中さ」

「戦うの…？」

「いや？　ＯＨＡＮＡＳＩしてくるだけだ。タップリとな…」

不安そうに俺を見上げるマナの頭を軽く撫でてから、俺は黙って俺達のやり取りを見ていたアスナへと向き直る。言葉を発せず俺を見るアスナの瞳に映るのは、不安といったネガディブな感情ではない。ただ俺に対する純粋な信頼…それにしっかりと応えないとな。

「アスナ。マナとここにいてくれ」

「うん」

「俺は、友達を傷つけられて笑顔でいられるほど、お人好しじゃな

い」

「どうするの？」

「死んだ方がマシだって経験をさせてやるだけだ」

「…信じてるからね？」

「ああ、行ってくる！」

さて、覚悟をいいか魔法使い諸君？　俺の大事な人達を傷つけた罪はかなり重いぞ？

後悔は、懺悔は、命乞いは、お祈りはまとめて済ませたか？

『忘れられない夜』の幕開けだ。

第11話：悪魔の子？（後書き）

さて、次回は主人公暴れるの回！
け、ケダモノ！（笑）

第１２話：悪魔の子？（前書き）

あれ？　どうしてこうなった？

第12話：悪魔の子？

「はっ、これはまた随分と豪勢なお出迎えじゃないか」

納屋を出た俺を出迎えたのは、『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』の見知った顔の連中だけでなく、本来ならこちら側にはいないであろう重装備の兵士。なるほど、仕掛けてくるまでに時間があったのは連中を此処に呼ぶためか…

「笑えるな、自分達じゃ何も出来ないからってMM重装魔導装甲兵（ただのゴロツキ）に泣きつくとは…」

「と、トサナキ！　今ならまだ間に合う。ガキを引き渡せ！」

「黙れよ。光輝を傷つけておいて、よくほぞけるな？」

「あのガキは半「お前達は黙っていろ」っ、わかりました」

どうやら、ゴロツキ連中が痺れを切らしたらしい。全く、短気は損気って言葉を知らないのだろうか？

「我々の事は知っているようだな。シキ・トサナキ…いや、『薄汚れた英雄』とでも呼ぶべきか？」

「元老院の忠犬（パシリ）風情が良くほざく。自分の正義とやらも貫けない負け犬が。どうせならキャンって鳴いたらどうだ？　もしくはその場で三回くらい回ってワンとでも鳴くのがお似合いか？」

「…どうやら死にたいようだな？　なら…し「待て」っ、隊長！？」

若さ故か、軽い挑発にのって仕掛けてこようとした兵士を一言で抑え付けた男。隊長と呼ばれているからには、それ相応の実力者と見るべきか…？

「あからさまな挑発にのってどうする！　我ら誇り高きＭＭ重装魔導装甲兵ぞ！？」

「も、申し訳ありません！！」

「それに相手は国を裏切ったとは言え、英雄とまで呼ばれた男だ。怒りに我を忘れて勝てる男ではない」

「流石は隊長さんって所か？　冷静な事で…」

「ふん、伊達に戦場を生き残ってはおらん」

あの大戦を生き抜いた正真正銘の英傑か。これで、元老院のジジイ共の忠犬じゃなかったら酒でも交わしたい所だが…まあ、仕方が無い。俺は彼女達を護る為に戦う、この男は国の命を受けて戦う。理由は違えど、その道は交わる事は許されず。故に、決着を付ける以外に選択肢は無い。

「さて…」

「いざ…」

「「勝負！！」」

先手を取ったのは相手方。魔法で身体能力を向上させている分、初

動が俺よりも上なのだ。距離を一息に詰め、その加速を上乗せした戦斧を横殴りに振り抜いてくる。大方、近くの壁にでも叩きつけるつもりだろう。だが、初動の速さが全ての勝負を決する訳ではない。俺のアドバンテージは、魔法の様な詠唱が不要である点。そして…

「俺の認識下に入れば終わりだって事だ」

そう、それが絶対的な俺のアドバンテージなのだ。1度でも認識下に捉えてしまえば、例え創造主であろうと一撃で葬れる。まあ、今は自分に『不殺』を課しているから殺しはしないがな。

「まずは、『武装解除』！」

わざわざ言葉にする必要は本来ないが、俺の能力を多少でも誤魔化す上では欠かせない。未だに俺の能力の本質は解明されていないらしいからな。まあ、バレたからと言って対策が取れるかと言ったら取れないとしか…ほんとにコレはチートだな。

「ぬう！？」

俺目掛けて振り抜かれた戦斧だけでなく、その身を護っている強固な鎧すら消し飛んだ。まあ、当然の事ながら、容赦なくその下のインナーも纏めて消し飛ばしたので、彼には悪いが悲惨な悲劇が待っていた。

「きゃぁぁぁぁ！！」

「へ、変態！！」

「いや、ちょ、ちょっと待て！！」

当然ながら、ここにいる全てが男って訳はなく…少数ながら女性もいるのです。そして、いきなり目の前で大の男が武装解除（ストリップ）したら悲鳴の一つも上がる訳で。そして、そんな状態になった時の女性が何をするかと言うと？気絶する、？悲鳴を上げて逃げる、？攻撃に転じるって感じだろうか？　特に彼女達は魔法使いなのだ、？だった場合にはどうなるか想像して欲しい。こうなるのだ…

「魔法の射手！！　雷の１３矢！！」

「魔法の射手！！　炎の１１矢！！」

「ま、待て、うわぁあぁｓｄｆｇｈｊｋｌｐ！！」

「こうして、女の敵は葬られたと…」

「いや、お前だろ原因は！？」

自分達の隊長が味方であるハズの連中にボロボロにやられている中で、律儀に俺のボケに突っ込んでくれる彼ら。そんな彼らともう少し楽しい漫才でも楽しみたいが、時間は残念ながら有限なんだ。隊長格が味方に潰された事で生じた動揺を最大限に生かさせて貰わないとな？

「さて、お遊びはこれ位にして…ここからは真面目にやらせて貰う」

「「「くっ、隊長の敵！！」」」

「隊長死んでないし、俺は敵でもねえ！！」

何時の間にか、殺された事になっている隊長の人望の無さに絶望すると共に、敵にされてしまった自分を少しだけ呪った。まあ、戯言だけど…って、俺には似合わないな。

「固まっていいのか？　『武装解除』っと」

「「「あっ…！？」」」

隊長（こじん）の敵とか熱く語っていたので、容赦なく綺麗に消し飛ばしてやった。当然ながら魔法障壁が張ってあったんだろうが、そんなもんは最初から全否定（スルー）。尊い犠牲となった隊長殿と同様に全裸になった彼らは顔を真っ赤にして喜んでくれているようで俺としても何よりだな。

残念ながら亡くなった隊長の弔い合戦の勢いなどあっという間に消え去り、裸に引ん剥かれてたじろぐ彼ら。幾ら厳しい訓練を積んだ兵士だろうと、屋外でいきなり強制ストリップをする羽目になってしまえばどうやっても動揺せざるを得まい。羞恥心が０そうな筋肉（ラ）馬鹿（カン）とかなら意味ないだろうけど…

「おいおい。この先には、小さいとはいえ立派なレディ達がいるんだぜ？　そんな見っとも無い格好じゃエスコートは出来ないだろ。紳士諸君（へんたい）？」

「き、貴様！！」

「ま、待て！　同じ手に…！！」

「くっ…卑怯な！！」

「いや、戦いに卑怯も何もないだろうに…」

全裸にされて必死に大事な所を隠そうと足掻いている連中を嘲笑いながら挑発しつつ、俺は他の面子に改めて目をやる。『四音階の組み鈴』の連中は大した脅威にはならない。悪いが、1流は皆無で2流か3流が関の山。残りのMM重装魔導装甲兵が戦力としては少し厄介だが、基本的には『武装解除（ストリップ）』の方向で行けば戦闘力はかなり削れる。後は、その後ろに控えるローブ姿の魔法使い達か…

「如何にも胡散臭い連中ってか？」

「……」

「反応無しとか悲しいね…『ぎゃあぁぁぁぁ…！！』ん？　引っ掛かったか」

どうしようかと思案している時に納屋の方から反応があった。仕掛けて良かった、接触式爆弾ってか？　納屋には、アスナとマナ、そして負傷した光輝がいる。当然、俺の背後をついて狙いに行く連中がいると踏んだ訳で。不届き者が納屋周辺の空気に接触したら起爆する様にしておいたんだよ。アスナ達が引っ掛からないかって？　アスナは俺を信じてくれているから出てこないだろうし、マナも出ようとしたらアスナに止められる。光輝もあの怪我なら直ぐには出て来れない。消去法で味方が引っ掛かるって事はない。

「悪いな。俺を倒さない限り先には進めんよ」

「ちっ…」

「あからさまに舌打ちとか、流石は3流」

言っちゃ悪いが、１つや２つの仕掛けが失敗したからといって態度に直ぐに出るようでは１流にはなれない。様々な状況を想定して動かないでどうする？　これは完全な余談だが、アスナ達がいる納屋にはまだ仕掛けがしてある。万が一に俺が死んだとしても彼女達が逃げるだけの時間を稼げる様にだ。

「さて…」

状況はこちら側に有利と見てよさそうだ。しかし、どうするか…ただ倒すだけじゃ面白くない。光輝を傷つけた分はキッチリと落とし前は付けさせないとな。何かこう胸がスカッとするような…難しいな。

俺が思案している間に、攻撃の１つや２つ仕掛けてくればいいのに何もアクションを起こしてこない。よく変身するヒーローや合体するロボットとかにも思うが、あの瞬間が一番の急所な気がする。まあ、きっと一瞬の事で攻撃出来ないとか、悪なりの美徳とかあるんだろうか…一番は子供が絶句するからだろうけど。そりゃそうだ、正義の味方が変身中や合体中に倒されるとかどんなコメディだよ…

大方、武装解除を警戒してってのと、裏方組が失敗したってのが原因か。仕掛けるにしても、作戦の建て直しが必死。隊長は味方に潰され、納屋も抑えられない、動きが鈍るには十分か。

「早く光輝を医者に見せたいんでな。終わらせるぞ…」

「っか、構え！！」

「遅い…」

こちらが動いた事で、停滞していた空気が動く。俺の動きに併せて別のＭＭ兵が号令を掛けるが時は既に遅し。瞬動モドキで前衛のＭＭ兵に肉薄し、戦斧を消し飛ばす。

「くうっ…！！」

更に手の平を鎧に押し付けて、纏っている魔法障壁を爆破する事によって生じる衝撃波のみを鎧を通過させ、ゼロ距離から中の人間に浴びせる。武術で言う寸勁をイメージすればいいのだろうか？　俺には武術の心得が残念ながら無いので仕組みなどは分からないから、見た目だけマネしただけのものだ。だが、効果は目の前で倒れていく鎧姿の兵士を見れば一目瞭然だろう。１人片付けてしまえば、後はそれの繰り返し作業に入るだけだ。最大戦力であるＭＭ兵が次々と地に伏す中で、他の連中は既に戦意を喪失し始めていた。結局、襲撃者（チンピラ）達の全滅まで時間は掛からなかった。

第１２話：悪魔の子？（後書き）

前書きにある様に、書いてから思った。まともに戦ってない！　まあ、武装解除（ストリップ）だけで十分、戦意を削れるって事ですね（ぇ

※登場人物紹介とかは原作入るまでには掲載します。

第１３話：麻帆良へ（前書き）

さて、いよいよ麻帆良へ。もう少しで原作に入る予定。

※主人公の容姿を真に勝手ながら変更しました。完全に作者の趣味です、どうかお許しをｗ

第１３話：麻帆良へ

村での襲撃事件から2年余りが経過した１９９４年の夏の終わり、俺はアスナとマナを連れて日本へと向かう飛行機の中にいた。あの事件後、俺はアスナとマナを連れて再び世界を巡る旅に出ていた。アスナにとっては既に慣れたものではあっただろうが、マナにも世界の広さを見せたかったのだ。短期間ではあるが、現地に滞在し、言葉を学び、文化を学び、人々と交流し、意見を互いに交わす。短くとも濃密な時間を俺は彼女達と共に過ごした。この経験がきっとマナにも得難い何かを与えてくれると信じて…

因みに、俺はもう『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』のメンバーじゃない。あの一件で俺と光輝はあの組織から抜けた。苦しむ人々の為に昼夜を問わず、精力的に活動しているメンバーはまだ沢山いる。だが、１度こういった事が起きた以上は仲間ではいられなかった。再び旅に出た俺達と別れ、光輝は実家である日本の麻帆良にある『龍宮神社』に帰った。今回、日本に行くのは、別れ際に光輝に誘われたのと、予てからの自分自身の予定に沿ったものだ。記憶はあの日に遡る…

「四季。俺は実家に戻って、親父達の跡を継ごうと思う。我侭言って随分と迷惑も掛けたから、そろそろ親孝行もしないとだしな」

「そうしてやれ。きっとご両親も喜ぶぞ？」

「四季はどうする？　もし良かったら日本に来ないか？　実家なら昔住み込みの人達が使っていた部屋とか空いているし…」

「申し出はありがたいが、マナにも世界を見せてやりたい」

あの襲撃事件後、俺はマナをアスナと同様に護ると決めた。まあ、最初は迷惑を掛けるからとかマナが言っていたが、アスナもいるから今後の襲撃など今更な話な訳で。結局、アスナがマナを説き伏せる（何気にアスナの話術が巧みだった）感じで一緒に行く事になったのだ。アスナからすると、妹が出来たような感じだろうか？　何時の間にやらお姉ちゃんの様な自覚を持って行動しているらしく、俺としてもそんなアスナの成長が嬉しかった。

「そうか。でも、ずっとって訳じゃないんだろ？」

「ああ、2人を学校にも通わせてやりたいしな…2～3年したら麻帆良に行くよ」

「分かった。その時は真っ先にウチに来い。歓迎するからな！」

「しばし、お別れだ。光輝」

「アスナちゃんとマナちゃんを泣かすなよ？」

「言われなくてもな」

そんなやりとりを互いに交わしたのだ。そして、今日その日の約束を果たす為に日本へと降り立つ。

『ご案内致します。当機はまもなく東京国際空港に着陸致し…』

「シートベルトはしたか？」

「四季　兄（にい）に言われる前からね？」

「明日菜と一緒で、四季兄さんに言われる前からしてたさ」

「さいですか…」

この2年で2人の口調もだいぶ原作の雰囲気に近くなってきた。見た目はまだ小学生だが、世界を巡ったせいなのか、精神的には大人びてきた言っていいかもしれない。それと、日本での戸籍を作る上で2人は俺の義理の妹という形になった。東西南北（トサナキ）　明日菜（アスナ）、東西南北（ナキ）　真名（マナ）。原作とは違う苗字を持つ事になった2人。果てさて、どんな事になることやら…ってもう1つ大事な事がある。

2人と仮契約を結んだのだ。何か必要に迫られたからと言う訳ではなかったのだが、半年程前に2人から言い出してきた。彼女達がそう言い出した以上は、その意思を尊重するのが俺のスタンスなので受け入れた。ただ、俺としては宝石か血液を介した契約にしたかったのだが、2人が断固としてキス以外はダメだと主張して譲らなかったので、結局俺が折れるしか無かったとだけ言っておく。後で仮契約を言い出した理由を聞いたら、家族として繋がりを深めておきたかったそうだ。何とも泣かせてくれる妹だと、その時は涙した…

「ああ、そうだ。2人とも、麻帆良に着いたら頼むから大人しくしていろよ？　向こうから何か仕掛けられても俺が対処するからな？」

「「無理♪」」

「いや、お願いしますよ！？」

「やられたら倍にしてやり返す！」

「安心してくれ、風穴開けるだけだから」

「安心できねえ！！」

あれから何度と無く自称正義の味方とやらと戦う機会があったのだが、２人も自分の身ぐらいは自分で護ると戦い方を覚え始めたのだ。本当なら止めるべきなんだろうが、覚悟を決めて真剣な眼差しを見せる２人にそんな無粋な言葉は掛けられなかった。俺の考えが甘すぎるのかもしれないが、危なくなったら手を出すくらいで見守る事にした。明日菜も真名も籠の中で自由を奪われた鳥じゃない、自分の頭で考え、行動出来る。そして、その結果に対してもちゃんと背負うだけの覚悟はある。言っちゃ悪い、麻帆良に着たばかりの頃の原作ネギとは雲泥の差である。まあ、アレは周囲の環境が悪かったってのもあるが…

「四季兄？」

「四季兄さん？」

「ん？　ああ、着いたか…」

どうやら思い返している内に着陸してしまっていた様だ。さて、前世から考えたら何十年ぶりの日本（ふるさと）だろうか？　かつての世界とは違えど、俺にとって日本が故郷であることに変わりは無い。ここで俺達の新しい生活が始まる。そして、あと何年かすれば俺の知る原作が始まる。勿論、変化はあるだろう。だが、何があろうと２人は俺が護る。それだけは、絶対に譲れない俺の道だから。誰を敵に回そうと…

「さて、行くか。麻帆良へ」

明「これが、麻帆良崩壊のプロローグだとは誰も気がつかなかったわ」

真「次回、麻帆良殲滅戦。弾丸の雨が降る」

「違うから！！　本当にヤメテ！？」

麻帆良に着く前に、俺が精魂尽き果てそうだ。どこでこんな風に育ったんだ？

第１３話：麻帆良へ（後書き）

ちょっと、急ぎ足で時間を進めました。補足は後々入れていきます。

第１４話：再開と親心（前書き）

光輝の両親登場！　まったりとした時間が続きます。

第１４話：再開と親心

「うわ～」

「これは…」

「凄いな。光輝から話には聞いていたが…」

成田空港から鉄道を乗り継いで埼玉にある麻帆良に到着した俺達を出迎えたのは、欧州の都市かと見間違える様な西洋式の街並みだった。『麻帆良学園都市』、幼等部から大学部まで多種多様な教育・学術機関が集まって出来た世界でも有数の学園都市。まあ、学園都市ってのは表向きで、実際は日本における西洋魔法使い達の拠点でもあるのだが。

それにしても、どれだけの人間がここで学び暮らしているのだろうか？　ここで暮らしている大半の人間は魔法などとは何の関係もないただの一般人だ。そして、多くの学生達は魔法に何ら関わりを持つ事なくこの学園都市を巣立っていく。まあ、不幸にも巻き込まれてしまう人間も決して少なくないのだろうが…って、そんな事はどうでもいいか。

「取り合えず、『龍宮神社』を目指すぞ」

「それって、光輝さんの所？」

「ああ、暫くはそこに厄介になるからな。最初に挨拶はしっかりとしておかないと」

「四季兄さん、何か手土産とかは？」

「ああ、抜かりない。ちゃんと用意したさ」

流石に、手土産の1つも無しに押し掛けたら非常識だと思われてしまうだろう。どれだけの期間になるかは分からないが、ここでの生活の基盤を作るまでは光輝のご両親の好意で母屋の離れを借りられる事になったのだ。俺としてはその期間をホテル暮らしでも別に問題無かったのだが、光輝が是非にと強く誘ってくれたのでお言葉に甘える事にした。

「さて、ガイドブックによると…」

流石は新学期に迷子すら出る学園都市だ。駅にちゃんと全体のガイドマップが置かれていた。それを見る限り、どうやら歩いていくよりも目の前を走っている路面電車を利用した方が早く着けそうだ。丁度良く、向こうから走ってくる電車に3人で乗り込み、車窓からの景色を楽しみながら一路、目的地を目指した。

一応、夏休み期間中と言う事もあってか街にはそれなりに人の姿があったが、『龍宮神社』の境内は静けさが支配していた。所々、木々が生い茂り残暑の日差しを遮ってくれている。時折吹くそよ風に幾ばくかの涼を得ながら辺りを見回しながら境内を歩く。そして、そんな静かな境内の中で竹箒を手に黙々と掃き掃除をしている袴姿の男…光輝を見つけた。

「久しぶりだな、光輝」

「ん、四季！？　随分早かったじゃないか？」

「ああ、運良く予定より早い飛行機のチケットが取れてな？」

「そうか。取り合えずここで立ち話も何だから母屋の方へ来いよ」

そう言って、掃除の手を止めて歩き出した光輝について行く。境内を抜け、奥にあると言う母屋へと向かう。鬱蒼と生い茂る木々の中を抜けると平屋建ての屋敷と言っても良さそうな母屋が目の前に現れた。

「立派だな…」

「元々、ここも大人数だったからな。今は俺達家族だけしか暮らしていないがな」

「なるほど」

軽く全体を見渡しつつ、玄関を潜る。靴を脱いで上がった俺達は、長い廊下の奥にある和室へと案内された。そこには、2人の男女が俺達の到着を待っていた。2人共どこか穏やかで物腰柔らかな人柄を醸し出している。外見の年齢からして光輝の両親だろう。眼鏡を掛けた男性の方が俺に気がつくと声を掛けてきた。

「君が、東西南北　四季君だね」

「はい。初めまして、東西南北　四季です。それと妹の…」

「東西南北　明日菜です」

「東西南北　真名です」

俺に続いて、明日菜と真名も挨拶する。挨拶とか礼儀作法はしっかりと言い聞かせたので2人共ちゃんとしている。

「おお、その歳でしっかりと挨拶出来るとは…。っと、失礼。私は、龍宮一馬。光輝の父だ、それと…」

「光輝の母、早苗です。東西南北さんの事は光輝から色々と窺っています」

「そうでしたか。どんな話なんだかって、そうだ…つまらない物ですが、どうぞ」

「これはご丁寧に。早苗、人数分の茶を入れてくれないか？」

「ええ、直ぐに」

早苗さんが部屋を出ていき俺達は一馬さんと向き合う形で、座卓を挟んで座布団に腰を降ろした。懐かしい畳の匂いが俺を包み込む。やはり日本から何年離れようと、日本人としての心や感性ってのはしっかりと残っている様だ。

「予定より早く到着してしまい、ご迷惑をお掛けします」

「いやなに、数日位なら何の問題もないさ。気にしないでくれ」

「そう言って頂けると助かります」

社交辞令とも言うべき他愛のない会話を一馬さんと交わしながら、まずは早苗さんが戻ってくるのを待った。

座卓に人数分のお茶と、お茶菓子が用意され改めて挨拶を交わす。俺達はこれからここで暫くはお世話になる。色々と迷惑を掛けてしまうかもしれないしな…

「改めて、温かいお心遣い感謝します」

「止めてくれ、東西南北君。礼を言わなくてはならないのは私達の方なんだから」

「そうですよ、東西南北さん」

「君は、いや君達は息子の命の恩人だ。何とお礼を言っていいか」

「本当に、光輝を助けて下さってありがとうございます」

「改めて礼を言う。四季、明日菜ちゃん、真名ちゃん」

3人揃って深々と頭を下げられてしまった。何ていうか、面と向かって改めて礼を言われるとくすぐったいな。明日菜と真名も珍しく照れてるしな。実際に、光輝を救ったのはこの2人だ。あの時の応急処置が無かったら危なかったって後で見せた医者も言ってた。

「頭を上げてください。俺達は出来る事をしたまでですから」

「確かに、そうかもしれない。でも、私は自分の墓より先に息子の墓を作らずに済んだ。息子を先に逝かせずに済んだ。親として、何度礼を言っても足りないと思っているんだ」

「この子が、人の役に立ちたいと家を出てから、ずっと不安でした。何時か何かに巻き込まれるじゃないかと…」

「……」

「今、こうして3人でここで暮らせているのも、全ては君達のお陰なんだ。本当に心から感謝している」

「ありがとう」

再び深々と頭を下げられてしまう。原作通りなら光輝は両親と生きて再会する事は叶わなかった。それがこうして家族3人で暮らせている。それに俺達が貢献出来た事を改めて理解した。少し位なら、自分のした事に胸を張ってもいいかなと、そう思った。

第１４話：再開と親心（後書き）

例え、どんな形であれ我が子の命を救われた事を、恩に思わない親はいないですよねって話。

第１５話：西へ（前書き）

さてさて、物語は止まる事なく動き続ける訳で…

第１５話：西へ

「住む所だけでなく、妹達の身元保証人にまでなって頂いて、感謝します」

「なに、これ位ならお安いご用だよ。むしろ、他にも何かあれば出来得る限り力になるから言ってくれ」

来年の春、麻帆良学園の小学校に入学する上で身元保証人が必要だったのだ。保護者は俺で問題ないが、身元保証人は、俺以外の誰かが必要になる。その話を光輝経由で先に聞いていた一馬さんが引き受けてくれたのだ。まさか小学校の入学で身元保証人が必要になるとは思わなかった…

「それに私が身元保証人になれば、東も手は出しにくいだろうしな」

「重ねて、ご配慮感謝します。関西呪術協会麻帆良駐在文官、龍宮一馬殿」

「駐在文官と言ってもただの伝言屋みたいなもんだがね」

「それでもですよ」

実は、光輝の両親である龍宮一馬さんと早苗さん夫妻は関西呪術協会所属の人間なのだ。麻帆良学園都市建設当初から龍宮家は交流兼連絡役として派遣されここに龍宮神社を築き、代々役目を果たしているそうだ。当たり前だが、ここに派遣されてくる上で人選はしっかりとされている。仮にも敵陣の中に自陣を築くのだから、喧嘩っ早い人間では目の当てられない。

そんな立場にある一馬さんが身元保証人となった明日菜と真名に対して、関東魔法協会が何らかしらの不当なアクションを取れば、直ぐに東西の外交問題になる。まあ、それでも突っかかってくる馬鹿は残念ながらいるだろうから、その時は丁寧にＯＨＡＮＡＳＩするだけだ。

「まあ、身元保証人になるだけで、君に関西に加われ等とは言わないから安心してくれていい」

「何から何までご配慮ありがとうございます」

「それで…君はこれからどうするつもり何だい？」

「そうですね、ノンビリと表の仕事をしつつ少しばかり裏をかき回そうかと…」

「ほお。裏を、ね…」

「俺もあの大戦を潜り抜けて、少しばかり思う所が出来ましたので…裏でコソコソ動き回ったヤツ等とかね」

「ふむ…ネズミか」

「ええ、肥え太ったドブネズミです」

事の委細を今はまだ話すつもりは無いが、少なくとも原作に悪い影響は与えないだろう。いや、与えると言えば与えるのだろうか？結果次第では大きく変化するだろうし…

「まあ、今は聞かないでおこう」

「そう言って貰えるとありがたいです」

流石は関西呪術協会の東の拠点である『龍宮神社』の責任者だけはある。俺の話し方から、早急に西に対して害意になるとは判断しなかったのだろう。光輝が言うには東側で起きた事象を本山に報告するかどうかは、一馬さんに一任されているらしい。必要とあれば、東側にいる関西の人間を自由に動かせるとも…やれやれ恐ろしい人だ。折角だから、出来るだけ仲良くしておこう。

「さて、ここからは別の話になるんだがいいかね？」

「ええ、構いませんが…平気ですか？」

「ん？　…ああ、構わないよ」

俺が確認を取ったのは、先ほどから静かに俺の横で話を聞いている妹達の事だった。聞かせない方がいい場合は、部屋の外で待機して貰おうと思い確認したが、問題ない様だ。

「実は、来月の頭に光輝を本山に行かせる事になってね」

「本山…京都の関西呪術協会本山ってことですか？」

「ああ。将来、光輝が私の後を継ぐ上で、その事前報告をしておかないとならなくてね」

「なるほど。それで話とは？」

「君に光輝と一緒に本山に行って貰いたいのだよ。無論、先ほども言ったが、西に与しろと言う心算は毛頭ない」

「西にですか…」

西…関西呪術協会。この日本を古くから護り続けてきた陰陽道などの東洋魔術を中心とした土着の組織。明治以降の関東魔法協会の台頭で勢力は弱まりつつあるが、未だに天皇家や政府とも太い繋がりを持つ。そこに光輝と共に俺が行くか…

「君を利用する様で申し訳ないのだが、光輝は数年前まで西洋魔術師としてＮＧＯで活動していただろ？」

「数年前まで西洋魔術師だった光輝が貴方の後を継ぐ…なるほど、俺が行く理由が想像つきました」

「察してもらえただろうか。こんな事を君に頼むのは無礼だと重々承知の上で頼みたいのだ…」

そう言って、俺に対して本日3度目となる深々と頭を下げる一馬さん。彼だって恐らくは苦汁の決断だろう、心中は察してあまる。結果として、息子の命の恩人である俺の立ち位置を政治的に利用する訳だしな。だが、その程度ならお安い御用だ。光輝は大事な友人、いや親友だしな一肌脱ぐくらいなら喜んでやるさ。

「頭を上げてください。他ならぬ光輝の為です、喜んでお手伝いします」

「四季君。真に忝い…」

「…四季。父に重ねて礼を言う」

「四季さん、私からもお礼を言わせて下さい。本当にありがとう」

快諾した俺に対して改めて3人が頭を下げてくる。何だかこれでは暫く居候になる俺の立場がないんだがな？　まあ、人助けって事で…

「ねぇ、四季兄」

「ん？　どうした？」

「四季兄さん、私達にも分かる様に説明して貰えないだろうか？」

「あ～、スマン。置いてけぼりになってたか？」

「「うん！」」

流石は姉妹と息ピッタリで即答してくれる彼女達に改めて向き直って今の話の内容を説明する。

「光輝は、『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』に所属していただろ？」

「うん」

「そして、そこを抜けてこの『龍宮神社』に帰ってきた。ここがどういった場所かは分かるか？」

「東に置ける西の拠点でしょ？」

「明日菜の言う通りだ。じゃあ、元々は東（西洋魔法使い）側だっ

た人間が西（関西呪術協会）側の拠点の跡継ぎになると言い出したら？」

「西は、東のスパイじゃないかと疑うだろうね」

「真名の言う通りだ。まず間違いなく疑われるだろうな。幾ら光輝が西洋だけでなく元々は東洋魔術に精通していても、疑いの目は避けられない」

元々、光輝は『龍宮神社』の宮司である一馬さんの1人息子として陰陽道を始めとした東洋魔術を学んでいた。だが、もっと多くの人を助ける手段の1つとして西洋魔術も学び、そして世界へと出向いた。

「結果として東西の魔術に精通した人間として歓迎する者達（穏健派）と、東側のスパイではないかと疑う者達（過激派）に分かれるだろな」

「そこで四季兄の出番って訳？」

「ああ。俺は関東…正確にはその上部組織であるＭＭ元老院とは敵対関係と言っても過言じゃない。その一方で関西の長かつ穏健派トップでもある元『紅き翼』の青山、いや今は近衛だったか。近衛詠春とも、どちらかと言えば相容れない関係だ」

関東でも関西でも無い俺が友人として協力者として立っていると言う事、それがここの後継ぎとして関西所属でありながら片方に染まらない中立の立場を求められる光輝にとってプラスになる。まあ、どうあっても文句は付けられるだろうがな。疑いなんてのは掛けようと思えば、幾らでも掛けられる訳だし…

「何だか、結果的に四季兄さんに余計な火の粉が降ってきそうだね？」

「まあ、多少はな？　元々、ここにいる限り同じだよ」

「むう。四季兄がいいって言うならいいけどさ…」

「納得はしたくないな。少なくとも四季兄さんの立場はまた厳しくなる」

「明日菜と真名の心配はありがたいが、親友の手助け位はしたいんだ」

「「お人好し！」」

「あはは、否定は出来ないな」

俺の事を真剣に案じてくれる妹達を横目に見つつ、改めて光輝、一馬さん、早苗さんに向き直る。

「妹達は何だかんだ言ってますが、俺としては光輝の助けになりたい」

「重ね重ね、ありがとう。四季君」

「四季、迷惑を掛ける」

「四季さん、この子をお願いします」

「こちらこそ」

こうして、光輝と共に京都にある関西呪術協会本山へと出向く事になった。

１９９４年夏の終わり、歴史は少しずつだが変化を見せ始めた。まだ小さな変化の芽だが、これが花咲かせる頃、世界はどうなっているだろうか？　西洋でも東洋でも、関東でも関西でもない東西南北四季。彼と２人の妹達との絆が世界に変化をもたらす。それはもう少し先のお話。

第１５話：西へ（後書き）

そんなこんなで西へと行く事になったオリ主。さて、何が待ち受けるのか？

第１６話：関西呪術協会（前書き）

ドンドンいくよー！って感じ

第１６話：関西呪術協会

１９９４年９月上旬。俺達は光輝と共に京都へと向かった。明日菜と真名は何だかんだで旅行気分の様だが、まあいいだろう。小学校に入るのは来年の４月からだし、それまでは子供らしく存分に遊ばせてやりたい。

「流石に京都はまだ暑いな…」

「夏は暑く、冬は寒いってのが盆地である京都だからな」

９月とは言っても残暑厳しく、新幹線から降り立った俺達を出迎えたのは燦々と降り注ぐ太陽の光だった。薄着にしておいて正解だったな。まあ、中東とかアフリカとかの赤道直下の国々にも滞在していたから、どうとでもなる暑さではあるが…明日菜と真名も暑さよりお土産店に関心がいっている様だし。

「ここからどうやって行くんだ？」

「ああ、迎えの人が来てくれるらしいんだが…」

「失礼ですが、龍宮光輝さんですか？」

「えっ？　そうですが…貴女は？」

「申し送れました。本山より迎えとして参りました、葛葉と申します」

迎えが来るという話が出た丁度のタイミングで現れた彼女。２０代

前半って所かって、葛葉？　葛葉ってもしかして、原作で出てきた彼女の事か？　まあ、結婚を機に関東に来たらしいからいても不思議じゃないか。さて、これで足は確保出来たと見ていいだろう。

お互いに軽い挨拶を交わしてから、用意された車に乗り込んだ。京都駅から本山まで車で1時間程度だそうだ。車中で葛葉さんと軽く言葉を交わしてみたが、やはり後々の葛葉刀子先生本人の様だった。何だかんだで原作キャラと遭遇しているなと思いつつ、年齢近そうだから光輝と葛葉さんがくっ付いたら面白いなんて勝手に思ってた。それがゲフンゲフン…

京都の中心街を抜け、色づき始めた山道をしばらく進んだ所で車は止まった。車から降り、葛葉さんの先導で風情ある石畳の道を歩いていく。都会の喧騒から離れた静かな路。明日菜と真名も興味深そうに辺りを見渡しつつトテトテと俺の後を付いて来ている。路の突き当たり、一際立派な門を潜るとそこはもう関西呪術協会の本山だった。

「長のいる本殿は奥になります」

原作の時の様な派手な出迎えは当然ながら無く、淡々と関西呪術協会の総本山へと到着した俺達。葛葉さんの案内で更に奥の本殿と呼ばれる建物へと向かう。時折、擦れ違う巫女などが興味深そうに此方を見ているが、外からの客が珍しいって事だろう。どうしても、山奥のこんな閉鎖的な場所では来訪者など限られるだろうからな。

そして、到着したのがかなりの広さの大広間だった。床板は丁寧に磨き上げられ、塵一つない。四方の障子に沿って琴や笛、堤を持った巫女達。正面にはなりやら上階と繋がっていると思しき階段。その左右には弓を携えた者達。そこまではいいが、広間の中央付近に何やら威厳ありそうな連中が左右に別れて座っている。大方、関西の幹部連中だろうなとあたりをつけておく。

俺達は葛葉さんに言われた通り、正面に対して中央に置かれた丸い座布団の上に座して長を待つ。さてさて、この頃の長ってのはどんな感じなのかね…

「まもなく長が参ります」

誰からともなく声が聞こえ、少しして正面の階段から木の撓る音と共に装束に身を包んだ男が降りてきた。間違いなく、元『紅き翼』のサムライマスター『青山詠春』だ。かつて見た頃の研ぎ澄まされた気質の様なものがかなり薄れ、慣れない政に心身追われている様子が窺える。武芸に秀でていても、必ずしも政にも秀でているとは限らないからな。

「お初にお目に掛かります。東の『龍宮神社』は宮司、龍宮一馬の子、龍宮光輝です。この度は、お忙しい中、謁見賜り感謝致します」

「こちらこそ。関西呪術協会の長、近衛詠春です。龍宮君、そう肩肘張らなくて結構ですよ？」

「ご配慮ありがとうございます」

「いえいえ。そして君は…！？」

目を見開いて驚きを示す、近衛詠春。どうやら、俺を思い出した様だ。まあ、あれから10年以上が経過しているからな。僅かにしかあっていない俺の事を思い出すのに時間が掛かるのも当然だろう。それに容姿が変わっていないってのもあるが…

「久しぶりと言うべきか？　元『紅き翼』のサムライマスター（バトルジャンキー）。近衛詠春？」

「き、貴様！　客分の分際「待ちなさい」し、しかし…！？」

俺の言い方が気に入らなかったのか、幹部の1人が突っかかってくるが直ぐに詠春に止められる。英雄とは呼ばれているが、実際は武者修行に行っていてあの戦争にナギ達と共に加わったというべきだろう。

「東西南北…四季君でしたか？」

「トサナキ…まさか、あの『薄汚れた英雄』！？」

「こんな若造が？」

「使えた王を殺した裏切り者か」

何やら好き勝手言われているが放っておいていいだろう。その程度の言葉はもう聞き飽きた。そんなのボキャブラリーの無さを自分から露呈している様なものだろ。ただ、明日菜と真名が見る見る不機嫌になっていくのが手に取る様に分かる。俺の事になると2人の沸点が急激に下がるからな…頼むから2人とも何もしないでくれ。

「別に何て呼ばれようと構わないんだがな。そもそも、今日は光輝

の挨拶がメインだろ？」

「…そうでしたね。龍宮君、既に話は聞いています。次代としての覚悟はおありですか？」

「はい！」

「西洋魔術師として活動してきた君に取って、決して楽な道ばかりではありませんよ？」

「それも覚悟の上です」

「「……」」

「ふふ。君の覚悟はしかと受け取りました。いいでしょう、関西呪術協会の長として、龍宮光輝君を現麻帆良駐在文官である龍宮一馬氏の後継者として承認しましょう。正式に継ぐ際にまた此方にいらして下さいね」

「ありがとうございます！」

ふむ、どうやらこれで一先ずは後継者問題はひと段落と見ていい様だ。後は、意味深にこちらを見ている詠春が何を言い出すかだが…

「龍宮君、一緒の皆さんも今日は此処に泊まってゆっくりとしていって下さい。酒の席も設けますので色々と話を聞かせて下さい」

「では、お言葉に甘えて」

「部屋を用意させますので、少しここで待っていて下さい」

話は後と言う事だろうか？　そう言って、詠春は近くにいた巫女に二言三言、指示を与えると上の階へと引っ込んで行った。さて、どうしたものか…

「スマン、四季。付いて来て貰ったのに、不快な思いをさせてしまって」

「光輝が謝る事じゃないさ。それに言われなれているからな…」

「むう…」

「……」

「明日菜ちゃん達はご機嫌斜めみたいだな」

「ははっ、何時もの事だ」

俺の代わりに怒ってくれる2人の妹達の頭を少し乱暴に撫でながら、俺は思う。苦労もあるがこんな人生も悪くないと…

第１６話：関西呪術協会（後書き）

原作まで後少しと言いつつ、まだ見えない最近ｗ　原作まで描いておきたい所がまだまだ…もう少しお付き合い下さい。

第１７話：身勝手な偽善（前書き）

相変わらず、ウジウジ、グダグダ悩む主人公です。温かい目で見てあげて下さい。

第17話：身勝手な偽善

しばらくして部屋の用意が出来たと先ほどの巫女に声を掛けられた俺達は、本殿を後にし別棟にある客用の一室へと案内された。流石は総本山だけあって敷地も広いが、何より建物内や庭園の手入れがしっかりと行き届いている。まあ、そう言った部分はある意味で権威の象徴でもある訳だから、手を抜かずに費用を掛けざるを得ないってのもあるだろうけどな。

来客用と思しき部屋は二間続きの部屋になっており、雪見障子からは色づき始めた庭の様子が楽しめる様になっていた。座卓を囲み座った俺達に手際よく案内役の巫女が茶を入れて出してくれる。礼を言って一口啜ると、ようやく人心地付いた気分になった。

「ふう、生き返る。我ながら、少し緊張したか…」

「むしろ、俺は四季のあの言葉に肝が冷えたぞ…」

「何、軽い社交辞令だ」

「嘘付け！」

「っち…」

光輝と軽い応酬をしつつ、ふと気になった事を巫女に尋ねる。

「庭とかは自由に見ても平気かな？」

「はい。他の建物内などに許可無く立ち入られなければ、ご自由に

散策なさって頂いて結構です。宴の場所やお風呂などは後ほどご案内致しますので」

「ありがとう」

「それでは、失礼致します」

テキパキとお茶を入れて、簡単な案内をしてくれた巫女は静かに部屋を去って行った。後継者になると言う報告を終えて一息付いた光輝は、畳の上で仰向けに寝転がっている。明日菜と真名はお茶菓子に夢中な様子。さて、俺は…

？のんびりお茶を楽しむ
？畳に寝転がる
→？庭を散策する

やはり、これだけの立派な庭があるのだから少し位は散策しておきたい。夏から秋へと色づき始めた木々の中をのんびりと歩くのもまた乙なものだ。

「少し外を見てくるわ」

「おー」

「「いってらっしゃーい！」」

お疲れな光輝と、和菓子にゾッコンな妹達を残して部屋の外へと足を踏み入れた。

しばらくは気の向くままに足を進めていた俺だったが、どこかで落ち着いて景色を楽しもうかと近くの石に腰掛けた。静寂さが支配する空間。目の前一面に広がる景色の移り変わりの様相を独り占め出来る贅沢さに、しばし身を預ける。鳥の囀りに耳を傾け、木々の合間をぬう風の息吹を肌で感じる。

「……」

まさか、関西呪術協会の総本山でこんな穏やかな時間が過ごせるとは誰が想像しただろうか？　まあ、表立って敵対している訳ではないので、過剰に警戒する必要は無い訳だが…

「明日はノンビリと観こ『ガサガサ…』ん？」

観光でもしようと言おうとした時、近くの茂みから何やら物音がした。はて、タヌキかキツネでもいるのだろうか？　ここ結構な山奥だしな…

って、思ったら鮮やかな和服を着た明日菜達と見た目は同じ位の少女がいた。その手には朱色の手毬が大切そうに抱き締められていた。身なりはかなり良いようだし、西の幹部連中の娘辺りか？

「……」

「…お兄さん、誰なん？」

「ん？　ああ、俺は四季。四つの季節と書いて四季だ」

「四季はん…。うちは、このかや」

「…このか？」

はて、どこかでそんな名前を聞いた気がするな。まあ、直ぐに思い出せないなら大して重要じゃないって事だな。

「四季はんは、何をしてるん？」

「景色を見ていたんだ」

「景色…、楽しいん？」

「楽しいというより、落ち着くって方が正しいかな？」

「ふーん、そか」

警戒心が薄いのか、或いは何かを見抜けるのかは知らないが、初対面の俺の直ぐ傍まで来て同じ景色に目をやるこのか嬢。それにしても、この広い場所に1人きりなのか？　友達位いるだろうに…

「このかちゃん、1人なのかい？」

「えっ…、うん。ちょっと前までは、『せっちゃん』って言う仲よう遊んでた子がおったんやけど…」

せっちゃん…？　『このか』と『せっちゃん』。はて…これまたどこかで…

「その子と、喧嘩でもした？」

「違うんよ。ウチが川で溺れそうになった時な…」

そうして、このかの口から紡がれる友達の『せっちゃん』との物語。川に落ちた自分を助けられなかった事で己を責めるせっちゃん。もっと強くなると泣きながら口にした彼女は、剣の稽古により一層打ち込み、結果として自分と遊ぶ機会は急激に減った。それだけでなく、段々と自分から距離を置かれている様に感じる様になった。また前の様に話したい、遊びたい…そんな思いをこのかは淡々と紡いだ。

って、これどう考えても近衛木乃香と、桜咲刹那の昔の話じゃねえか！？　いやいや、どんな偶然だよ！　普通は、俺みたいな人間が本山に来る時は彼女をどこか安全な場所に行かせるだろう。仮に本山に留めるにしても、1人で出歩かせたりはしまい。何だか、調子狂うな…まあ、俺が気にする事でもないか。今は、彼女の悩みの解決を手伝うとしよう。

「そうか…」

「ウチ、何か悪いコトしたんかなあ…」

そう言って、塞ぎこむ彼女。まあ、原作通りなら修学旅行で2人の関係は元の鞘に戻る訳だから、ここでどうこうする必要がないと言えば無いんだが…

「悲しそうな顔をしている子を放ってはおけないか…」

「…四季さん？　どうしたん？」

「いや、勝手な偽善を始めようかと思ってね」

「？」

そう、これは俺の勝手な偽善だ。原作を知っているが故の傲慢で自分勝手な改悪。一方的な押し付けにして、人権侵害。だが、それがどうした？　俺は東西南北　四季。俺はありとあらゆるモノを爆破する。なら、原作も対象ではないか…

「木乃香ちゃん。君はその友達の事をもっと知りたいかい？」

「えっ？　四季はんは、何か知ってるん！？」

「彼女の事を知るキッカケを作れるだけだ。でも、君はそれを彼女に聞いたらもう戻れない」

「戻れないって、どこになん？」

酷く非情な誘い文句だとは自覚している。こう言って彼女を危険な方向へと誘導している訳だしな。この歳の子供にそんな危険性など分かる訳もないのに…

「今の生活さ。穏やかな日々と言った方がいいかな？　知ってしまえば、変わらざるを得ない。変化からは決して逃れられない」

「……」

「苦しい事も、悲しい事も、辛いことも、沢山ある」

「……」

「卑怯な言い方だとは思うが、選ぶかは君次第だ」

「……」

自分の白々しいセリフに反吐が出そうだ。選ぶのは君次第…これだけを聞くと如何にも相手の事を思って言っているかのように聞こえが言い様に思えるが、実際には相手に全部を丸投げしているに過ぎない。自分の責任を軽くしようという酷く醜い逃げ道作り。

「それでも…せっちゃんとまた仲ようなれる？」

縋る様な表情の木乃香。こんな幼い少女を俺は裏へと引き込む算段を付けている。確かに彼女の立場からして遅かれ早かれ裏に関わらざるを得ない。本当なら放っておいても自然に解決する問題だが、俺はあえて汚れ役をやろうとしている。笑える話だが、どうも明日菜と出会ってから変わってしまったようだ。真名もそうだが、何らかしらのしがらみやら運命とやらに縛られている子達に手を差し伸べたくなる。それは俺の勝手な我が儘なんだろうけどな…

「ああ、約束する。また笑顔で笑いあえるようになる」

「……四季はん」

「……」

「せっちゃんの事、ウチは知りたい！」

「どんな事だとしても、それを知って彼女を絶対に嫌いにならない

？」

「勿論や！　ウチはせっちゃんを嫌いになんてならん！」

「その覚悟確かに。なら、彼女の口を割る方法を教えよう…」

そうして俺は近衛木乃香に、桜咲刹那の口を割らせる方法を教えた。

そんなんでいいん？　って何度も聞かれたが、これが一番効果的な方法だ。彼女の性格からして、確実に落とせるだろう。桜咲刹那には悪いが、勝手にお節介をさせて貰った。大切なお嬢様を此方側へと引き入れた事を恨んでくれても構わない。これは俺の勝手な偽善だから…

第17話：身勝手な偽善（後書き）

重要な事を忘れてました。ヒロインは明日菜と真名の2人のみです。
それ以外のキャラともそれなりには仲良くはなりますが、ヒロインにはなりません。

第１８話：運命の巡り合わせ（前書き）

こんな展開もアリかなって思う。ザ・捏造！

第１８話：運命の巡り合わせ

関西呪術協会の総本山で一泊した俺達は、翌日は京都観光へと繰り出した。協会からの案内役（言い換えれば監視役）である葛葉さんに、京都市内の名所を歴史的背景も説明されながらゆっくりと回る。時期が時期だけに多くの観光客で結構な混雑になっているが、それもまた一興だろう。何だか、いい雰囲気を醸し出し始めた光輝と葛葉さんはおいていくか。さて、次はどこに…

えっ？　昨日の宴はどうなったって？　近衛詠春と何か無かったのかって？　ん～、ちょっと驚く事はあったが、大した内容じゃないんだ…でも気になると言うなら仕方が無い、少しだけ振り返ろう。

あの後、木乃香ちゃんにアドバイスをして別れた俺は先ほどの部屋へと戻った。妹達に遅いと怒られたが、適当に言い訳してその場を凌いだ。そうして、宴の時間となった。再び先ほどの案内役の巫女がやってきて俺達を別棟にある宴会場へと導いた。部屋には既に主要な宴のメンバーは揃っていて、俺達以外は近衛詠春が来れば開始といった状況だった。

「おお、来たか。龍宮ん所の小僧！」

「遅いでわないか！　ほれ、さっさと席に着かんか」

「失礼します」

元々、西側だった光輝からするとここにいる幹部連中もある程度は顔見知りの様だ。まあ、結果として１度は東側になってしまった以上、以前の様な関係を修復するのには多少の時間が掛かるだろうが

光輝ならしっかりやるだろう。

「明日菜と真名は間違っても酒は飲むなよ？」

「分かってるわよ、それ位！」

「全く、兄さんはもう少し私達を信じてくれてもいいんじゃないかい？」

「妹達を心配したら、逆に怒られたよ俺…」

兄心ってヤツだと思うんだが、この2人には通用しない様です。まあ、そんな軽口の応酬が出来るのも兄妹だからこそ何だがな？

「後は、近「お待たせしました！」来たか…」

最後の面子である近衛詠春が到着した事で、いよいよ宴が始まる。

「遅くなってすみませんでした。では、我らの新しい友人に乾杯しましょうか？」

「長。我らはとっくに準備出来てますぞ！」

「うむ。はよう酒を飲まんと死んでしまうわ」

「はは、では…我らの新たなる友人に…」

『乾杯！！』

そうして始まった、賑やかな宴。彩り鮮やかな料理の数々に舌鼓を

打ちつつ、俺は静かに酒を口にしていた。これはあくまで光輝の歓迎の宴だ。俺はあくまでそのオマケでお相伴に預かっているに過ぎない。ちなみに、明日菜達は幹部の家族などの女性陣に可愛がられている様で楽しそうにしている。そんな風に端のほうでチビチビとやっていた俺に声を掛けて来た男がいた。

「君が東西南北　四季君だね？」

「そうですが、貴方は？」

「これは失礼した。私は天ヶ崎　秋昌（あきまさ）と言う。一応、これでも幹部の1人だよ」

「天ヶ崎…」

天ヶ崎ね…思いっきり天ヶ崎　千草の関係者っぽいな。年齢的に考えると原作では死んだはずの父親か？　だとしたら、また俺が関係するイレギュラーって事か？

「どうかしたかね？」

「いえ、特に。それで俺に何か？」

「あの大戦で君に結果的に夫婦揃って命を救われたものでね、礼をずっと言いたかったんだ」

そう言って、深々と俺に頭を下げる秋昌さん。だが、頭を下げられた方の俺は混迷を深めるだけだった。悪いが、助けた覚えがないんだが…？

「えっと、人違いでは？」

「ふふ、多分覚えていないと思うよ？　何たって、私達は君に呆気無く柱に叩きつけられて気を失ったんだからね？」

「柱？　叩きつけられた？」

「そうだよ。『夜の迷宮』は覚えていないかな？」

「えっ？　それは覚えて…ん？」

どうしてここに『夜の迷宮』が出てくる？　確かにあれは連合側の…いや、待てよ。天ヶ崎さんも半ば強引に連合によって戦力として連れて行かれた西側の術者の１人だよな。だとしたら…

「私達夫婦は、『夜の迷宮』の警備に回されたんだ。私達を含め西の人間は強引に引っ張られて不満が溜まっていたからね。命令に逆らう可能性のある人間を帝国との重要な前線には送れなかったんだろう。それが結果的に命を失わずに済んだから感謝すべきかもしれないが」

「あー」

「思い出したかな？」

「もしかして、途中で纏めて吹き飛ばした魔法使い集団の中の２人って事ですかね？」

「そう言う事さ」

「なるほど」

ようやく理解が追いついた。まさか、天ヶ崎　千草の両親を『夜の迷宮』で柱に叩きつけていたとは、偶然って怖ぇぇ…

「私達は運が良かった。戦った相手が君で…」

「戦った相手？」

「ああ、後で聞かされた話なんだが、長が所属していた『紅き翼』と戦闘した者達は誰も助からなかったそうだ…」

「……」

おいおい、ちょっと待て。それじゃ、何か？　俺より先に『紅き翼』が『夜の迷宮』に突っ込んでたら、天ヶ崎夫妻は原作通りに死んでたって事か？　死んだ原因が『紅き翼』？　それは幾らなんでも笑えないな…まあ、命を掛けた戦いだから死んだとしても、その原因たる『紅き翼』を恨むってのはお門違いではあるが…

「ほんの些細な違いが、生死を分ける境界になったのさ」

「逆を言えば、俺が貴方達を殺していたかもしれないって事ですね」

「勿論、その可能性も０では無かっただろうね」

「……」

「あ、これだけは言っておくよ。私達夫妻は君を恨んじゃいない。確かに情けない位に一方的に打ち負かされたが、結果として娘と生

きて再会できたんだからね。ありがとう」

「あくまで偶然ですよ」

「そうだとしても、君とあそこで巡り合えた偶然に感謝しているんだ」

そう、穏やかに話す彼の穏やかな顔が眩しかった。かつて戦場で敵味方に別れた者同士がこうして杯を飲み交わす。もし、まだあの時に『不殺』へと戦い方が変わっていなかったら、目の前の彼とこうして過ごす事はなかった訳か…それは偶然なのか必然なのか。ほんの少しの変化が俺に新たな出会いをもたらしたのだった。

「君と出会えた偶然に乾杯」

「天ヶ崎さん…」

半ば強引に俺の杯に自分の杯をぶつけ乾杯する天ヶ崎さん。今日の酒は普段以上に良く回りそうだ…

第１８話：運命の巡り合わせ（後書き）

偶然が思わぬ出会いを生む回。さて『夜の迷宮』に旧世界の人間が回されるのかって疑問が湧くかもしれませんが、誰が幽閉されているかなど分からなければ、問題なかったんじゃないかなと作者の勝手な想像ですが。必要なのは戦力だろうし…まあ、あくまで全て本作品のオリジナル展開ですので、ご容赦の程を。

第１９話：春～そして入学式（前書き）

さて、いよいよ明日菜達が麻帆良へ入学。

第１９話：春～そして入学式

京都市内の観光を満喫した俺達は、その日の夜遅くの新幹線で帰京する運びとなった。遊び疲れて仲良く夢の中に旅立った妹達を眺めながら、俺は隣の席の光輝と認識阻害結界の中で言葉を交わしていた。

「そんな事があったのか…」

「ああ、偶然とは言え人助けになってたらしい」

「『不殺』か…」

「何が出会いのキッカケになるか分からないな…って、そうだ光輝」

「ん？」

「葛葉さんとはどうなったんだ？　最低でも個人的な連絡先くらいは交換したんだろうな？」

『ブッ！？』

「ちょっ、汚ねえだろ！？」

飲んでいたお茶を噴出す光輝と、それを明日菜達に掛からないように消し飛ばす俺。まさに能力の無駄使いだな…全く。

「ゲホッゲホッ…。あ、あのな…」

「俺ら置いてけぼりに2人で良い雰囲気作ってたくせに…」

「いえ、あれは…」

今日の市内観光で、途中から光輝と葛葉さんは2人だけの世界に入っていた。まるで何十年も連れ添ってきた熟年夫婦の様だとは誰のボヤキだっただろうか？　その結果、俺達が空気と化していたのは言うまでもない。まあ、明日菜達は興味津々に見ていたみたいだが…

「まあ、光輝にも春が来たって事だな。早速、親父さんに『孫の顔が見れるのも近いですよ』って報告するか」

「するな！！」

「満更でもないくせに」

「俺と刀子さん別に…！」

「ほほう…、下の名前で呼ぶほど仲良くなったのか」

「そ、それは…」

自分の失言に気が付きアタフタと言い訳する光輝を尻目に俺は、闇に包まれた車窓へと目をやった。たった2日の京都滞在だったが、思いがけない出会いがあった。それが今後の流れにどの様に影響を与えていくかはまだ分からないが、良い影響を与えてくれると思いたい。取り合えず、もう少し光輝と葛葉さんネタで弄るとしよう。そうして、京都からの帰りは過ぎていったのだった。

京都から帰ってきて季節は一気に秋・冬を通り越して春へと移る。その間は特に記載する程の事が起こらなかったとだけ、説明しておこう。さて、春と言えばあれだ…そう明日菜達の小学校への入学式だ。原作で明日菜が転校したのと同じ小学校に、妹達2人は新小学一年生として入学する事になった。2人とも学校と呼ばれる場所へ通うのはこれが初めての経験なので、数日前からソワソワしていた。光輝から聞いた所、近衛木乃香も既に麻帆良に到着しているそうだ。原作とは違うのは、関西から一緒に葛葉　刀子、天ヶ崎　千草の両名が任を負って関東へと移ってきた事だろうか？

「教育係兼お目付け役兼護衛って事か…」

「ああ、木乃香ちゃんが麻帆良に来たのは、東西魔術の違いを学び、視野を広げ、見聞を深め、次期呪術協会の長としての下地を創る為だからな。それでも東に行く事に過激派連中はだいぶ反発したらしいが…」

「なるほど。逆に麻帆良（コチラ）側は渋らなかったのか？」

「一部がかなり渋ったらしいが、近衛学園長が言い包めた様だな」

「まあ、含みがあるだろうけどさ…」

あの学園長が何も裏が無く行動するとは思いにくい。まあ、少なくとも祖父として難しい立場にある孫を思う気持ちは嘘ではないだろうがな。それに、数年後にはネギも来るし…やれやれ火種はどうあっても出来るって事か。

「で、2人はそれぞれ麻帆良で教員としても働く訳か…」

「ああ、将来を見越して麻帆良本校女子中等部でとう、く、葛葉さんが社会科、天ヶ崎さんが国語科って言ってたかな？」

「言い直すなよ」

「煩い！！」

刀子さんと自然に口にしそうになって、慌てて言い直す光輝。今更なにを恥ずかしがっているんだか…。少なくとも葛葉さんは満更でもない様に見えるがね、後は光輝次第か？

「それより、四季。そろそろ時間じゃないのか？」

「ん？　ああ、もうこんな時間か」

「入学式に遅刻したら、明日菜ちゃん達に怒られるぞ？」

「それは怖い怖い。じゃあ、お姫様達が怒り出す前に行くとするわ。茶、ご馳走様」

「おう」

喉を潤したお茶の礼を伝え、俺は入学式が行われる総合体育館へと急いだ。本当なら明日菜達と一緒に行く予定だったのだが、明日菜達は入学式が待ちきれなかったのか朝早くから先に行ってしまったのだ。それにプラスして、俺も光輝から事前に伝えておきたい事があると言われていたので、龍宮神社へと足を運んでいたのだった。

残念ながら俺は認識阻害魔法は使えないので、空を翔けて行く訳には行かず路面電車を乗り継いで目的地を目指す。道中、車窓から新入生と思しき学生達の集団を街のあちこちで目にした。新生活への期待、不安、緊張ｅｔｃ…初々しいな。俺も昔はそんな時代もあったんだよな…

「「四季（さん）兄、遅い！」」

「スマン！」

総合体育館の入り口前で、私達不機嫌ですっていうオーラ全開にして俺を待っていてくれた明日菜と真名。開口一番で当然の様にお小言を頂戴するが、俺が全面的に悪いので謹んでお受けしよう。

「後で、お詫びに伽藍堂でケーキでも買って帰るか？」

「四季兄、直ぐに食べ物で釣るんだから…２つ、ううんケーキ３つね！」

「私としては、ケーキも良いが一刻庵の餡蜜の方がいいかな？　勿論、明日菜と同じ３つで」

「オーライ。それで手を打とうじゃないか、妹達よ！」

食べ物で釣ると言う、セコイ手段で此処を強行突破する事に成功し

た俺は、２人を連れて会場である総合体育館へと向かう。何でも、麻帆良にある複数の小学校の入学式を１度に行うとかで、とんでもない人数の新入生と保護者達が一同に勢ぞろいしている。勿論、小学校の先生達も集合している。それにしても体育館の中はカオスな状態へとなっていた。まあ、新小学１年生がこれだけ集まれば、普通は収拾がつかなくなるわな。繰り返し、席に付いて待つようにアナウンスがされているが、誰も聞いちゃいない。

「場所は分かるか？」

「えっと…あそこみたいね」

「ああ、何故か一番騒がしい場所みたいだな」

「元気があっていいじゃないか。でも、式の最中くらいは静かにしてろよ？」

「「終わったら？」」

「ほどほどにな…」

「「ＯＫ！！」」

それだけ聞くと、自分達のクラスへと一目散に走っていく明日菜と真名。遠目に近衛　木乃香の姿も同じクラスに確認出来たので、あのクラスが未来の２－Ａに進化するのだなと１人納得した。明らかに未来のあのクラスの生徒っぽいのがいるしな…

「明日菜、真名。存分に楽しめよ？」

２人に聞こえないのは分かっているが、そう自然と呟いていた。クラスメート達と一緒に、笑って、泣いて、驚いて、喧嘩して、仲直りして、そんな普通の生活を出来る限り送って欲しい。それは全部、俺の我侭だから…

第１９話：春～そして入学式（後書き）

四季の行動で色々と原作にない展開へと…まだまだありますがｗ

第２０話：そう言えば、学園側書いてなくね？（前書き）

何というか、タイトルｗ

第２０話：そう言えば、学園側書いてなくね？

さて、話が前後してしまったが俺と明日菜、真名は小学校の入学に合わせて龍宮神社から居を移した。場所は、麻帆良本校女子中等部の女子寮からそこそこ近距離にある学生向けの商店が連なる通りから、１本脇に入った所にある三階建ての店舗付住宅。一階が現在は空家の店舗、二階・三階が俺達の住居だ。一階の店舗は現在オープンに向けて改装中だ。何を仕事にするか色々と迷ったのだが、結局の所は時間の融通が利きやすい個人商店を開く事にした。内容は、世界中の伝統工芸品や民芸品を扱う雑貨屋。部屋に飾れる小物や、普段の生活で使えるハンカチやらスカーフなどの日用品がメイン。学生が気軽に買える程度の金額の商品を中心に揃える。世界中を旅している間に自然と出来た人脈がこんな所で役に立つとは…

利益を上げると言う事よりも、世界には様々な文化があると言う事を感じる事が出来る店にしたいと思っている。国が違えば、文化も違う。同じ国の中ですら東西南北で更に異なる。その違いが時に諍いを争いを生む原因となる。だが、違いは決して悪い訳ではない。ようは、違いを在りのまま受け入れられる気持ちがあるかどうかだろう。この店は、違いに触れ、世界に広く関心を持ってもらう為の場所だ。

学生達と同い年くらいの少数民族の少女達が織る伝統的な織物。代々受け継がれて来た技術を次代へと受け継ぐ若い技術者。１つ１つの商品には様々な思いが、時間が込められている。それを少しでも伝える手伝いが出来れば御の字だろう。

「さて…」

オープンの為の準備はゆっくりと進めている。特に急いでいる訳でも無いしな…生活資金やらは、株や先物取引で十分に稼げている。流石は黄金率としか言いようが無い。

「散歩でもしてくるか」

現在、午後2時半。明日菜達が帰ってくるまではまだ時間的に余裕があるので、ブラブラと買い物がてら散歩でもして来るかな。ついでに、おやつでも買ってくるとしよう。今日は何にしようか…

さて所変わって、ここは麻帆良学園都市の最奥、女子校エリアにある女子中等部内に何故かある学園長室内。そこでは3人の男性―いや、妖怪1匹と人間2人というべきか？―が何やら真剣な表情で議論していた。

「ふむ。今の所は特にこれといった動きはないの～」

「ええ、彼がここに来た時は万が一も考えましたからね」

部屋にいる妖怪は『ぬらりひょん』と呼ばれており（一部では、近衛　近右衛門と呼ばれている）、この麻帆良学園都市の理事長をしている。妖怪が理事長などしているのは、世界広しと言えど麻帆良ぐらいだろう。人間の方は、『ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ』と『タカミチ・Ｔ・高畑』の2人。だが2人ともキャラ（渋め、クール、ヘビースモーカーｅｔｃ）が被ってて紛らわしいと多くの人々から非難を浴びているらしい。ちまたではこの2人のカップリン

グした本が一部の層にバカ売れだとか噂されており、本気でそっちの関係が噂されている。

「「「何か嫌な解説された気分じゃ（だ）」」」

さて冗談はその程度にして、彼らが何をしているかに焦点を当てていこう。彼らが議論しているのは、手元の資料に写っているある人物とその関係者についてだった。まあ、ぶっちゃけ我らが東西南北四季についてなんだがね。日本の西洋魔法使いの拠点であるこの麻帆良学園都市に、彼らの上部組織であるＭＭ元老院と対立関係にあると言っても過言ではない（客観的に見ると一方的にＭＭ元老院が絡んでいるだけ）相手が住んでいるのだ。しかも、関係がよろしくない西の関西呪術協会とも彼は中立的立場の龍宮神社を介して、繋がりがあると思われる。放っておけという方が無理な相談だろう。

だが、手を出せるかと言うとこれがまた難しい。相手は、『オスティアの閃光』とも呼ばれた元英雄。物量で圧倒していたはずの帝国の侵攻軍を2度に渡り一方的に叩き潰している。その際の犠牲者数は、数万とも数十万とも言われ帝国が奪ったグレート＝ブリッジを連合の奪還作戦から護りきれなかった遠因とすら言われている。それほどの衝撃を帝国軍兵士達に与えたのだ。そんな人物相手に手を出してこの学園都市が戦場にでもなったら、目も当てられない。確実に学園都市が広大な廃墟へとクラスチェンジしてしまう。それだけは避けたい…

放置も出来ず、排除も出来ず、では抱き込むのはどうか？　と議論されたのだが…これは即座に却下された。当然だ、上層部たるＭＭ元老院と敵対関係（あくまでＭＭ元老院側が一方的に）にある相手が、協力関係など呑む筈が無い。正に八方塞とはこの事だろうか…

「彼1人でも頭が痛いと言うに、更に問題は彼女達じゃな…」

「ええ、髪型が違ったんで最初は気が付きませんでしたが、この子は間違いなく『黄昏の姫御子』アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアです」

「『黄昏の姫御子』とはの…メガロも気が付いておるんじゃろか？」

「探りを入れた限りでは、今の所は可能性は低いかと」

「でも、師匠。何れはバレますよね？」

「ああ、ここにいる連中が何かのキッカケで気が付いて報告する可能性だってある」

「まいったの～」

溜息つくぬらりひょんとか気持ちが悪！！　って思ったそこの貴方。それは極めて正常な感情です、安心して下さい。間違っても病院に行く必要はありません。

「またおかしな電波が…つ、続けましょうか、ぬらりひょん？」

「ふぉ…そうじゃなって、ガトウ君まで、ワシ泣いちゃそう…」

「「ぬらりひょんの涙に需要なんてねえ！！」」

「ふぉ！？　２人して！？　ヒドイ！　ワシ、グレちゃう！！」

「「勝手にどうぞ！」」

その後、暫く部屋の隅でシクシクと涙流しながら、気色悪くのの字を書いているぬらりひょんがいたとかいなかったとか？

「こっちの子も、魔族とのハーフか…」

「彼がＭＭ元老院と衝突する原因になった子らしいですね。龍宮君から聞きました」

「そうか、彼は元々は…」

「ええ、元々は我々西洋魔術師側の『四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）』に所属していました」

「当時の詳細については？」

「一応、ここに報告書が…勿論、ＭＭ元老院には上げてませんが」

タカミチから報告書を受け取ったガトウは、パラパラとその内容に目を通す。そこには、タカミチが龍宮　光輝から聞いた事の顛末が詳細に記載されていた。

「これは…」

「彼女の事件に関しては、僕が彼（東西南北　四季）の立場だったら同じ事をしたと思います」

「むしろ、死者が出なかった事が奇跡か…」

「ええ、彼は少なくとも大戦以降は誰も殺していません」

「圧倒的な力を振るった男が、不殺へと方針転換か…」

「それが何時破られるかは不明です」

「どこぞの馬鹿が火種を引火させない事を祈るしかないか…」

「ですね」

ガトウとタカミチは互いに溜息を零しながらそう願った。どうかどこぞの馬鹿が馬鹿をやりませんようにと…だが、馬鹿をやるのもまた馬鹿なのだ。

東西南北　四季、東西南北　明日菜、東西南北　真名。たった3人の兄妹によって、この麻帆良はかつて無い程、火種を抱える状態になっていた。まあ、実際には近衛　木乃香とかも火種であるのだが…

第２０話：そう言えば、学園側書いてなくね？（後書き）

学園側のちょっとした動きでも。原作とは違い、ガトウが死んでません。まあ、アスナは四季が護っていたしね。ちょっとして、襲撃くらいは受けただろうけど…取り合えず、ぬらりひょん乙！

第２１話：とある日の出来事（前書き）

もう直ぐ、原作…

第２１話：とある日の出来事

そういえば、何時の間にか２０００年問題とか終わってた。２０００年４月…明日菜達も順調に学年が上がり、とうとう小学校の最高学年になった。いよいよ原作までの残り時間も少なくなってきたな。まあ、俺に出来る事なんて大した事無いんだけどさ…他には光輝と刀子さんが想定どおりに結婚して、娘が生まれたりとか…マジでどうでもいい事しか無いな。

「いや、サラッと流すなよ！　結構、重要な事だろ！？」

「光輝。それは惚気か？」

「ち、違う！！」

「そうか…つまらん」

「あのな…」

俺の友人である龍宮光輝・龍宮（旧姓：葛葉）刀子夫妻。１人娘の名前は『美夜子（みやこ）』、現在２歳。マジでどうでもいい情報じゃね？

「四季君は、相変わらずね」

「刀子さんは、母親になって少し丸くなったかな？」

「そうね。私も剣士である前に、この子の母親だもの」

そう言って、穏やかな微笑を湛えながら幼い娘の髪を撫でる刀子さ

ん。ちなみに、俺の事は何時からかは忘れたが『四季君』と呼んでいる。まあ、原作開始まで不老状態な俺は見た目からして、既に刀子さんより年下なので仕方が無い事だが。半不老状態にある事は、親しい知人には詳細を避けて話してある。バレた所で困りはしないので、先に伝えておいた。流石に最初は驚いていたが、何となく違和感は感じていたらしく割りとすんなり受け入れられた。

「そう言う、四季はどうなんだよ？」

「何がだ？」

「誰かいないのか？　良い人がさ？」

「あー、いないな。少なくともまだ推定年齢１８位だぜ？　焦る必要ねえよ」

「まあ、そうだとしてもさ…」

誰かね…。俺も何時かはそんな相手を見つけられるのだろうか？何だか、余り想像が出来ないな。この世界に来る前は、色々と考えたりもしたが何時からかそれ以上に護りたい大切なモノが出来てしまっていた。

「しばらくは、自分の事は後回しだな…」

「四季…」

「なあに、だからと言って枯れる心算はないからな？」

「ふふ、枯れた四季君も面白いかもね？」

「だな？」

「あのな…」

全く、他人事だからって好き勝手言いやがって。でも、その中に彼らなりの優しさが紛れているのも感じて取れるので、悪い気はしない。

「さて、そろそろ行くわ。夕飯の買い物と、ついでに郵便局に寄って頼んでこないとならないしな」

「ん、もうそんな時間か…」

「刀子さん。お茶、ご馳走様でした」

「また何時でも来てね？」

「ええ、光輝をからかいに来ますよ」

「四季！」

「ははっ。じゃあ、また」

名残惜しいが、用事を済ませないとならないのでこれ位でお暇だ。それにしても、俺も何だかんだで『龍宮神社』に入り浸っているな。光輝達に会うってのが主目的なんだが、１週間に１回は言っている気がする。西に肩入れしていると麻帆良側に思われるのも余りよろしくはないが、今更気にする必要もないか。俺は、東でも西でもない。それだけが、真実だ。

「それでは、お願いします」

「お預かりします」

郵便局で小包の郵送を頼み、後は夕食の買い物だけだな。さて、今日は何にするかな…

「ハンバーグなんてどうでしょうか？」

「ハンバーグか…悪くはない」

「子供も大好きなメニューですしね」

「そうだな。…アルビレオ・イマ？」

何時の間にか俺の真横で、胡散臭い笑顔を向けてくる男。元『紅き翼』のメンバーにして、今は図書館島の司書だかをしている男。普通ならフード姿の優男なんて怪しさ満点だが、ここは非日常が闊歩する麻帆良だ。精々がコスプレ程度としか認識していないだろうな。

「出来れば、クウネル・サンダースと呼んでいただけませんか？『オスティアの閃光』東西南北　四季君？」

「それで、図書館島の自宅警備員（クウネル）が何の用だ？」

「これは手厳しいですね」

「少なくとも、お前と仲良く楽しくお話する様な仲じゃないからな？」

「やれやれ、そこまであからさまに警戒しなくても…」

降参とばかりに両手を上げるポーズを俺に見せるクウネル。そんな胡散臭いセリフと一緒にやって意味があるとでも思っているのか？

それとも大戦中の事を忘れたとでも言うつもりか？

「で、本当に何の用だ？」

「アスナ姫の事です」

「……」

「何かをしようと言うのではありません。確認したいだけです」

「何だ？」

「あの時、儀式に使われたのは彼女ですか？」

クウネルが言う、儀式ってのはあの大戦の最後の『墓守り人の宮殿』での事だろう。アスナが使われたかと言われれば、使われたとも使われなかったとも言える。だが、それを何故クウネルが気にする？

「それをお前に教える必要があるのか？」

「いえ、戦後に彼方此方を回っている際に気になる噂を耳にしまし

てね？」

「噂？」

「ええ。かつてウェスペルタティア王国では非人道的な研究が行われていたと。そして、その研究対象が『黄昏「死にたいのか？」…事実なのですね？」

「だとしたら何だ？　偉大なる魔法使い様が何か（余計なお節介）でもする心算か？」

コイツがどこまで辿り着いたかは不明だが、厄介だな。かと言って、ここで一戦交えるのもマズい。クウネルが麻帆良にいることは当然、近衛学園長も知っているだろう。ここでやらかすと確実にコチラの立場が悪くなる。下手すると余計な約束でもさせられて、行動に制限でも掛けられたら厄介この上ない。

「あくまで確認したかっただけです。それに残念ながら私に出来ることは皆無ですしね？」

「そうか。で、用件はそれだけか？」

「ええ、それだけです。そうだ、今度良ければお茶でも如何ですか？」

「…妹達に近づくな。俺が言いたいのはそれだけだ」

「お茶は？」

「…本気か？」

「はい。昨日の敵は今日の友と言いますしね？」

「…考えておく」

『楽しみにしています』と言い残して、人込みへと消えていくクウネル。原作を読んでいても思ったが、喰えない男だ。敵にしても味方にしても厄介なのはああいった類のヤツだな。ひょうひょうとしていて、真意が読みにくい。ただ、一言だけ言うならば、

「…俺の邪魔をするなら潰す」

第２１話：とある日の出来事（後書き）

過去のあの話をちょっと振り返ってみたり…クウネルって以外と描きやすいキャラな気が？

第２２話：来日（上）（前書き）

いよいよネギが登場！　しかし、どうしてこうなった？　作者にも分からないでゴザル…

１１月２０日、加筆修正しました

第２２話：来日（上）

今まで暮らしてきた場所と違って、見るもの全てが新鮮だった。見上げなくてはならない位に高い建物が幾つも聳え立つ街並み。大勢の人達が行き交い、数分置きに列車が正確に到着しては去っていく。

「すごいや」

物珍しさも相まって、しばし時間を忘れて周囲の風景に目をやりそうになるが、残念ながら今日は予定がある。だから今度、自由に使える休みの日になったら色々と見て回ろうと、決心した。

何度か、周囲の人達に尋ねながら列車を乗り継いでいく。日本の鉄道って正確なのは凄いけど、行き先とか複雑過ぎて何だかな。でも、皆迷わず乗り降りしているんだから、凄いと思う。それにしても、何だかこの列車、女の人で一杯な気が？

「僕どこ行くの？」

「ここから先は中学・高校エリアだよ？」

「あっ、えっと、どこかにメ…」

『次は麻帆良学園中央駅、麻帆良学園中央駅…』

「あ、駅着くよ」

「じゃあね、坊や♪」

「やばっ、遅刻しそう！」

「えっ？　えっ？」

突然話し掛けられたと思ったら、今度は行き成りドアが開いて誰もが一斉に駅の外へと駆け出して行く。それにしても、凄い人の数。僕が通っていた学校に比べると規模が桁違いだ。遅刻って言ってたのを聞いたから、始業時間が近いのだろうか？

「取り合えず、メモメモっと…」

急がば回れってのは日本の諺って言うんだっけ？　こういった時こそ、落ち着かないと…

「えっと、学園長先生に挨拶して、お世話になる職員寮の下見をして、それから…」

そこまで確認してから、背負っていたリュックの中から一冊の布で包んだ本を取り出した。茶色い革の表紙と、丈夫な糸で丁寧に作られた分厚い私製本。何度も読み返したので、表紙も中身もかなりボロボロになってしまった。でも、これと出合ったお陰で僕は目指すべき道をしっかりと見据える事が出来たんだ。ようやく麻帆良に来れたんだし、なるべく早くに会ってお礼を言わないと…

丁寧に布で包みなおしてリュックの中へと戻し、僕は改めて今日の予定を見直した。どんな事も、第一印象が大事だとネカネお姉ちゃんに教わった。気を引き締めて行こう。

場所は変わって、学園長室。どうにか貰っていた地図の場所まで辿り着いた僕を待っていたのは、ぬらりひょんと言う日本の妖怪だった。凄いや、日本の学校は妖怪が学園長をしているんだって。アーニャに後で手紙を出そう、きっと驚いてくれるはず。

「なるほど修行のために日本で学校の先生をの…」

「はい。宜しくお願いします！」

「うむ。まずは教育実習とゆうことになるかのう。開始は年明けから3月までじゃ」

「はい！」

「それまでは、準備などあるじゃろうからの…それとネギ君。この修行は大変じゃぞ？」

それまでの飄々とした雰囲気が一転して、ぬらりひょんの表情が見た目は真剣なモノになった。

「ダメだったら故郷に帰らねばならん。次のチャンスは無いが、その覚悟はあるかの？」

「やらせてください！」

「…うむ。わかった！」

最初からそれ以外に選択肢は無いと思うんだけど、一応相手は妖怪

と言ってもこれから僕の上司になる人だ。やる気を見せておいて損はないだろう。勿論、先生は真面目にやるよ？

「では、君の修行の助けになる先生達を紹介しよう。入ってきたまえ」

ぬらりひょんの一言で、扉の前に待機していたらしき3人の男女が僕の前に現れた。少なくとも2人は知っている。父さんが所属していたパーティ『紅き翼』のメンバーだ。加糖・小倉・ヴァンホーテンさん。その加糖さんの自称弟子の鷹旗・T・高塩。最後の1人は眼鏡美人さん。

「初めまして、ネギ君。加糖・小倉・ヴァンホーテンではなくて、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。２－Ａの担任をしている」

「久しぶりだね、ネギ君。僕も鷹旗・T・高塩じゃなくて、高畑・T・タカミチだから。それと、２－Ａの副担任をしているよ」

「初めまして、ネギ君。源しずなよ？　前の2人はどうでもいいとして、学え…ごほん。ぬらりひょん先生、この子食べちゃってもいいですか！！」

「わざわざ言い直した！？　しかも、食べちゃうって早くもネギ君の純潔のピンチじゃと！？」

加藤さんと、高塩は名前の訂正に必死。源先生は何だか目が危険…獲物を見つけた狼みたい。学え…ぬらりひょんはとりあえずキモい。取り合えず、この3人が僕の修行を助けてくれるって事なのかな？

でも、できれば別の人に頼みたいな…

「ゴクリっ…」

「あ、あの…」

「「待つんだ！　しずな先生！！　彼はまだ子供だ！　ここはダンディーな大人の男である僕達を！！」」

「ごめんなさいね？　ガチホモには用はないの♪」

「「ｏｒｚ」」

「さあ、ネギ君、邪魔者は消え…。ちっ、まだぬらりひょんがいたか…」

「ふぉっ！？」

何だかダークサイドっぽいオーラを出しながらゆっくりとぬらりひょんの方へと歩を進める源先生。

「えっと、「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？」ぬらりひょん、ここに永眠すると…」

「ふふふ。これで邪魔者はいなくなったわ…さあ、ネギ君？　楽しみましょう？」

「あはは…悪い夢だ」

って言う、展開にはならなかった。ジャパンアニメーションだったら、起こりそうだったんだけど流石に無いか…

「では、指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君」

「はい」

呼ばれて入ってきたのは、眼鏡を掛けた優しそうな女性だった。ただ、僕が見えていなかったのか、前方の特に下方が見えにくいのかは分からないが、いきなり視界が真っ暗になった。わき見運転良くない！

「わふ…「あら、ごめんさない」」

「わからない事は彼女に聞くといい」

「よろしくね？」

「こちらこそ」

僕としずな先生とぬらりひょん。この場でぬらりひょんがＫＹなのは誰が見ても明らか。だけど、もっと空気を読まない連中が入ってきた。

「それから、君が担当する事になる２－Ａの担任をしておるガトウ先生と、副担任の高畑先生じゃ」

「初めまして、ネギ君。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。２－Ａの担任をしている」

「久しぶりだね、ネギ君。今は２－Ａの副担任をしているから」

夢オチで出番が終了したはずの加糖と高塩が揃って再登場してきた。

いらないのに…

「もう自己紹介は済みましたから画面から消えてもいいですよ？

どうせお２人はモブですし…」

「「ｏｒｚ」」

「ヒドイ扱いじゃの…そうそう、もう１つ言っておく事があったんじゃ」

「何でしょうか？」

「住む所なんじゃが、教職員用の寮に空きがなくての…」

「空いてないんですか？」

「正確には２人用の部屋ならあるんじゃが、同居人の先生方がの…」

「どんな先生達なんですか？」

２人用の部屋があるならそれで問題無いと思うんだけど、ぬらりひょんの口ごもり方からすると、同居人の先生達に何か理由ありそうだ。怖い人とか？　無口な人とか？　もしくは魔法を知らない一般の先生？

「４部屋あっての、『少年兵連れた武器商人』、『ホッケーマスク

の殺人鬼』、『悪魔で執事』、『遊撃隊（ヴィソトニキ）のボス』じゃ」

「……」

「……」

「ぬらりひょん。一緒に病院行きましょう？」

「ｏｒｚ」

取り合えず、分かったのは僕の部屋がまだ無いと言う事とぬらりひょんが気持ち悪いって事。実習開始はまだ先だから暫くはホテルとかでも良いけど、それでも出来るだけ早く探さないと。本当は、ぬらりひょんが用意してくれるはずだったのに…全く使えないな。あっ、そういえば手紙で…

「で、相談なんじゃがの？」

「でも、初っ端から迷惑は…「ネギ君。お願いじゃから無視しないでくれんかの？」って、何ですか？」

「ネギ君もまだ１０歳じゃろ？　１人じゃ何かと大変じゃろうから、ワシの孫娘達の部屋に一緒に住んではどうじゃろか？」

「……」

「……」

何て返事をするのが一番効果的だろうか？　取り合えず、この妖怪（バカ）につける薬はない！　だろうか？　どこの世界に教職者と生徒を一

緒に住まわせる学校があるんだろうか…やはり、

「耄碌しましたか、ぬらりひょん」

「ちょっ！？　ワシこれでも学園長じゃよ！？」

「自称だと聞きましたけど？」

「確かに自称学園長の方が似合っているか…」

「師匠もそう思いました？」

「ワシ、最近の扱いが酷すぎる気がするのじゃよ…」

「自業自得です。それと住む所ですが…」

このまま、目の前のぬらりひょん達に任せると大変な事になりそうなので、自分でどうにかしよう。お礼を言う前に迷惑を掛けてしまう事になるけど、この場合は背に腹変えられない。

「ちょっと、心当たりがあるので電話をお借りしてもいいですか？」

「ふぉ？　それは構わんが、麻帆良（ココ）に知り合いなんぞおったかの？」

「困った事があったら、力になるって手紙を貰ってたんです」

「なるほど。して、その人「静かにして貰えませんか？」…はい」

凹んでいるぬらりひょんを横目に見ながら、僕はメモしてきた番号に電話を掛ける。繋がるだろうか？　いるだろうか？　力になって

貰えるだろうか？　数コール後、彼は出てくれた。

『はい。『フォーシーズン』です』

第２２話：来日（上）（後書き）

何だか、無茶苦茶な展開に…とりあえず、無駄に濃い部分を入れてみたｗ　次回、電話先が明らかに！　（バレバレだよね～＞＜

第２３話：来日（下）（前書き）

今回は暗い話に…

第２３話：来日（下）

昼前に、見知らぬ番号から店に電話が掛かってきた。丁度、客が途切れた時間帯だったので出てみると意外な人物からだった。

『あの…、ネギ・スプリングフィールドと言います。えっと…』

「ネギ君か、俺だよ四季だ。何か困りごとかな？」

『四季さん！　繋がって良かった。実は…』

そうして、語られる内容。一言で言えば下らないとしか言いようが無い。確か半年近く前に麻帆良に来る事が決まっていたのに、教職員用の寮を確保出来て無いとかありえないだろう。まあ、彼を生徒達と同じ寮に入れる為の口実なんだろうけど…ちなみに、寮の部屋割りは原作と同じだった。てっきり明日菜と真名、近衛と桜咲の組み合わせになるかと思ったんだが…いや、それぞれを分断する意味ではありなのかもな。

「取り合えず、店に来れるかな？　俺としては泊める事は構わないけど、電話越しでもあれだし…」

『分かりました。これから、そちらに伺います』

「お茶でも用意して待ってるよ」

『はい。それでは…』

ガチャと音がして、電話が切れた。それにしても、ネギ君も災難だ

な。遥々日本まで来たってのに、住む所がありませんとか、学園長も良くやるわ。原作よりも早い来日だけど、その辺は変化しないか。

「さて、今日は店じまいとするか…」

『フォーシーズン』。俺がここ麻帆良で始めた雑貨屋だ。メインの通りから一本脇道に入っている分、客足はそれほど多くないが、常連は意外と多かったりする。明日菜達に連れられてあの２－Ａ原作組が遊びに来てたりするしな。ただ、儲けはほとんどないのが実情だったりする。まあ、仕入れ値より安く売っていればそうなるわ。何だかんだでサービスだの言って、採算度外視しているからしょうがない。黄金率もそれまではカバーできまいて…

「ネギ君、イギリス、ミルクティー…スコーンでも焼くか？」

材料あったかな等と考えながら、遠く英国からのお客さんを迎える準備を始める。さてさて、今頃は学園長室が一体どんな騒ぎになっている事やら…

「一先ず、何とかなりそうです…って、どうかしましたか？　皆さん、そんな顔をして」

「ネギ君。君は…東西南北君とは知り合いなのかね？」

「そうですけど、何か？」

「どこで知り合ったのかね？」

「……」

四季さんの名前が出てから、この部屋の雰囲気が厳しくなった。確かに、あの人の経歴からすれば仕方がない事だろうけど、あからさま過ぎる。多分、英雄（ナギ）の息子である僕が、彼と知り合いだって事が気に入らないんだと想像出来るけど。

「彼がどんな人かは知ってますよ？　手紙で教えてくれましたから」

「悪い事は言わん。彼とは距離を置くのじゃ。彼は危険過ぎる」

「確かに、僕の母方（アリカ）の祖父を殺した人ですからね」

「「「っ！！」」」

「でも、それだけで彼を危険と判断出来ますか？」

確かに、四季さんは数多くの人の命を奪った。僕と血が繋がった人の命も含めてだ…

「父さんも、四季さん程でないにしても人の命を奪ってます」

「それは…」

「『戦争だからしょうがない？』だったら、四季さんだって戦争中の事です。なのに父さん達は『英雄』、四季さんは『危険人物』扱いってのおかしくないですか？」

「ネギ君。問題はそう簡単な事じゃないんだ」

「そうだよ、ネギ君。ナギさん達と彼とでは全く違う！」

「何が違うんですか？」

父さん達は世界を救って、四季さんは世界を救わなかったから？
父さん達の手助けをしなかったから？

「彼は、悪戯に混乱を招いたんだ。ウェスペルタティア王国の国王を殺害した事でどれだけの時間が浪費されたと思う？　あれが無ければもっと早くに大戦は終わっていたかもしれないんだよ？」

「それは、結果論ですよね？　それに、国王が『完全なる世界』の傀儡に落ちていたのを調べたのは誰でしたっけ？」

「そ、それは…」

「結果としては四季さんが国王を殺しましたけど、もしかしたら母さんが殺していたかもしれないんですよ？」

あくまで可能性の話だけど、決して在り得なかったとは言えないと思う。少なくとも、四季さんから貰ったあの本に記録されていた母さんなら、全てを背負う覚悟で父親殺しに挑んだと思う。それ位の覚悟と強い意志を持っていた人だ…

「僕は、今の四季さんは信用するに足る人物だと思っています。ぬらりひょん達がどう思おうと関係ありません」

「ネギ君！」

「話は終わりです。僕はこれから彼と会う約束があるので…」

「ま、待つのじゃ！」

「止められますか？　自分達の正義の為なら人の尊厳すら平気で踏みにじる貴方達が？」

魔法の隠匿と言いながら隠匿意識は極めて薄く、バレたら一方的な記憶の改竄。そんな連中が誰を非難する権利があると言う？　ちゃんちゃら可笑しい話だ。

「僕は、四季さんに教えて貰ったんです。物事には必ず表裏があると…」

父さんは英雄。それは変わらない事実だ。でも、その陰で多くの人が傷ついたのも事実。どちらが正しくてどちらが間違っているなどとはとてもじゃないが僕には言えない。

「加糖さんも、タカシオも、人を殺した事では四季さんと同じなんだ…」

違うのは、それに対して開き直るか、背負い続けるか…

加糖さんとタカシオは開き直った。世界を救う為だったと…仕方が無い犠牲だったと…

四季さんは全てを背負った。どれだけの憎悪を浴びようと…その重さを忘れない為に…

どっちが正しいのだろうか？

第２３話：来日（下）（後書き）

今回はぬらりひょん一行が悪役みたいになってます。明るい話にしようかと思ったけど、こう言った部分も書いておかないとと思って…四季が送った本については次回明らかになる予定です。どうしても展開上でアンチな部分もあるのでタグを追加しておきました。因みにネギアンチはありませんのでご安心を。

第２４話：誤解（前書き）

ガンガン行くぜ！　って感じで投稿ｗ

第２４話：誤解

ぬらりひょんの住処を出てから、しばし歩く。あの後も何だかんだと引きとめようとした、ぬらりひょん組の魔の手を払いのけ、僕は道を急ぐ。余計な引きとめのせいで数時間も無駄にしてしまった。既に時間は3時近く、お茶には丁度いい時間だなと余計な事を考えそうになって止めた。正直、数時間に渡るぬらりひょん達との意見のぶつけ合いには疲れた。

「偉大なる魔法使いを否定するつもりは無いけど…」

世界中には、人々の為に必死で頑張っている魔法使いは沢山いる。でも、一方でぬらりひょん達の様に目的の為なら多少の行為は必要悪と割り切って捨てる魔法使いがいるのも事実。勿論、僕がまだまだ現実を知らない甘ちゃんだって言う事は認識している。でも、妥協して開き直ってまで偉大なる魔法使いになりたいとは思わない。

「儘なら無いな…」

理想と現実の狭間って言うのとは違うかな？　どちらかと言ったら片方を取ったら、片方を捨てるしかないみたいな二者択一ってヤツかな？　ちなみに父さんは馬鹿だったらしいから、きっと迷わず好き勝手やったんだろう。結果として相当の恨みを買ったけどね。それを息子の僕に押し付けて消えるのはマジで勘弁して欲しかったな…

「って、ここかな？」

考え事をしながら歩いていたお陰が、ぬらりひょんの住処を出てから３０分程で四季さんの自宅兼職場（？）に辿り着いた。表通りか

ら一本入った通りに『フォーシーズン』という看板を掲げた店はあった。ショーウィンドウから中を覗いて見ると、お客さんは誰もいないようだ…四季さんは中にいるのかなって、そこまで考えてから気が付いた。　あれ、どうして誰もいない？

ここは学生の街である麻帆良だから、この時間にまだ店内にお客さんがいないのは可能性として十分ある。それでなくても表通りから一本奥に入っているしね。四季さんも手紙でそれほど客足は多くないって言ってたし。でも、ふと振り返った先…さっきまで僕が歩いていた表通りにすら先ほどまでいたはずの人達がいないのはどうしてだ？

「これは…人払い！？」

咄嗟に、その異常性に気が付き隠し持っていた杖（父さん譲渡品）を握りしめ周囲を探る。ここは何かが明らかにオカシイ…

「何が…っ！！」

それに気がつけたのは奇跡だったと言っても過言じゃないと思う。咄嗟に形振り構わず石畳の道を転がりながら避けた僕の真横を、風切り音と共に何かが通過していき轟音を立てて店が吹き飛んだ。

『ゴゴゴォォォン！！』

受身すら取れずに石畳の道を転がった痛みに顔を歪めながら、何が起きたのかと周囲を探る。埃が舞い上がり、細かい破片が空から降ってくる。

「あっ…」

舞い上がった埃が晴れてくるにつれて、僕の目の前に惨状が浮かび上がった。砕け散った石畳の道と、さっきまでそこにあったショーウィンドウが粉々に砕けた『フォーシーズン』の前面。中の様子まではハッキリとは分からないけど、あの威力と衝撃からしてまず無事では済まない。誰がこんな事を！

咄嗟の事で障壁を張っていなかったせいで、あちこち痛む身体にムチ打って起き上がる。杖を掴みなおし、周囲をもう一度探るが特に怪しい点は…

「アンタ、何してんのよ！！」

「…えっ？」

そこにいたのは、僕の髪の色と良く似た色の髪の女性だった。いや、学生服を着ている女子学生と言うべきだろうか？　とにかく、物凄い表情で僕を睨んでいるのだけは確かだ。

「えっと、その僕は「言い訳するつもり！？　その状況で！」あっ…」

そう言われて今の僕の状況を顧みるとかなりマズイのだけは確かだ。人払いの魔法。破壊され滅茶苦茶になった『フォーシーズン』。杖を持った僕。第三者がこの状況だけを見せられたら何と判断するか？

―僕が犯人―

「『咸卦法』…『アデアット』！！」

僕が何か弁明する前に、彼女は大剣のアーティファクトらしきものを呼び出してしまっていた。仮契約を誰かとしているのだろう、少なくとも彼女もこちら側の関係者の様だ。そして、僕を討つべき敵として認識した。例え、それが誤解だろうと簡単には解けそうに無い。状況が悪すぎる…一先ず、無力化を

「考え事している暇ある？」

「えっ…」

一瞬の間に詰め寄った彼女によって、大剣の切っ先が向かって右側から振り抜かれようとしていた。これは確実にマズイ…完全に殺す気で来てる！！

「うわぁぁ！？」

紙一重ならぬ、髪一重で前髪を数本カットされただけで剣先は通過していった。後ろに引いていなかったら、確実に首掻っ切られていただろう。所謂クビチョンってやつ…ってふざけてる余裕がない！

既に、彼女は次の一撃を入れる体勢に入っている。もう１度横薙ぎに…違う！？

「ぐっ…がはぁ！？」

左からの薙ぎ払いではなく、速度が十分に乗った踵が僕を捉えていた。咄嗟に、障壁を張った上で両腕をクロスさせてブロックしたものの防ぎきれずそのまま蹴り飛ばされる。何度か地面をバウンドしながら転がっていき、縁石にぶつかって止まった。

「つう…」

これはマズイ。今の蹴りで両腕が痺れて動かすのが辛い。杖も、転がっている際に落としたらしく手元にない。近接戦は向こうが僕を圧倒しているし、魔法を使いたくても杖が…って、そうだ！

「確か…あった！『パァーン！』えっ？」

コートの内ポケットにしまっていた練習用の杖を思い出し、取り出した途端に杖を粉砕されてしまった。

「悪いが、それを使わせるつもりないよ？」

「えっ…」

その声に、横を向くと僕にライフルと思しき銃口を向けている褐色の女子学生がいた。あれ？　これってもしかして詰んだんじゃないだろうか？　前からは先ほどの大剣の女子学生。横からはライフルを持った女子学生。どちらも僕とは違って明らかに戦闘経験を積んでいる様にみえる。少なくとも2対1の状況で僕に勝ち目があるとは思えない。

「さあ、観念しなさい！」

「大人しくして貰おうか？」

「……」

状況は最悪。この状況からどうやって抜け出せば…

その時、風切り音がして轟音がすると共に、彼女達の足元の石畳が

粉砕され大穴が開いた。咄嗟に彼女達が回避行動を取っていた事から、明らかにそれは僕達以外の第三者の介入を意味していた。

「そこまでだよ、君達？」

「武器をしまって貰えるかい？　明日菜君、真名君？」

「「……」」

その時、一番来て欲しくない正義の味方達がやってきてしまった。

第２４話：誤解（後書き）

さあて、一気にきな臭くなってきました。ネギ君が四季を訪ねる→謎の攻撃→アスマナが登場→誤解されての戦闘→オヤジーズがタイミング良く登場と。さて、次回はどうなることやら？

第２５話：実は…（前書き）

襲撃犯は予想が簡単だったようでｗ

※ちなみに、２２話で夢オチ後に加糖高塩が出てきて無いことに気がつき加筆修正してあります。２３話には変化ありません。

第２５話：実は…

まるで、最初からタイミングを計っていたかのように登場した加藤高塩コンビ。さり気無く彼女達から僕を護る様な位置に陣取る。これで、確実に彼女達は僕と彼らが同類であると認識するだろう。最悪な展開だ…

「これはどういった事か説明してくれるかな？」

「説明も何も、ソイツがうちの店を攻撃したからよ！」

「そうなのかい、ネギ君？」

「それは…」

攻撃などしていない。むしろ、僕も巻き込まれた側の人間だ。では誰が僕に嫌疑が掛かる様にお店を攻撃した？　少なくとも目の前の彼女達じゃないのは確かだ。わざわざ自分達のお店…あれ？　今『うちの店』って言ってたような？　そう言えば、四季さんの手紙に妹が２人いるって…

「あの…お２人は四季さんの妹さんですか？」

その一言で、２人に明らかな反応があった。どうやらビンゴの様だ。これならこの状況を加藤高塩の力を借りずにどうにか出来るかもしれない…

「…アンタ、四季兄を知ってる訳？」

「待て明日菜。口から出任せかもしれない」

「違います！　今日は四季さんに会う為にお店に来たんです。そしたら急に「ネギ君。ここは我々に任せて君は行きたまえ」えっ？」

「そうだよ、ネギ君。彼女達は危険だ。さっきも言っただろう？彼女達の兄である東西南北　四季は…危険だと。その妹である彼女達も同じなんだよ」

「ちょっと、待って「逃げるつもり？」いや、違いますって！」

「悪いが、先生方。邪魔するなら…」

「2人とも、我々に武器を向けると言うのかな？」

「それは、学園広域指導員として見過ごす訳にはいかないな…」

折角この状況を打破出来るかもと思った矢先に、邪魔しかしない加藤高塩が乱入し、そのチャンスが潰えた。四季さんの妹さん2人と、加糖高塩の間で急激に空気が冷めていく。とにかく、ここで両者を衝突させたらマズイって位は僕にも分かる。でも、どうやって止める？　両腕はまだ痺れが残っているし、魔法を使いたくても杖もない。こんな時に四季さんがいてくれたら…って、そんな漫画みたいな展開ないか。

「そう。なら力尽くで…」

「そうなったら、君のお兄さんが困る事になるんじゃないかな？」

「その言葉はそっくりそのままお返ししよう。四季兄さん相手に勝

てるとでも？」

「やってみなければ分からないだろう？」

「「…弱いヤツほど良く吠える」」

「「ぐっ…」」

なんだろう。何だか、加糖高塩ペアが急に不憫に見えてきた。何ていうか？　負け犬属性って言えばいいのかな？　勝てる訳ない相手に戦いを挑まされるモブキャラみたいな…まあ、お似合いだけど。

「えっと、取り合えずお互いに話し合いっていうのは？」

「そもそも、アンタが原因でしょうが！？」

「この状況でまさか開き直るとは…」

妹さん2人に物凄く驚かれている。まあ、確かに僕は濡れ衣だけど騒動の原因である訳で…あれ？　別に僕悪くないはずなのにどうしてこうなった？

「…ネギ君。彼女達は既に君に対して力を振るっている。今更話し合いの余地はない」

「そうだよ、ネギ君。君は来年から教育実習生としてここで教師をするんだ。生徒が教師に対して手を出したのならそれ相当の処分が必要なんだよ」

「でも…！」

この状況はヤバイ。こんな状況を一発触発って言うんだっけ？　とにかく何かのキッカケで衝突が始まったら僕じゃ止められないよ！？

「あうあう…」

「「「「……」」」」

「えっと、あっと、その…！」

「「「「……」」」」

「ケンカは良くありません！」

あー、やっちゃった。僕、この状況で何を言っているんだろうか。そんなんで止まれば苦労しないよ。止まる訳も…

「『ケンカは良くありません！』とか…ぷぷっ」

「えっ？」

「ぷはははははっ！！　いや、もー無理！　我慢出来ない、笑っちゃう…！！」

「ちょっと早過ぎないか？　明日菜」

「いやいや、無理でしょ！？　これでも持たせた方よ！？」

「ふふっ。まあ、気持ちも分からないではないがね…。中々傑作だったよ」

「でしょー？　いや～、最高だわ。特にさっきのフケ顔2号が『学園広域指導員として見過ごす訳にはいかないな…（キリッ』とか、どこぞのナルシスト全開で、こっちは噴出しそうになるの堪えるのに必死よ！」

「えっ？　えっ？」

何で、妹さん達が急に笑い出したの！？　さっきまでのピリピリとしていた雰囲気が、彼女達が笑い始めた事で霧散してしまった。明日菜さんは、お腹抱えながら爆笑しているし。真名さんも、そんな明日菜さんを見ながらクスクス笑っている。ついていけてないのは、僕と加糖高塩の3人。それから明日菜さんは5分以上に渡って笑い続けたのは省略してもいいと思う。

「あー可笑しかったわ…」

「流石に明日菜は笑い過ぎじゃないか？　彼が状況が分からず混乱してるぞ？」

「えっ？　あー、ごめんごめん。えっと、君がネギ君よね？」

「え、ええ、そうです。ネギ・スプリングフィールドです」

「私は、東西南北　明日菜よ。実は君の事は四季兄から事前に連絡を貰ってたの」

「妹の東西南北　真名だ。君が客として家に来る予定だから、もし自分がいなかったら家に招き入れておいてくれってね。その時に君の特徴も聞いていたんだ」

「ええっ！？」

ちょっと、待ってよ！　特徴とか連絡受けてたなら僕が犯人じゃないって直ぐに分かったんじゃ！？

「最初から、犯人じゃないって知ってたわよ？」

「ああ、最初から君を疑ってなどいないさ」

「意味が分かりませんよ！？　お願いです。分かる様に説明して下さい！　って言うか、説明を要求します！！」

「いいわよ？」

あっけらかんといって説明を始める2人に脱力したのは言うまでも無いことだと思う。そうして、始まった説明。僕、泣いてもいいですか？

第２５話：実は…（後書き）

ネタバレ編でしたｗ　最初から分かってて攻撃した２人でしたとさ

ｗ

第２６話：シキ日和？「Ｌｅｔ＇ｓ　Ｐａｒｔｙ！！」（前書き）

ネギへの説明を放置プレーして、四季視点へ移行ｗ

第２６話：シキ日和？「Ｌｅｔ’ｓ　Ｐａｒｔｙ！！」

「期待とは裏切る為にあるｂｙ聖徳太子」って昔の偉い人が言っていたかもしれない。だから、ネギへの説明回は後回しにして、時系列を遡ろうじゃないか。ネギが『フォーシーズン』を爆破する数時間前、お昼過ぎの東西南北家リビングが物語の始まりの舞台である。

「ネギ君。遅いな…」

ネギ君から電話があって既に１時間は経過して、既に昼過ぎになった。麻帆良本校女子中等部の校舎から家まで３０分もあれば辿り着ける。何かの用事で来る時に、迷わない様にここまでの詳細な地図も事前に渡してある。はて、何かトラブルにでも巻き込まれたのか？　俺が言うのも何だけど、ネギ君も原作見る限りトラブルに巻き込まれる性質っぽいしな…

「んー、連絡の取り様がないしな」

折角、お茶の用意もしたと言うのに勿体無い。スコーンとか自信作なんだけどな…。流石に来日したばかりで携帯電話なんて持って無いだろうし、どうするか？

「…散歩がてら探してみるか」

近くまで来ているかもしれないし、ただ待つよりも行動してみるか。遭難した時は迂闊に動くのは自殺行為だけど、こういった時は積極的に動くのも一つの手だ。携帯を取り出し、俺より先に帰ってくる可能性がある明日菜と真名にメールを送る。

『少し、散歩してくる。もしかしたら、赤毛・メガネのネギっていう少年が訪ねてくるかもしれないから、頼んだ。それと、余計なオマケが付く可能性があるから、大歓迎してやってな？　四季』

よし、これで2人なら理解してくれるだろう。あの2人なら何かあっても、俺が戻るまで持ちこたえられるさ。

「さてと、元栓を切って…カギも…」

家を空ける訳だから、ガスなどの元栓はちゃんと閉めていかないとな。各部屋の窓の鍵も確認して、戸締りをしっかりとしていく。まあ、盗まれて困るような高価なものなんて大して無いが、泥棒に入られるのは遠慮したい。

「これで良しと…ん？」

その時、ふとした拍子にリビングのダイニングテーブルの上に置いてあったチョーカーが目に留まった。まあ、これを見るのは初めてではないんだがな…。昨日の晩に国際便で届けられた品物。グラニクスに居た頃の、知り合いに製作して貰った魔法道具と言えばいいだろうか？　本当は、シンプルな十字架のトップが付いたネックレスにする心算だったのだが、明日菜と真名に『絶対にチョーカー！』と強く押し切られコチラになってしまった。チョーカーの何が2人の琴線に触れたのかは知らないが、これはこれで中々良かったかもしれない。

「折角だから、試してみるか？」

本体は黒く、トップにシルバーのプレートが付いたチョーカーを手に取る。ちなみに、プレートには何故か『Ｓｈｉｋｉ』と彫られて

いる。普通、自分の名前なんて彫らないよな…これも妹達に押し切られたんだ。

「鏡はと…」

リビングの隅に設置されている姿鏡の前まで行ってから、チョーカーも首に付ける。生憎と、前世ではこういった類のアクセサリーには縁が無かったので、チョーカーを身に付けた自分を見るのは変な感じだ。さて、後は…

「えっと…」

確か、プレートを右から左になぞれば…おっ？

グニャっと、一瞬視界が暗転したと思ったら、直ぐに元の安定した状態に戻った。

「にゃー？（成功か？）」

ほんのついさっきまで見ていた景色から一転して床が物凄く近い。鏡を見てみると、そこには全身艶やかな黒い毛に覆われた猫が一匹だけ映っていた。瞳の色はブルー、見た感じ生後数ヶ月程度の子猫の様だ。個人的には成猫だとばかり思っていたんだけど、まぁ、いいか…

「にゃにゃー（ちゃんと、チョーカーも収縮してるな）」

それにしても、凄く違和感ないな。普通は人間からいきなり猫になったら、まともに動くだけでも苦労しそうなんだけど…流石は魔法ってか？　って、話に付いていけてない人がいそうだから説明して

おくわ。実は、このチョーカーには使用者を猫にする魔法が掛けられている。元々は、オコジョに出来るんだから他の動物にもなれるんじゃね？っていう安易な発想が元だったんだけどな。実際に調べてみたら、あったんだよ他の動物になる魔法。まあ、俺自身は魔法の才能は皆無だし、魔力も少ないから直には使えないんだけどさ。役に立つかもしれないって思ってグラニクスの知人に魔法を補助する道具の製造を依頼して、どうにか日の目をみたって所だな。

「にゃー！（よし、出掛けるか！）」

って、先に能力がちゃんと猫状態でも使えるか確認しておかないと…

能力が猫の状態でも十全に使える事が確認出来た俺は、玄関から外へと出た。そして、通りに面した玄関の鍵を掛けようとして、そこで気が付いてしまったのだ。

「にゃー！？（鍵どうやってかけんだ！？）」

鍵を意気揚々と口に銜えて玄関を出たのは良い。だが、ここからあの高さの鍵穴にどうやって鍵を差し込む？　爆風操作では難しそうだな…後は直接ジャンプして差し込むか？　でも届くのか…？

「にゃ！（よっと！）」

右にそれた…

「にゃ！（次こそ！）」

届かない…

「にゃ！（もういっちょ！）」

左にそれた…

「……」

完全に想定外な事態に陥った。まさか、鍵を掛ける事が出来ないとは…曲者め！　これでどうだ…！！

ドアから距離を取って、鍵穴目掛けてカギを放り投げる。

「にゃ！（そこだ！）」

鍵は鍵穴に吸い込まれるように直進していき…そして何故か某赤いヤツも真っ青な実に３０倍にも加速して跳ね返ってきた。

「にゃ！？（嘘っ！？）」

真っ直ぐに自分目掛けて跳ね返ってくる鍵。

「にゃにゃ…（無念。ここまでか…）」

まさかのお約束が来るとは予想できていなかった俺に回避すべき手はない。いや、爆破はどうしたって？　それはここでは使わないのがお約束だぜ？　お約束にはお約束で返す。これが真骨頂ってモンよ！！（違っ

「にゃ、にゃ…（明日菜、真名…）」

後僅かで俺は鍵に吹き飛ばされてその猫生（じんせい）を終える。せめて、明日菜と真名の花嫁姿が見たかったのと思いつつ、目を閉じた…Ｆｉｎ

（嘘

第２６話：シキ日和？「Ｌｅｔ＇ｓ　Ｐａｒｔｙ！！」（後書き）

四季死す。さあ、シキはどうなる！？
ネギ？　それは、鍋の材料ですが何か？

第２７話：シキ日和？「マジで…？」（前書き）

前回に続いてシキ視点です。先に言っておきます。今回の話はキャラクター崩壊が悲惨な程にいってます。ですので、気をつけてお読み下さい。

第27話：シキ日和？「マジで…？」

良く、人は死に際に瀕すると過去の出来事を走馬灯の様に見るなんて言うけど、まさにその通りだった。この世界に転生し、アスナと出会って、旅をして、光輝と出会って、マナと出会って、旅をして、麻帆良に来て…悪く無い猫生（じんせい）だったな…

『バシッ！！』

「大丈夫ですか？」

「…にゃ？（…ん？）」

来るはずの痛みが何時までも来ない事と、誰かが自分の近くにいる事に気が付き恐る恐る瞑っていた目を開ける。すると、目の前に特徴的なアンテナと緑色の髪をした女子学生が立っていた。その手には俺の命を奪う寸前だった鍵がしっかりと握られている。っていうか、明らかに人間じゃないな。ぶっちゃけ、あの絡繰茶々丸だよ…

「…にゃ！？（…絡繰茶々丸！？）」

「取り合えず、怪我はないようですね？」

「…にゃー（…そうみたいだな）」

「それは何よりです。それで…」

絡繰は手に掴んだ鍵を俺の方に見せながら、問い掛けてきた。

「ここは貴方のお家ですか？」

「にゃー（実は家主だな）」

「では、この鍵はこの家のですか？」

「にゃー（おう）」

「鍵を掛けたいですか？」

「にゃー（勿論）」

分かりましたと呟くと、彼女は手に持った鍵をドアの鍵穴へと差し込んで回した。カチャリと音がして、鍵が掛かったようだ。何度かドアノブを捻って、しっかりと鍵が掛かっている事を確認した彼女は鍵を俺の足元へと置いてくれた。

「これで大丈夫ですか？」

「にゃー！（助かった！）」

「どう致しまして」

そう言って、僅かながら微笑む彼女。それにしても、どうして彼女が俺の家の前にいたんだろうか？　現在まで彼女の主である『闇の福音』とは接触していない。まあ、向こうは俺の存在に気が付いてはいるだろうがな。少なくとも俺から接触をはかる心算はない。さて、他の理由はと言うと…

「…にゃー（…なるほど）」

彼女の手に握られたビニール袋。その中身には猫缶が幾つか入っていた。そう言えば、原作でもどこかの広場で猫達に餌をやっていたっけ。多分、近くのショップだかで安売りしていたんだろう。そう考えると全ての辻褄があう。

「これが気になるのですか？」

「にゃ？（えっ？）」

そう言って、彼女は俺の前に袋の中の猫缶を一個取り出して見せてくる。

「にゃ、にゃ…（いや、流石にそれはいらないわ…）」

「もし、良かったら広場に一緒に行きませんか？　他の猫達もいますよ？」

「にゃー（んー）」

「ダメですか？」

そう言って、小首を傾げる絡繰。ガイノイドって、こんな人間くさい仕草も出来るんだな。それに、中々可愛いと思ってしまった。だから、つい行方（ネギ）不明者の捜索をその場で打ち切ってしまった。

「にゃー！（行こう！）」

「では、失礼しますね？」

「にゃ？　にゃー！？（えっ？　えぇー！？）」

わきの下に手が伸びたかと思うと、あっという間に抱き上げられて絡繰の腕の中に収まる形になってしまった。視線が下がったり、上がったりと忙しい日だな今日は…

「広場までそこそこ距離がありますので、この方が楽だと思いますよ？」

「にゃー（ご好意に甘えよう）」

「えっと、シキ…君ですか？」

チラッと、下の方を見てからそう俺に尋ねてくる。今、どこ見た！？　今、どこ見た！？　どこを見たー！！

「大事な事なので2回言ったんですね？」

「にゃー！（地の文に突っ込み禁止！）」

「ふふ、それでは行きましょう、シキ君？」

「…にゃー？（…キャラ違くないか？）」

「禁則事項です♪」

「……」

どうやら、俺の知らない所で大きく原作が崩壊しているようです。ネギに会う前に既に絡繰が成長している。しかも、おかしな方向に

！　俺が原因じゃないよな！？

「ここです。ちょっと、待ってて下さいね？　用意しますから…」

「にゃー（俺食べないからな）」

「好き嫌いは良くありませんよ？」

「にゃ！　にゃ！？（違うわ！　そもそも、何故言葉が分かる！？）」

「愛です」

「…にゃー（…意味が分からん）」

「A・Iがとまらない？」

「にゃあ！！（はい、アウト！！）」

つ、疲れる。完全に絡繰のペースに呑み込まれているぜ。こんなキャラじゃないだろう！？

「人を見かけで判断してはいけませんよ？　めっ！」

「にゃう…（勝てねえ…）」

まるで出来の悪い弟（俺）を叱る姉（絡繰）の様だ。実は、この世界で最強なの絡繰なんじゃね？って思ったりも…まさかね…あはは。ねーよ！　ねーよ…　ないよな！？

「むっ。そこにいるのは茶々丸か？」

「これはマスター、この様な所でどうされたのですか？」

そうこうしている内に、どこからともなく現れたのが絡繰の主である『闇の福音』ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだった。これは、予定外だな。絡繰だけでなく、彼女にまでバレないとは思えない。どうやって切り抜けるか…

「いや、ジジイに様があったんだがな。立て込んでるらしく出直す事になった」

「そうでしたか」

「お前は、猫に餌…おい、茶々丸。ソイツは何だ！」

流石に『闇の福音』には直ぐに気づかれたか。まあ、絡繰も気が付いてはいたんだろうけどな。いや、素で気づいてなかった可能性も捨てられない！　この絡繰なら有り得る…

「何だとは何でしょうか？　マスター？」

「その猫だ！　明らかに魔力を感じるじゃないか！？　どこぞの正義（バカ）どもの使い魔かもしれんだろうが！！」

これは、少々マズイ状況だな。絡繰に余計な迷惑を掛ける前に撤退

するとしよう。さて、退路はと…あ、あれ？　また視線が上がった？　また絡繰かー！！

「もしかして、この子の事を言っているのですか？」

「にゃ、にゃ！？（マ、マズい！？）」

「そうだ。他にいるハズがないだろうが、ボケたか茶々丸！」

「……」

「お、おい。何か言ったらどうだ！？」

「…ボケたのは、貴女の方です。マスター」

「な、何だと？　もう一回「ボケたのは、貴女の方です。マスター」なぁ！？」

あれ？　何だろうこの展開？　絡繰が主であるエヴァンジェリンに暴言吐いてる？

「き、貴様！　言うに事書いて主である私にボケただと！？」

「そうです。何かおかしいですか？」

「しょ、正気か！？」

「はい。自己チェックでも異常は見られませんが？」

「な、な、な…」

ああ、エヴァンジェリンの顔が真っ赤になっていく。まあ、普通は従者に真顔でバカにされたら頭に来るわな。もう直ぐキレるぞ…アレ。

「そもそも、マスターは知らないのですか？」

「…な、何をだ！？」

「可愛ければ、全て許されるのですよ？」

「……はっ？」

「にゃ？（はい？）」

「使い魔だろうと何だろうと、可愛ければこの世では絶対の正義なんです！　この子のつぶらな瞳を見てください！　マスターみたいに、汚濁して混濁したガラス玉以下のモノと比べて見てください！　何て透き通った目でしょうか！？　この子が白と言ったら、私は絶対に白と言います！」

何だろう。この変な展開…誰が予想した？　むしろ、誰だ！　絡繰をこんなにしたの！？　頼むから、普通の絡繰帰って来い！！

「い、いや茶々丸。可愛いのが正義なら私だって「本気で言っているんですか？　マスター？」えっ…」

「６００年も生きたエターナル違法ロリババアが、自分の事を可愛いとか正気ですか？　精神科にでも通院する事をお勧めしますよ？　病院を探しましょうか？」

「…エターナル違法ロリババア…エターナル違法ロリババア…エターナル違法ロリババア

「にゃ？（にゃ？）」

絡繰は抱いていた俺を何故かそこにあった『みかんのダンボール』の上にのせてから、こう尋ねた。

「問おう。貴方が私のマスターか？」

「にゃ！（違う！）」

第27話：シキ日和？「マジで…？」（後書き）

先に言っておきます。作者は決してエヴァが嫌いな訳ではありません。むしろ、好きです。でも、壊れた茶々丸を書いていたらこうなってしまったんです！　信じて下さい！　次回はシキ視点からネギ視点へと戻りますｗ

第２８話：解説（前書き）

お待たせしました。視点がネギに戻ります。シキ視点はただのギャグですｗ

第２８話：解説

「丁度、大通りで何やらメモを片手にキョロキョロしている君の後姿を見つけたのよ。で、君が家の前まで来たら人払いの結界でしょ？　これは予想通りにオマケが付いてきたなって思ったわけよ」

「そしたら、兄さんの店が派手に『ドカンッ！！』だ。まあ魔力を感じなかったから、その時点で君自身は犯人から除外できた」

なるほど、そこまでは一応筋が通っているよね。それにしても、四季さんは予めそう言ったことまで予想していたんだ。経験の差って言うのかな？　それともここが麻帆良だからだろうか？

「後は、君を利用して馬鹿を炙り出したってわけ」

「大方、君と兄さんが接触するのを好ましく思わない連中だろうからね。君を追い込めば確実に出てくると踏んだのさ」

それも理屈としては理解出来るんだけど…あそこまで本気で僕へ攻撃する必要あったのかな？　本気で死ぬかと思ったんだけど…

「本当に斬られるかと思いましたよ…」

「その方が面白いじゃない？」

「同感だな」

「「あはははははっ！」」

「鬼だ…この人達！！　僕で遊んでた！？　きっと、僕が死んだら『おお、ネギよ。死んでしまうとはｒｙ』って言って笑ったんだな！！」

「「否定できない！」」

「ｏｒｚ」

神様。僕は何か悪い事をしたんでしょうか？　今日あったばかりの人達に遊び半分で殺されそうになりました…

「まあ、ネギ君の尊い犠牲で「死んでません！」。まあ、尊い犠牲で「流された！？」うるさいわよ！！」

「明日菜。少しくらいは喋らせてやれ。もしかしたら遺言かもしれないぞ？」

「あー、そうね。で、何？」

「あのー。遺言って？」

「ネギ・スプリングフィールドここに永久に眠る…」

「……」

「「……」」

神様。僕は悪い事をしてないはずなのに、今日で死ぬそうです。世の中ってどうしてこんなに不公平なのでしょうか？

「で、いい加減に話を戻すわよ？」

「脱線させたのは明日菜さん達じゃ「何か、言ったかしら？」…イエ、ナニモイッテマセン」

怖い怖い怖い

「魔力を感じなかったのも、そこのフケ顔の技なら説明が付くしね？」

「そう言えば、『出会い系』って言う技術だかの使い手だって何かの雑誌に書いてあった様な？」

「「居合い拳だ！！」」

「つまり、その2匹は変態だって事ね」

「ドが付く変態だな」

「変態だったんですか…」

「「ｏｒｚ」」

あれ？　落ち込んじゃった？　おかしいな…本当の事ならむしろ喜ぶんじゃないのかな？　変態って変態って言われると快楽を覚えるって話を聞いた気が…確か加藤高塩みたいなのをドＭって言うんだっけ？

「四季さんのお店を壊した、犯人なんですか…？」

「ち、違う！　ネギ君、君は騙されているんだよ。彼女達の言っている事は口からの出任せに過ぎない！」

「そうだ。あくまで仮定の話だろ？　むしろ、彼女達の兄である東西南北　四季の自作自演じゃないのかい？」

「四季兄がそんな事をわざわざするメリットがないわよ」

「どうだか分からないだろう？　彼はあの有名な『薄汚れた英雄』だ。姑息な手段の１つや２つ…」

「少し黙れ…それ以上、四季兄さんを侮辱するな。それとも黙らせようか？」

「ええ、そうね。四季兄をまだ侮辱するのなら、容赦はしないわよ？」

再び、明日菜さんと真名さんが武器を構えた為に一触即発の状態へと急転直下する状況。ただ、今度ばかりは僕としては構わないかなとも思う。少なくとも、明日菜さん達の仮説が正しいとするならば、加糖高塩のバックには間違いなく、ぬらりひょんがいるだろう。恐らくこんな計画だったのはずだ…

僕が店を訪ねるタイミングで攻撃を加える。店内に四季さんが居て怪我でもすれば、恐らく僕と四季さんの間が険悪なムードになるだろう。そこへ何気ない顔をして加糖高塩が介入すればいい。或いは今回みたいに明日菜さん達が居たとしても同じだ。彼女達が僕を攻撃したという事実を持って、四季さんに何らかの圧力を加えられる。どっちにしろ、学園側は僕を四季さんから遠ざけられる。そこまでして、僕と四季さんを近づけさせたくないのだろう…

「反吐が出る…」

「そんなモノよ？　彼らの盲目の正義なんて」

「彼らのせいで、地道に人の為に働いている本物の魔法使い達が馬鹿をみる」

「それは違う！　むしろ、君達の様に管理下にない力がどれだけ人々に不安を与えると思っている！？」

「過ぎた力は争いを生むんだよ、ネギ君。時には力で力を抑えるしかない時がある。君も何時か分かるはずだ。僕達のやり方が結局は一番正しいんだって事がね？」

過ぎた力…それって、父さんも含まれるよね？　危機的状況から世界を救ったほどの力だよ？　それが何らかしらの理由で人々に向けられたとしたらどうなるか…

「結局は、正当化しているだけなんですね？　力を振るうだけの正当な理由がないから…」

「違う！　僕達は…」

「真実を知った後も、父さんは僕のヒーローです。勿論、世界を救う為に多くの命を奪ったのも事実です。馬鹿で思い立ったら猪突猛進で、考えるよりも先に手が出るタイプで…でも、少なくともお前達みたいな…歪んだ自己満足の魔法使いじゃなかった！！」

「「っ！？」」

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル…」

第２８話：解説（後書き）

ネギは大戦での真実を知りつつも、まだナギをどこか美化してます。まあ、年頃のヒーローに憧れる男の子にありがちな事ですね。さて、次回は加藤高塩ＶＳアス・マナ・ネギでお送りします（予定）。これ…オヤジーズ退場フラグか？

第２９話：開戦の狼煙（前書き）

加糖高塩ＶＳアス・マナ・ネギと言っていたけど、実際は…こうなった。ワン・ツー・スリー！

第２９話：開戦の狼煙

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル…」

「ま、待つんだネギ君！」

「止めるんだ！！」

ネギ・スプリングフィールドが魔法詠唱を始めた事で慌てだした加糖高塩。だが、その言葉が彼に届く事はない。既に彼の頭の中を支配するのは、歪んだ正義への怒りのみ…

サウザンド・マスターと呼ばれる英雄ナギ・スプリングフィールドを父に持ち、ウェスペルタティア王国の王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアを母に持つネギ・スプリングフィールド。原作とは違い、自身の内に秘められし膨大な魔力と時間を掛けて向き合い、その制御を完璧な状態にまで出来るようになっている。

「来たれ雷精、風の精。雷を纏いて　吹きすさべ南洋の風…」

彼が現状で最も信頼している雷系の魔法が解き放たれ…！！

「雷の『ゴスッ！！』ゲボらはっ！？」

放たれなかった。彼が最後の言葉を紡ぐ前に、鳩尾に拳がめり込んでいた。その拳の持ち主は、高塩。魔法使いにとって詠唱中は最も集中しているタイミングで、逆に防御は皆無となる。結果として、彼らの実力を持ってすれば、まだまだ半人前のネギに一撃を見舞う事など容易い事だった。

「すまない、ネギ君」

「…た、高」

苦痛に屈し膝を地面についてしまったネギ。だが、彼の瞳から光は消えてはおらず、目の前にいる高塩を怒りの篭った目で見ている。その目は、未来の同僚に対してのモノなどではなく、敵に対するモノだった。

「許してくれとは言わないよ。でも、これが一番良い方法なんだ」

「…ぐっ…」

必死に膝に力を入れて立ち上がろうとするが、内臓にまで達しているであろうダメージが早々に回復するわけも無く、ネギは１人苦しんでいた。そもそも数えで１０歳の子供が、いい年した大人の大人気ない一撃に耐えられている事自体が異常なのだ。

「無理に立たない方がいい。威力を抑えたとは言っても、内蔵にまで衝撃は伝わっているだろうからね」

「……」

表情変えず子供に一撃加えた大人と、苦しそうにしながらその大人を見上げる子供。何て非現実的な場面なのだろうか？　だが、ここは麻帆良…非現実が現実とされ、それを疑問に思う事は極僅かな陸の孤島。

「僕としても、こんな手荒な『パスッ、パスッ』っ！？　がぁぁあ

あ！？」

本来の彼ならこんな狙い済まされた攻撃など簡単に交わせただろう。だが、英雄として憧れを抱いた魔法使いの息子が、自分に対して敵意を向けている。それだけで、彼の気を逸らすには十分だったのだ。正確無比な狙いによって、左肩、左肘を撃ち抜かれ苦痛の表情を浮かべる高塩。一先ずその場を飛びのいたものの、出血と痛みに片膝を突き、無事だった右手で止血しようとするが指の間から鮮血が零れ落ちる。

「タカミチ！？　ちっ…！」

「背中から撃つのが卑怯などとはほざかないで欲しいな？」

ネギに気をとられた高塩を撃ったのは、消音器（サイレンサー）付きの拳銃を手にした真名。敵が背中を向けているのだから、そのチャンスを無駄にする彼女ではない。最も、相手は担任と副担任なので殺しはしないが、病院送り位にはするだろう。元々、担任・副担任のくせに出張ばかりしている2人は生徒達からは良く思われていない。むしろ、代行している新田先生の方が厳しいけれども人気があるのが事実。

「明日菜！」

「任せて！」

「くうっ！？」

決して浅くはない手傷を負い不利な立場になった高塩の懐に、明日菜は一気に入り込む。相手が手傷を追っていようと遠慮は無用。むしろ、余計な情けが自分や家族を危険に晒すと彼女は知っている。

「はぁぁぁ！！」

「…っ！！」

「させん！！　「私を忘れないでくれないか？」　っ！？」

必死に回避行動に入った高塩を援護しようとする加糖だが、彼の前には真名が獲物を持って立ちふさがる。そして、彼女の両腕によって支えられているモノが目に入った瞬間、彼は攻撃よりも回避を選んだ。

―正しくは、回避しか選べなかった―

それは、本来ならば人が生身で扱う様な代物ではない。大空を鷹の様に舞う『鉄の鳥』達の爪だ。ローマ神話に登場する火の神の名を冠するソレは『Ｍ６１バルカン』と呼ばれている。黒光りするボディ、そして６本並べられた砲身が甲高い回転音と共に回転を始める。口径２０ｍｍ、毎分６，０００発、弾速１，０５０ｍ／ｓのバケモノ。それを１０代前半の少女が涼しい顔しながら構え、獲物に狙いを定めている。人が作り、生身の人には使えざる代物…それを彼女は使いこなす異常。正に、魔法…

「避けてくれよ？　当たるとミンチ確定だから…」

誰もがその言葉を死刑宣告と受け止めるだろう。そして、銃口が火を噴いた。

「っ！！」

加糖は全力で回避行動を取っていた。反撃を試みようと思いつつも、そのチャンスが生まれない。ほんの僅かな動作の隙すら敵は与えてはくれない。２０ｍｍもの弾丸が掠めただけでも生身の人間にとっては致命傷になる。居合い拳で狙おうにも、彼女もまた正確な射撃をしながら、自分よりは遅いものの十分に喰らい付く速度で迫ってきている為に、手が出せない。想像して欲しい、どこの世界に１００ｋｇ以上の重量を誇るバルカン砲で正確な射撃を加えつつ、街中を疾走出来る少女がいると言うんだ。いや、正確には探せば幾らでもいるだろうが…

「くうっ…！！」

地面を、建物の壁を、街灯を、あらゆる物を踏み台にして加糖は回避行動を続けるが、追撃者の少女はそれを完全に見極めていた。この状況でも彼女は冷静に加糖の動きを予測していた。次にどこを踏み台にするか、どこへ逃げ込もうとしているのかを…だから、彼女は武器を状況に合わせる事にした。

「はぁ…、はぁ…、はぁ…」

加糖は何度か急激な方向転換を繰り返した上で、建物と建物の間にある細い路地へと駆け込んだ。ゴミ箱や、捨てられた絨毯やらダンボールやらが散乱している薄汚い路地。そして、加糖は上を目指した。薄暗い路地裏の中で建物の壁を利用して上へと駆け上がる。追跡者の少女が路地裏に入ってきた時に自分が丁度上を取れるようにと…その考えすら読まれているとは露知らずに。

「……んっ？」

ほんの一瞬、不自然さに疑問を感じてしまった。その一瞬の刹那で

疑問を感じず、直感に従って全力で回避行動を取っていれば避けられたかもしれない。だが、既に時遅し…

―オレンジ色の強烈な流星が彼の右腕を喰い千切った―

「あああぁぁぁぁああァァぐぇら亜ｓｇさあｇｒうぇｇふぁｓｄ！！」

激痛で意識を手放す直前の彼の目に映ったのは、穴が開き湯気を立てて融解している建物の壁だった。その穴の先に何が見えたかは不明。いや、彼には見えたのかもしれない。自分の右腕を喰らい千切ったそのモノの正体が…

「なに、唯の電磁投射砲（レールガン）だよ」

追撃戦をこなして汗１つかいていない射手（ガンナー）は、そう呟いた。

第２９話：開戦の狼煙（後書き）

はい、マナＶＳ加糖です。終始マナが圧倒する形に…ん～加糖を弱くしすぎたかな？　まあ、マナのアーティファクトが反則だってだけですが…詳細は何れ明らかにします。では、次はアス・ネギＶＳ高塩になりますように！　まさかのシキか！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0833x/

魔法先生ネギま! 〜オスティアの閃光〜

2011年11月26日01時18分発行